

東方希望録

慎司@異人

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

・・・俺は、能力を持っていた。

親がいた。しかし、してくれたことは、家事と、愛情を注ぐことだけだった。

それもこれも、能力のせいなのだ。

俺は人前で能力を隠してきた。しかし、《あの楽園》に行けば、そんな必要はなくなつた。

これは、そんな希望の物語。

処女作です。なので、生暖かい目で見守って下されば幸いです。

目次

設定、キャラのまほろば。	1	たどり着くは本の山	38
シーズン1ープロローグ〜紅霧異変の		知るも知らぬも	42
章1		ナイフと札と炬	46
第1話 幻想入り	7	博麗の巫女	50
第2話 指輪＋希望＋魔法使い		紅き王	54
?	11	止まらないオーバードライブ。対処法	
講義と問いと開幕	15	は？A. 壊せばいい。	57
襲い来る闇	19	対極	62
邂逅と協力	23	”創る；者、”壊す；者	66
狼と拳法家	28	少年は希望となりて	70
偶然発現したあの神拳。	32	ほんとうは	76
		希望の光	80
		希望の休日	

終わって。 | 87

始まりのおふぎけ | 96

妹様の思し召し | 99

スペルの更新 | 104

報告。そして開幕 | 108

氷解 | 春雪異変の章

飛び立つ希望 | 112

冬の雪って、特別な気分にな… | 116

ネコ科は白狼にとつての… | 120

人の形、人でなし。 | 126

夜月白狼：オリジン？それともリリイ | 132

？とりあえずトラウマで。 | 132

ブリズムヲーって、やっぱり名曲だと | 132

思う。 | 141

The wheel fate

is turning. lev

ell. action! | 145

The wheel fate is

turning. level

2, action! | 149

飄々として咲く死の花 | 152

不完全なる開花、完全なる救い。 | 157

157

氷解、夜桜の下。 | 161

OVA的な感じの一休み。

ようこそ、霊力至上主義の楽園へ

歴史って、勝者の記録だろ？	209	自由と平和を守る戦士達	171
――		思わぬ成就	180
		作ろう、実力主義の教室を！	186
		Cryする夜	190
		始まりはいつも突然、終わりも突然。	195
		当然だな。	195
		永夜異変の章	199
		始まりの夜に	199
		蛍、命の輝き。	203
		光は音よりも早い。常識だな。	203
		み。	209
		リアルだと夏休みの終わりに書いた一	209
		教師、いたずら阻止の段	249
		中立だからこそ。	253
		犠牲から生まれた日常	245
		月まで照らせ、希望の光。	239
		偽りの月の真相	234
		揺れた、歪んだ世界。	229
		225	225
		紅き瞳：サングラス：うっ頭が	221
		潜入、永遠亭！	217
		弾と人形、刀と剣と。	214
		バトルロイヤル、デュエツ！	214

花が咲き誇る花映塚と巻き起こる萃夢想
編。

限定依頼	265
裁くのは…俺の恋人だーッ!	269
酒飲む鬼	274
巫女と鬼と。	278
無双するhope! (前編)	281
無双するhope! 後編	284
大いなる鬼、小さきボトル。	288
(物理的に) 大いなる鬼	292
搦め手	296

者《クリエイト・デストロイ》

破界者《「追想」外の世界》	303
真の対極、あるいは裏。	309
知らなかったこと about 白狼	318
黒兎チェンジ・トゥワイス	325
白狼と未来と愛する事	337
シーズン2 記憶を追う者《メモ	
リーズ・チェイサー》プロローグ	
新たな力、あるいは祝福。	344
Fake usual days	352

番外編など。

一周年記念！

358

祝・10000UA達成記念！

363

四月一日、甘い嘘

369

使用者く【追想】外の世界く

381

いつかの11月17日

386

設定、キャラのまほろば。

夜月白狼

やづき

しろう

能力

ありとあらゆるものを創造する程度の能力

容姿

白に近い銀髪

性格

飄々とした性格。しかし自分に自信のある様な発言をしたくない人。

我らが主人公。中三の夏、いつもの帰り道の途中、紫のスキマによつて幻想入りを果たす。

幻想入り直後、紅霧異変が発生したため、解決するために動き出す。

スペルカード

力剣符　パワーソード…白狼が最も多用するスペル。腕や足に使うことで腕力、脚力を強化することもできる。

盾符

ドラゴンシールド…白狼の主な防御スペル。竜の顔を模した盾を”創

る”。しかし、割と脆い。

翼符

ドラゴンウイング…白狼の背に竜の翼を”創る”。別にこれが無くても空

は飛べるが、機動力は翼があつたほうがいい。

銃符　　ニードルリボルバー：針状の銃弾を撃ち出す銃を、創る、スペル。リロード不要。ある程度までなら弾は誘導する。

希望　　ウィザード：仮面ライダーウィザードの力を、創る、。本人のものと違い、魔力の制限はない。ただし、スペカであることに変わりはないため、時間制限はある。

剣撃符　　絶力破：アバンストラッシュの動きで、衝撃波を撃ち出すスペル。力を表すパワーソードでさえ抑えている力を少しばかり解放しているため、弾の強度は高い。

剣撃符　　絶力剛破：上のスペルの強化版。上位互換。ただし、大技な分、もちろん消費霊力は多い。

創符　　創世眼：ザ・クリエイティブ・アイズ。夜月家秘伝の能力、その真髄。イメージによって”創り、出す通常の”創造、と異なり、”創りたい、”と思った時に世界の情報から”創り、出す。さらに、この眼を使っている時のみ、ルールや概念といった、非物質までも”創る、”ことができる。

主なスペルカードはこんなところ。

以下、主人公制作に関する裏話。

元々ノートに中学の時書いているオリ主最強チート系の小説。タイトルを東方異人

伝。しかも主人公の名前はリアル作者の名前。能力と性格はそこから。既にノートの方は別のアニメの世界編を書いており、10冊を超えている。夜月白狼の名は、その内の一冊で、ifとして幻想入り前に主人公が死に、神の手でドラクリ○ツトの世界に転生した主人公の名前。容姿はそこから。こっちの性格は、完全な真人間で、二重人格。裏人格を黒狼（くろう）といい、感情をプラスとマイナスで二分している。まあ、希望録における白狼にはそんなことは全くない。今思えば、中学の頃に書いていたわけだから、あの頃の作者は、かなりの厨二病であったわけで、さらにいえば、今の作者はそれをリメイクしながら書いたものをあげているわけだ。…書いてて脇腹が痛くなってきた。しかしまあ、こういう主人公ができたのにも理由があり、f a t eのイリヤや、リリなのプレシア、アリシア、アインスなど、アニメでは救われずに死んでいく様な人たちが多数いる。それが嫌だった作者が、絶対に救える主人公を作つてそういうお話を作つて自己満足したかったわけである。他にも、とある妹様が大好きだから能力を逆にしたとかがある。白狼は、いろいろなものごつた煮でできているのであった。

創世者

ザ・クリエイター

能力

ありとあらゆる創造を操る程度の能力

容姿 黒髪の白狼。

性格 真面目。厳格。前時代型オトン。

初代創世者。種族はあの蛙神や御柱神と同じく神。つまり白狼は某常識に囚われなくなった風祝と同じ種族である。

創世者は世界そのものを「創った」。今は一族の中で能力に覚醒したもののの中で覚醒者を見守っていた。自分の力を受け継ぐに足る人物と認めた時のみ現れ、力を授ける。それが今代は白狼だったわけである。創世者本人の体は既に死滅している。

制作秘話

中学のノート時代からなんの変更もしていないオトンキャラ。イメージはFGOのじいじ。(え？うちにいるかって？よし、うちの星5を言っていこう。青王、嫁セイバー、沖田、弓王、槍玉藻、スカサハ、マーリン、諸葛、メルト、ジャック、オジマン、ドレイク、狂王、土方。以上だ。後はわかるな?)白狼に比べると、助けたい欲は小さいが、実力はやはり歴代最強である。まあ、その力を百パー白狼に譲渡するわけだから、チートになる。某お兄様みたいに!

朝日 黒兎

あさひ

くろと

能力：ありとあらゆる触れたものを破壊する程度の能力

容姿：太陽の黒点のように黒い髪。兎のように赤い目。

性格：白狼至上主義。

今代の破界者。66話にて主観となり、初登場。

外の世界より、白狼を見守ってきた。（黒兎談）

しかし、その実、白狼がいじめられていたのを傍観していただけである。

”壊す；；力に目覚めてからは、白狼を守るために行動し、世界中の人間を一人残らず壊した；；。”

昔に交わした約束をもう一度果たすため、幻想郷へ向かう。

壊符 破界眼：ザ・デストロイ・アイズ。朝日家秘伝の能力、その真髄。触れた

ものをなんでも”壊す；；力を強化しないし、凶化させる。創世眼と同じく、非物質に介入もでき、並大抵のものはヒトの反応速度を超える速さでモノを”壊せる；；。ただし、物質を”壊す；；とき、非物質は”壊せない；；という弱点を持つ。が、基本的にルールを

弄れるのは白狼くらいのため、弱点になっていないのが現実。

破界者

ザ・デストロイヤー

能力：ありとあらゆる触れたものを破壊する程度の能力

容姿：銀髪の黒兎

性格：軽く、乱暴。戦いにおいては容赦なし。ただし慢心する。

黒兎の先祖。黒兎が殺される直前に素質を見抜き、黒兎の死を「一時的に」壊す、ことで救う。創世者の弟である。割とフレンドリー、かつ、人を小馬鹿にしたような態度をとる。黒兎を子兎、白狼を子狼と呼ぶ。

この世の果てにおいて、世界を「壊す」者。

俺の叫びは、虚しく響くだけであつた。だが、いつまでもこうしてはいられない。

「あまり使いたくはないが・・・仕方ない。」

俺は能力を使う。といつても、欲しい物を、想う；だけでいいのだが。

俺の近くに、先程乗つていた自転車を、創る；。

「さて、飛ばしていくぜ！」

辺りを突つ切る。

こうして、俺の幻想郷ライフが始まつた。

のだが。

「あれ？」

体が動かない。いや、体だけではない。雲の動きも；止まつている。

「ツ！」考えられるのはただ一つ。

『いきなり時止めの能力者かよ・・・』

時止めといえば、とある邪悪な吸血鬼を彷彿とさせるが・・・

しばらくして、その時止めは解除された。

体が動くようになる。

「・・・何だつたんだ、今のは。」

この時の俺は気づいていなかった。

「……」

悪魔の妹と呼ばれる少女が、珍しそうにこちらを見ていたことに。

さらに俺は自転車を走らせ、湖に出た。少し疲れた俺は、そこで休憩を取ることにした。

「うし、デイ〇ゲすつか。」

前に、創った、スマホを起動する。そこで俺は驚く。

「!？」

スマホの上らへんに表示されているはずのアンテナが一本も立っていないかった。

「え……じゃあ……」

無論、ゲームはできない。

「ウソダドンドコドーン！」

本日二度目の叫びは、眠っていた氷精を起こすのに十分すぎる大きさだった。

そして、当然だが、眠りを邪魔された方は怒る。結果。

「アタイの眠りを妨げたのはどいつだっ!？」

こうなる。だが、こちらには聞こえていなかった。それが氷精、チルノの感に触ったらしく、

「アタイを無視するなああああああ！」

と、突然弾を放ってきた。

俺は、そこでようやくチルノに気づき、

「……、ドラゴンシールド、！」

カンツ！というとても軽やかな音と共にチルノの放った弾は放った本人に当たったのだった。

「へぶっ!？」

「大声出して襲ってくるからだ。このド阿呆。」

その発言がチルノの大して高くも無いプライドに傷を付け、さらに怒らせてしまう。

「言ったなー！もうどうなっても知らないっ！」

そう言つてチルノは何かのカードを取り出し、宣言する。

【氷符】、アイシクルフォール、！」

俺の左右から氷の弾丸が迫る。

それに俺は、

「……後悔すんなよ。」

とだけ言っておくのだった。

第二話

指輪十希望十魔法使いⅡ？

創造する。

想像ではなく、”創造する”。

今一番自分に必要な物を。

「ウイザード、」

そして、その名と共に現れるベルトと指輪。しかし、こうしている間にも、チルノの放った弾は迫っている。

俺は、右手に嵌めてある盾が描かれた指輪をベルトにかざす。

・デイエンド・プリーズ・

そんな電子音と共に魔法陣が現れ、弾を防ぐ。

「な!？」

チルノが驚いているが、もう遅い。こっちはもう闘る気まんまん。ベルト、『ウイザードライバー』のギミックを作動させる。

・シャバドウビタツチヘーンシーン！シャバドウビタツチヘーンシーン！

「変身」

左手にある赤い指輪をベルトにかざす。

・フレイム！プリーズ　　ヒー、ヒー、ヒーヒーヒー！

電子音と共に今度は左から魔法陣が現れる。

「な、なんだ!？」

チルノは驚きで弾幕を止めている。まあ、好都合だが。出現した魔法陣が俺の体を通り抜けた時には、俺は、仮面ライダーウィザード　フレイムスタイルになっていた。

「さあ、ショータイムだ！」

と、俺は本家の決め台詞を放ち、すぐに右手の指輪を付け替え、使用する。

・コネクト・プリーズ・

今度は俺の近くに魔法陣が現れる。そこに手を入れ、ウィザードの専用武器、ウィザードソードガンを取る。ガンモードでチルノを狙い、ソードガンのギミックを作動させる。

・キャモナシューティングシエイクハンズ！

ソードガンにフレイムウィザードリングをかざす。

・フレイム！シューティングストライク！ヒ・ヒ・ヒ

ヒ・ヒ・ヒ

銃口に炎が集まってゆく。それを見たチルノは、

「な、なんかヤバそうな感じ・・・」

と、逃走の準備を始めていた。しかし、そんなことは関係ないと、俺は構わず引き金を引く。

銃口に集まっていた炎が炎弾となつて飛んでいく。

「ツ!？」

チルノは、避けようとするが、この弾はそんなに甘くはない。

ドッ!

抵抗虚しく、俺の放つた炎弾に当たつてしまふのだつた。

「ふういー……解除、」

俺の言葉で、ウイザードの力は消える。

俺の能力は、”ありとあらゆるモノを創造する程度の能力”。

その名の通り、どんなモノであつたとしても、創造することができる。この能力は代々受け継がれてきたらしい。

外敵を排除した俺は先程置いておいた自転車に乗り、また走らせるのだつた

「にしても、さっきのド阿呆といい、時止めといい、なんなんだ、ここは。」

その問いは、風と共にながれてゆくのだつた。

ある程度走らせたが、人一人いない。妙だ。

「本当、なんなんだ、ここは。」

「幻想郷。」

「ツッ、剣、（つるぎ） ツ！」

能力で剣を、創り、声のした方へ向ける。そこにいたのは、金髪の少女だった。服はほぼ紫色で統一されており、白いナイトキャップをかぶっていた。

「あらあら、いきなり剣をこちらに向けるだなんて。今代の創造者は。」

「?創造者?なんだそりゃ。俺には夜月白狼っていう名がある。」

その少女は剣を向けられても、余裕だった。

「まあ、なんにせよ、歓迎するわ。ようこそ幻想郷へ。」

「・・・とりあえず、その幻想郷ってものをしらねえんだが?」

「もちろん、説明するわ。」

少女による、幻想郷講義が始まった。

講義と問いと開幕

八雲 紫（やくも ゆかり）と名乗る少女から、幻想郷とは何かを聞き、その情報を整理した。

①、幻想郷は、忘れられた者たちが集うばしょである。

②、幻想郷に来ることを幻想入りといい、その方法は三種類ある。

1、忘れられる。

2、自力で結界を越える。

3、紫に連れて来られる。

とまあこんなところだ。幻想入りの方法のうち、最後だけはいあんまり許容できなかつたが。

「つまり俺は、お前の能力で連れてこられたわけか。」

「ええ。そうよ?」

紫は特に悪びれることもなくさらりと言う。

「まあ、あんまり言及するようなことでもないから、どうでもいいけど、一つ聞かせてくれ。」

「なにかしら?」

俺が幻想入りの方法を聞いたときから思っていたこと。

「なぜおれなんだ?」

「・・・どういう意味かしら?」

「言葉通りの意味だよ。別に俺じゃなくても、能力を隠しながら生活している奴もいた
だろ?その中で、なんで俺を選んだのかってことだよ。」

そう。この幻想郷には、多くの能力者がいることはきいている。だが、そいつらが全
員幻想入りしてきたのであれば、俺のいた、元の世界にもまだ能力者がいたはずだ。そ
の数多の能力者たちの中で、なぜ俺が選ばれたのかが知りたかったのだ。その問いの答
えは、紫の口からは語られず、これから起こることが証明した。

「それは・・・」

紫が俺の問いに答えようとしたその瞬間。

「!?!」

空が、紅色に塗りつぶされた。赤ではなく、紅。

「これは一体・・・」

「貴方のさっきの問いの答えがこれよ。」

紫が空を見る。

「この幻想郷ではね、ときどきだけど、無法者が来るときがあるのよ。で、その無法者は、ここを荒らそうとするのよ。私はそれを”異変”、とよんでいるわ。」

俺は紫のその言葉で察した。

「俺にその”異変”、とやらの解決をたのみたい・・・と？」

「ええ、そういうこと。」

あつていたらしい。でもまあ、そういうことならいいさ。

「わかった。その依頼、受けよう。」

「いいの？」

「元の世界の中で、俺が一番適任だとお前は考えたんだろ？なら、俺がやらなきゃダメだろ。」

我ながら変な理屈だと思う。だけど、俺が動く理由としては、充分だ。

「…まかせるわ。ただ、この世界にも、ちゃんとした決闘方法があるわ。貴方にも守つてもらおうわ。」

そういつて、紫はこの世界の決闘方法、”スペルカードシステム”、を説明した。

少女(?) 説明中...

「と、こんなところね。」

「おう。わかった。」

「それじゃ、がんばってね。」

「ああ。ちよつくら、この狂乱を終わらせてくる。」

そういつて、俺は新しく〃創った、スペルカード（以降、スペカ）を使った。

【翼符 ドラゴンウイング。】

竜の翼を〃創り、空へ飛んだ。

襲い来る闇

白狼が異変解決に向かつてすぐ。一人．．．いや、二人の少女もまた、動き始めていた。

「なあ霊夢、これって．．．」

「ええ。異変ね。」

白黒の魔女っぽい服に身を包んだ少女と、紅白の巫女服の少女。二人はこの異変を終わらせるために、空を飛んだ。行先は．．．

「あんたが案内しなさいよ魔理沙。最近見つけたその“紅い館”に。」
「わかつてるって。さあ、いくぜ！」

“普通の魔法使い”、霧雨魔理沙と、“楽園の素敵な巫女さん”、博麗霊夢。二人は、この異変で、“希望”と出会うことになる。

ところかわって白狼視点。

白狼は、迷っていた。

「……ど(う)だ(う)だ(う)……」

翼を“創り”、なんとなく気になったところを調べていたが、一向に元凶の元にたど

り着けていない気がする。さらに心なしか、辺りが暗い気がする。

「まだいつても昼なんだが…もう夜か？」

そう言うと、辺りが真つ暗になった。そこで俺は気づいた。

「ツ…能力者が…」

正直、気づくのが遅かった。俺は既に敵の能力に嵌っている。

「どうしたものか…」

「ねえ、あなたは、食べてもいい人類？」

唐突に、声がした。幼い少女の声。おそらく、この声の主が能力者だろう。

「どうだろうな…まあ、反抗はさせてもらうが。」

「人間のくせに妖怪に勝てるとおもってるの？」

明らかに人間を馬鹿にした言葉。俺にとつてそれは禁句だぜ？

「ああ、勝てるさ。今から見せてやるよ。俺の“力”，つてやつを。」

俺は能力を起動させる。ただし、この世界のルールに則り、スペルカードを使って。

【力剣符 パワーソード】。【盾符 ドラゴンシールド】。

瞬間。俺の右手には一本の剣が現れた。そして、右腕に竜の顔を模した盾が。

「さあ、ショータイムだ！」

「少しは楽しめそうね。でも、あなたは今私の闇の中。決して出られない。どうするの

「？」

俺は剣を逆手持ちに切り替え、言う。

「こうするのさ。【剣撃符 絶力破】。」

俺は大きく剣を振りかぶり、とにかく振り回した。すると、振った剣の軌跡から、白い衝撃波が飛び出した。

「ッ!？」

「おおおおおッ!」

俺の周りが闇に包まれる前、ここは森だった。であれば、この辺一帯の木を吹き飛ばせば、奴は隠れようがない。そうなれば後はこっちのものだ。

「ツさせない! 【夜符 ナイトバード】!」

奴もスペルカードを使い、弾を飛ばしてくる。俺の飛ばす衝撃波と、奴の弾幕がぶつかり、相殺され———なかった。

「え…:…なんで…:」

「相殺できないのか…:か? そりやそうだろ。この剣は、"力", を表す剣だぜ? それか、そんな簡単に相殺されてたまるかっての。」

そのうち、衝撃波が木を粉碎する音が聞こえなくなる。

「さあて、そろそろファイナーレだな。」

と、俺が能力を使おうとした、その時。

「恋符 マスターズパーク！」

「え？きやあああああ!?!」

どこからか放たれた七色の極太レーザーで、俺の初弾幕ごっこは幕を下ろした。

邂逅と協力

「な、なんだ？ さっきの光は…」

俺が闇を操る少女と戦っている最中に放たれた七色の光。下手すりや当たってた。

「動くな！ 動くと撃つ…：間違えた。撃つと動く！」

「滅茶苦茶よ魔理沙…で、大丈夫なの？ あんた。」

上から降りてきたのは白黒のまさに魔女！ といった感じの金髪の少女と、紅白の巫女服に身を包んだ黒髪の少女。

「え、ええ。まあ、大丈夫です。」

と、俺は返す。

「そ。じゃあとつとと里に帰りなさい。異変が起きてるから。危険よ。」

と、巫女さんは言う。それに俺は、

「ああ。それなら聞いている。えつと…：紫，，つて奴から。」

「紫!? 紫って、八雲紫!？」

「あ、ああ。そうだけど。」

どうやら知り合いらしい。巫女さんはそれを聞くと頭をかき、

「じゃあ、あんたが”希望”，つてこと？」

と俺に問うた。だが俺は、

”希望”，？なんだそりゃ。俺はそんな仰々しいものじゃないよ。ただモノが”創れる”，だけだしね。」

「モノを”創る”，だつて!？」

今度は魔女っ子が食いついた。けど今はそんなことを言っていられない。

「説明は後。今は取り敢えず、異変を終わらせようよ。」

「はっ!？」

…どうやら二人とも忘れていたらしい。

「…博麗霊夢よ。よろしく。霊夢でいいわ。」

「霧雨魔理沙だ。魔理沙でいいぜ。」

「霊夢に魔理沙ね。俺は夜月白狼。白狼でいいよ。」

ここに、紅霧異変解決のための同盟が結成された。

話もそこそこに。俺たちは魔理沙の見たと言う紅い館に向かうことにした。…と言つても、俺とルーミア（さつき戦つた子）

のいたところからはそんなに離れていたわけでもなく、意外とすぐに見つかった。た

だ。

「このバンバン撃ってくる奴らは何!?!」

ベシッ!

パワーソードの腹で妖精?の頭を叩き、落としていく。

「見た目通り、妖精だぜ。」

「異変の時に大騒ぎして、襲ってくるのよ。」

バシユンツ!

二人は慣れた手つきで妖精たちを倒していく。

「あー面倒い。スペカ使えばいいんだよね?」

「え?うん。そうだけど、何するの?」

霊夢の言葉に、ニヤリと笑い、一枚のカードを取り出す。

「夢符　　ファイズ」。

スペカを宣言し、「創り始める」と言っても、一瞬にも満たないが。俺の手に握られているのは、銀色のデカイ機械、ファイズブラスターと、今となつては懐かしいガラケーのケータイ、ファイズフォン。ブラスターにあるボタンでコードを打つ。

(5・5・5・standing by)

フォンを持った手を顔の横に構え、

「変身っ！」

ブラスターにセット。

(awaiting.)

次の瞬間、体に紅い光が走り、カッ!と輝く。

「!?!」

二人は驚き、目を覆う。光が収まると、俺の体は、

「さて、いくか。」

仮面ライダーファイズ・ブラスターフォームになっていた。

「何…アレ…」

「かっけー…」

二人の反応をよそに、俺は手早くブラスターを起動する。

(Blaster Mode.)

そして、ショットガンのようにジャキッ!とギミックを動かす。

(Exceed Charge.)

銃口に光が集い、チャージされていく。そして。

「ええい、ぶっ飛ば有象無象!」

そんな物騒なセリフとともに、光弾は放たれ、目の前から、妖精は消え去った。

「……………」

「ふういー。よし、これで楽に進めるな。」解除；つと。…アレ？どうしたの二人とも？」

二人は目の前で起きた惨劇(?)に、目を逸らして、

「ううん。なんでもないわ(ないぜ)…」

としか言えなかった。

狼と拳法家

「【剣撃符 絶力破】ッ！」

パワーソードを逆手に持ち、乱暴に振り回す。その軌跡から衝撃波が飛んでいき、妖精達を落としていく。

「うっわー、見ろよ霊夢。私らの出番ないぜ？」

「うっさい。楽でいいじゃない。」

二人は割と言いたい放題であった。

「ま、見ててもいいけど、ピンチになったら助けてよ？」

と、俺は冗談まじりに言う。魔理沙はそれに笑って、

「おう！任せとけ！」

と言ってくれた。さて、ある程度進むと、紅い館が見えてきた。

「魔理沙、アレか？」

「ああ。アレが私が見た紅い館だぜ。」

地に足をつけ、ドラゴンウイングを消す。

「？あんた、竜じゃなかったのね。」

霊夢が言う。それに俺は苦笑し、

「うん。ご期待に添えず申し訳ないけど、少し特殊な力を持ったただの人間だよ。」

さて。目の前には大きな門。そこに立っているのは黄緑色のチャイナ服をきた女性。

「侵入者か…?」

「まあ、そうだね。この館に、異変の元凶がいるなら、俺たちはそれを止めなきゃならぬ。」

俺がそう言うと、霊夢は構わずお祓い棒を女性に向け、言った。

「白狼。心配しなくても、ここに異変の元凶はいるわよ。妖気が濃い。これは動かぬ証拠よ。」

「成る程。魔法使いと巫女。異変解決の専門家…お前らが…ッ!ここを通りたくば、この紅美鈴ほんめいりんを倒していくがいい!」

その闘志は。その覇気は。俺たちの動きを一瞬でも止めるのには、十分だった。

「参る!」

だから、気づかなかった。

ヒュッ!ゴスッ!

「あ、が、があああああつ!」

「白狼!」

女性、美鈴の飛び蹴りが、俺の肋骨をバッキバキにしたのだ。

蹴られた勢いのまま俺は吹っ飛び、近くの木に叩きつけられる。

「ごっぼ……がはっ……ちつくししょうが。いきなりご挨拶だな。」

「お前が一番弱そうだったからな。真っ先に潰すさ。」

「はっ……違うない。」

そういつて俺は立ち上がろうとする。が、痛みでうまく立てない。

「無理をするな。手応えで肋骨全てが折れたのがわかる。下手に動けば、助かるものも

助からんぞ。」

と、美鈴は吐き捨てる。だが。

「へっ……知るかよ。こんなもん、コレでどうにかなんだよ。」

と、俺は一枚のスペカを創る。

「走符 ドライブ」。頼むぞ、ドクター。」

ドライブドライブと、マッドドクターシフトカーを使い、治療する。……ただし。

「ぐっおおおおお！いつてええええ！」

とてつもなく、痛い。

「「!?」」

三人とも驚き、動きが止まる。その間に、治療が完了する。

「完全復活つてな。さて、反撃開始だ。」

新たなスペカを”創り、”使う。

「【向符 一方通行】。さアてエ！スクラップの時間だぜエクソ野郎！」
最強^{第1位}の能力を。

偶然発現したあの神拳。

「…虚仮威しだ！ふっ！」

さつきよりも早いスピードで、美鈴が蹴りをかましにくる。

「ツ！そう何度も白狼を狙わせるかっての！」

霊夢が気付き、俺の前に立ち、お祓い棒で受け止めようとした。
が。

「なっ!？」

驚いたのは美鈴。なぜなら。

「おオラアアアッ！」

俺が二人の間に入り込んだからだ。このままでは美鈴の蹴りが当たってしまう。と、普通なら思うだろう。しかし、今発動しているスペル、「向符 一方通行」は普通では無い。

攻撃が当たった、その瞬間、美鈴は自分の足から、骨の軋む音が聞こえた。

「ぐっ!?!な…」

すぐに足を戻し、距離をとる。美鈴は自分の能力、『気を操る程度の能力』で足を少し

癒しつつ、俺を見る。そこには。

「けひひ。どおしたよ？まだ俺は何もしてないぜ？」

無傷の俺がいた。それには、魔理沙も霊夢も驚きを隠せなかった。

「白狼、お前は…一体…？」

魔理沙が少し上ずった声で問う。

「あ？ああ。俺の能力はな、《ありとあらゆるものを創造する程度の能力》なんだよ。だから、沢山のスペカが使えるってわけだ。」

「「なっ!？」」

俺は、さも当たり前のように語る。しかし、三人からしたら、そんなのは反則としか考えられない。

「くっ…では、その一方通行というのも…」

「勿論、俺が”創った”、ベクトル操作。運動にはそれぞれ向きがあつてな。コレはそういう向きを操れるんだよ。」

「な、なあ霊夢。もしあいつが敵になったとして、勝てそうか？」

「…考えたくも無いわ。」

現代人であれば、こういうのをなんていうのかはわかるだろう。そう。チートである。

「…だが！私は此処、紅魔館の門番なり！」

そう叫び、美鈴は再びこちらに向かってくる。

「ケヒツ！」

俺は手のひらの上に風のベクトルを集め、風の球を作る。イメージは丁度、

「螺旋丸！」

しかし、ここで俺は失念していた。さつきまでの美鈴のバトルスタイルを。ガツチガチの近接格闘タイプ。そんな彼女が、この間までバトルを経験したことの無い人間のまぐれ当たりを期待したような一撃に、果たして当たるだろうか？答えは。

「甘い！」

否、である。俺の突き出した腕は、あつさりと側面から捕らえられ、投げられる。しかし、ここは一方通行の能力。空中で翻り、綺麗に着地する。しかし、俺の顔は芳しくなかった。

（チツ…案外しぶとい。仕方ない。霊夢と魔理沙に先に行かせるか？…いや、美鈴は多分、ここを通さないだろう。…だったら。）

俺は、さつきと決めに行くことにした。

「…なんの真似だ？」

俺がとっていたのは、世界陸上でよく見るあのスタートポーズである。クラウチング

スタート。

「虚刀流七の型、杜若。つてな。…いくぜ。よーい、ドンー！」

スタートと同時に、風のベクトルを加速に回す。目にも留まらぬ速さで、美鈴へ肉薄する。

（打撃を狙えば、ベクトル操作でこちらがやられる、しかし手を止めたら攻められてどの道やられる！…！ベクトル？まさか！）

それは、原作でも本人がやられた戦法。やった本人は、多少の武術の心得はあったかもしれないが、彼女に対しては及ぶわけが無い。つまり、彼に出来て、彼女に出来ないわけが無い。美鈴は、拳を俺の顔面めがけて振るう。そして、当たった瞬間、

ヒュッ…ガッ！

「ぐっ?!」

「!?!」

「決まった!?!」

手を引いた。

「ぐ…お前…木原神拳を知ってたのか…」

「木原神拳…?木原神拳というのか?さっきのは。」

「無意識かよ…あークソ。めんどくせ。コレの攻略法見つけられたらどうしようもね

えつつの。霊夢。悪い、任せていいか？」

「え？あ、ええ。勿論。よくやってくれたわ。」

…なんともまあ、情けない男である。そして、霊夢対美鈴の弾幕ごっこが始まったわけだが…

「うう…ま、負けた…」

「おいまじかよなんで弾幕勝負になった途端に弱くなんのお前!」

あつさりとう霊夢が勝った。一回も霊夢はスベカを使っていない。所謂ノーボム、というやつだ。

「私、弾幕勝負は苦手なんですよ…」

「……………」

あまりのいたたまれなさに、俺は黙るしか無かった。しかしまあ、勝利は勝利。通ることにした。

「あの!」

「おん?」

「貴方の、名前は?」

美鈴に名を聞かれ、俺は、

「夜月白狼だ。どこにでもいる人間さ。」

そう、名乗った。

たどり着くは本の山

紅き館。紅魔館。その門番たる紅美鈴を倒し、その中に入った。入ってからも、妖精たちは何体も現れる。

「だーもう、キリがねえ！」

「確かに……ちよつと多すぎるぜ！」

俺と魔理沙はぼやく。無言ではあるが、霊夢も少しばかり苛つき始めていた。

【剣撃符 絶力剛破】ツ！」

いつもの絶力破を強化し、放つ。

バババババツ！

衝撃波は、一面の妖精たちを蹴散らしていく。

「ひゅー。すつごいわねー。最初から使いなさいよ。」

「いやこれ割と霊力量食うんだよ。そう何発も撃つてたらぶつ倒れるつつうの。」

正直、そんなに霊力量に余裕はない。「無」から「有」を創る、のは並大抵の霊力では、幻を創る、のがやつとなのだ。

それをポンポンできる俺の霊力量は並みでないことはわかるものの、大技を連発は出

来ないのだ。

「…お？」

少し行つたところに、物々しい扉があつた。

「…どうしたの？」

「いや、デカイ扉だから、何かあるかな、と思つてな。」

と、とん、と扉に触れる。するとその瞬間、

ゴオオオッ！

「なっ!？」

突如強い風が吹き、俺を、俺だけを吸い込んで行く。

「罨かっ!？」

後悔しても遅い。台風並の強風は、俺だけを吸い込んで、ボタン！と閉じた。

「白狼！」

「どけ霊夢！」

霊夢が声をあげ、魔理沙は自身の武器であるミニ八卦炉を構え、

【恋符　マスタースパーク　ツ！】

七色の極太レーザーを放つ。が、扉は破れない。

「！火力が足んねえか！」

「違うわ魔理沙！コレは…結界ね。それもかなり強固な。」

つまり、俺と霊夢、魔理沙は。

「やられた。分断されちゃった。」

そういうことだった。

「つとと、ここは…！すっげー。」

扉に吸い込まれ、部屋の中に入れられた俺を出迎えたのは、本。本。本。まさに本の山であった。

「へー、この館には、図書館まであるのか。…ラノベはあるかな？」

「らのべ…聞いたことのない種類ね。そんな本があるのかしら。」

「ツ！誰だ!？」

俺はすぐに手に持ったパワーソードを声のした方に向ける。

少なくとも、味方ではないと思ったからだ。そこには。

「ようこそ。私の図書館へ。私はパチュリー・ノーレッジ。魔女よ。」

「魔法使い…こりやまたメンドそうなのが来たな。」

「心配しなくても、すぐに済むわ。貴方を倒してしまえば。」

と、パチュリーは言う。だが。

「あ？霊夢と魔理沙もいるんだぜ？」

と、俺も負けじと反論する。すると。

「そつちも対策済みよ。もつとも、もう終わってるかも知れないけれど。」

「何？」

「貴方の知る必要のないことよ。少なくとも、ここで倒れる貴方には。」

その言葉は、開戦の合図であり、俺に、早くここを脱出させようと思わせるのに、十分な言葉だった。

「くっ……だつたらすぐにでも終わらせてやる！【翼符 ドラゴンウイング】ッ！」

竜の翼を、創り、飛翔する。

「さあ、ショータイムだ！」

「智は力なり……それを貴方の体に刻み込んであげるわ。さあ、来なさい。『今代の創世者』。」

「ッ！だからなんなんだよその『創世者』って！」

謎は謎のまま、戦いは。

「オオオオオッ！」

「【火符 アグニシャイン】ッ！」

始まった。

知るも知らぬも

「【剣撃符 絶力破】ッ！」

ブオンッ！とパワーソードを振りかぶり、衝撃波を飛ばす。

「甘いわ。」

しかし、パチュリーは上手く弾幕を展開し、打ち消しあっている間にかわす。

「そっ。」

「!!」

隙についてパチュリーは魔法を撃ち込んでくる。

「チッ！【盾符 ドラゴンシールド】ッ！」

咄嗟に竜の盾を創り、弾幕を防ぐ。しかし、勢いまでは殺しきれず、押される。そ

して、本棚に当たった瞬間、

バゴオッ！爆発した。

「ガアッ!?な…てめ、本を爆弾みてえに…っ！」

「だって、もう読み終わって、記憶に入っているもの。それに、あの程度で無くなる様な、

柔な本じゃないわ。」

「…ラノベ愛好家の俺の目の前で本を雑に扱いやがったな。ゆるさ”ん”はっ！」
地を蹴り、一気にパチュリ―に詰め寄り、剣を振りかぶる。しかし。

「遅いわ。【木符 シルフィホルン】。」

パチュリ―のスペルによって発生した強風に阻まれる。

「これは！さっきの風！これで俺をここに…」

「そんなことを知って何になるというの？」

そう言つてパチュリ―は風を拡散させ、弾幕として飛ばしてくる。

「くっ！ッ！」

なかなかに厳しい。簡単に言えば、隙が無い。どこから、いつ攻撃を仕掛けたとしても、阻まれる。

「…こほっ…」

「！」

その時、パチュリ―は咳き込んだ。しかし、それは一度だけ。一瞬にも満たない様な時間であつた。だが、見た。見えた。見てしまった。であれば。

（使わない手はない。喘息なんだろうが、どんだんスペルを使つてもらうぜ。そうと決まれば。）

「パチュリ―。悪いが、チエツクだ。【光速 カブト】。」

俺は、仮面ライダーカブトのスペルを起動した。ベルトを”創り”、飛翔するカブトゼクターを”創る”、そして。

「変身。」

「ヘンシン。」

「キャストオフ。」

「キャストオフ、チェンジ、ビートル。」

ゼクターをベルトにセット。ツノの部分を逆向きにする。殻がむけるかの様に、パーツが飛散する。飛び散った始点には

、仮面ライダーカブト ライダーフォームが天を指していた。

「なに…アレ…」

「クロックアツプ。」

質問に答える義理も義務もない。俺はそのまま加速する。

「クロックアツプ。」

パチュリーが変身した俺の姿を見て数瞬、俺の姿は掻き消えた。

「ツ!?こほつ、に、【日符…」

「遅い。」

新たなスペルをかまされる前に鳩尾に一発。

「つあ……………」

それきり、パチュリィは気を失った様だ。

「ふういー。な、何とかなかったか。あの一回の咳き込みが無かったら危なかったな。ま、これで扉も開いただろうし、次に進めそうだ。あ、安静なところにパチュリィを寝かせてつと。これでよし。行こう。」

祝、初勝利！

…自分で言っつて悲しくなってきたため、一刻も早く、霊夢達の方へ行くことにする。扉を開けようとしたその一瞬、視界の端に、黒と赤が紫を背負っていったのが見えたきがした。

ナイフと札と炉

ボタン！と白狼を吸い込んだ扉は閉まってしまった。

「白狼！白狼！……くっそー、霊夢、下がってろ！」「恋符　　マスター……」

「無駄ですよ。」

「！誰!？」

響いた声のする方に、霊夢はお祓い棒を向ける。が、そこには誰もいなかった。…代わりに。

「なっ……」

「え？っ!？」

メイド服を着た女性が霊夢の背後に立っており、ナイフを首筋に突きつけていた。

「っ！【夢符　　封魔陣】　　ッ！」

咄嗟に霊夢はスペカを使い、自分の周りから弾幕を放つ。

「うわわっ!？」

「……………」

魔理沙は何とかかわし、メイドはシユン！と消え、離れたところに現れた。

「テレポートでも出来るのか？こいつは厄介だぜ霊夢。」

「…そうね。白狼も心配だけど、そんな余裕は無さそうね。」

「ご心配せずとも、向こうもすぐに終わりますよ。その、白狼さん？は倒れるでしょう。そして、貴女達も…」

「やってみなきゃ、わかんないぜ？それに、白狼は勝つさ！」

メイドの言葉に、魔理沙は反論する。

「では、そろそろ始めるといたしましょう。貴女達の時間は、私のもの。私、十六夜咲夜のスペル、ご堪能下さいませ。」

「馬鹿ね。敵のスペルは喰らうものじゃなくて、躲すものよ。」

紅魔のメイド、十六夜咲夜と紅白の巫女、博麗霊夢、そして白黒の魔法使い、霧雨魔理沙による戦いが、始まった。

「いっくぜえ！」

魔理沙は帽子の中から瓶を取り出し、投げる。そこから緑色の弾が飛んで行く。咲夜は消えることなく難なく躲す。

「そー！」

躲している間に、霊夢がお札を投げる。躲したその背後からの襲撃に、咲夜は、ヒュッ…バシユウンッ！

「なっ!?!」

背後にナイフをノールックで投げることで対処した。

「あ、あいつ、後ろにも目があったりするんのか?」

「失礼ですね。そんなものはありません。ただ、見ただけですよ。そちらが止まってる間に。」

咲夜のその言葉に、霊夢はピクリ、と耳を動かす。

(どういうこと? 私達は咲夜を見ていた。完全に隙ができたと思ってお札を投げた。でもあいつは反応してみせた。)

なぜ、と考える。だが今は戦闘中。敵が待つてくれる保証はない。

「隙だらけですね。ッ!」

咲夜がナイフを投げる。しかし、霊夢が気づいた様子はない。

「霊夢!」

「!チツ!」

当たるかというその一瞬、霊夢はお祓い棒で以って弾いた。

「なっ…」

今度は咲夜が驚く番だった。明らかに隙だらけだった。なのに。

「私、勘は鋭い方なのよ。」

霊夢は得意げに言うが、それは勘で済まされるようなものではない、と二人は思った。(にしても。出て来たときのといい、さつきのといい、何なのかしら。まるで、あいつだけが動いていい時間があるかのような…?時間;?)

そのとき、霊夢に電流走る。そして、笑うにやり、と。

「そう。そうだったのね。咲夜。あんたの能力は”時間を操っている、…違う?”」

「な…時間だ?!?じゃあさつきからありえない動きしてんのも…」

「ええそうよ魔理沙。咲夜は、”時間を止めること、;で躲したり、現れたりしてたつてわけよ。」

「ええ、まあ、その通りですが、それがわかったところで何になると?」

咲夜の言葉に、霊夢はさらに笑い、

「タネがわかればどうとでもなるわ。あんたは私達が戸惑っている間に倒すべきだったのよ。でも、もう遅い。あんたのターンは終わり。ここからは私達のターンよ!」

ここから、霊夢と魔理沙の反劇がはじまる。

博麗の巫女

「魔理沙、手伝いなさい。あいつを倒すわよ。」

「おう！」

二人は一斉に弾幕を放つ。

「無駄です。」

咲夜は変わらず、時を止め、躲す。そして、進める。

「どんなに多くても、当たらなければただ綺麗な幕よ。」

「ええ。そうね。当たらなければ、ね。」

霊夢の発言に、咲夜は訝しむ。が、”止めて、確認すればいいだけのこと。咲夜は再び時を止め、周囲を確認する。が、周りには変わった点はない。ハッターか、と思い、咲夜は時間停止を解除する。その際に、さりげなくナイフを魔理沙に向かって投げつつ。

「うおっと！へへ、当たらないぜ？」

「…チツ。」

魔理沙の躲しつつの挑発に小さく舌打ちする。早く仕留めてパチュリーの元へ行かねば、と、咲夜の心には、若干の焦りができつつあった。

「よし、魔理沙！何とかそいつ墮としなさい！」

「よし！だったらこれだ！【魔砲　ファイナルスパーク】ッ！」

魔理沙が愛用のミニ八卦炉を咲夜に向かって向け、そこから普通のマスタースパークよりも太い七色レーザーを放つ。

「なっ!?!」

突然のことに、地に足をつけてしまう咲夜。その瞬間。

ピシィッ！咲夜の足元で、お札が光った。

「っな…足止めっ…!?!」

「ナイスよ魔理沙。おかげで、捕まえられたわ。」

「やっとか。」

つまり、霊夢と魔理沙の作戦に、咲夜はまんまとかかってしまったというわけだ。

「くっ…」

「さて、終わりよ。【宝具　陰陽鬼神玉】ッ！」

霊夢は咲夜の腹に、極大の青い陰陽玉をぶつけた。

「お嬢様…申し訳…ありません…」

そんな言葉をこぼしつつ、咲夜は館の廊下の彼方へと吹っ飛ばされていった。

「まるでホームランだぜ。」

「何それ。」

「外の世界での運動での用語だぜ。かなり飛ぶとそう呼ばれるらしいぜ?」

「ふうん。ま、どうでもいいわね。私達は自力で飛べるのだし、ホームランも何もないわ。…っついていけない! 白狼を助けないと!」

霊夢がそういつた瞬間。

ガチャリ、と扉が開き、そこから…

「ふういー。何とかなつたな。お、二人とも、無事だったか。」

今話題に上がった白狼が現れた。

「白狼!」

「無事でよかつた。怪我とか、ない?」

「ああ。そつちは?」

「一戦やったけど、大丈夫だぜ。」

とケロリと言う魔理沙に、白狼は

「お、おう。そつか…じゃ、じゃあ行こうか。」

そう言うしかなかった。

「にしても、ほんと広いわね。ここ。」

「ま、でつけえ図書館があるくらいだしな。」

「図書館?!」

白狼の言葉に、魔理沙は反応する。ずい、とよつてこられたため、白狼は戸惑う。と、
ここまで話しながらきたが、

「これは…」

図書館の扉よりも豪華な扉。

「まさにここにいますって感じの部屋ね…」

「ラスボス戦か。ま、油断せずに行こうぜ?」

「この三人なら大丈夫さ。いざとなったら私の魔法で吹っ飛ばしてやるぜ!」

三者三様の反応を示し、扉をあけた。

紅き王

扉の先には、玉座があつた。とても大きな玉座が。そこに座つていたのは、青色の髪に、薄い赤色のドレス、紅い眼をした少女がいた。少し尖つた歯を見せながら、笑つていた。

「来たか、博麗の巫女。白黒の魔法使い。そして今代の創世者。」

少女は、尊大な態度でそう言った。

「だから、何なんだよその創世者つて。紫も言つてたけど。俺はそんな大層なやつじゃない。ただの人間だ。」

と、俺が言うと、

「あんた（お前）のような普通の人間がいてたまるか！」

と、霊夢と魔理沙に言われてしまった。

「おや、知らないのか。…まあいい。巫女と魔法使いは兎も角、お前は何故私の邪魔をする？お前は幻想入りしたばかりであろう。この異変に関わる必要はなかつたはずだが？」

レミリアは問う。俺は。

「関係ないよ。誰が助けを求めているようと、誰かが助けを求めた時点で、それは助けなきやならない。どういう形であれ、救いは必要なんだよ。」

俺が、一点の迷いなく言い放つと、

「やはり、お前なら…」

レミリアは小さく何かを呟き、

「…いいだろう。そんな地に這い蹲りたければ、望み通りにしてやる！くるがいい、希望よ！」

レミリアが霊力を解放しつつ言う。ならばと俺も解放しつつ言う。

「希望だ何だ、わけわかんねえことをうじうじ考えるのも飽きた。もう、考えるのはやめた！」【走符　ドライブ】！

新たなスペルカードを”創り”、使う。手にはドライブドライバー、そして、赤いミニカー、シフトスピード。

「行くぞ！」

(Ok. Start, your engine!!)

ドライバーを腰に装着。イグニツションキーを回す。そして、シフトカーを変形させ、腕についたシフトブレスにセット。

「変身！」

シフトカーを前に倒す。

(Drive! type, speed!!)

直後、光が体を覆い、彼方からタイヤが一本飛来する。それは俺の肩から腰にかけての部分に嵌る。俺は、仮面ライダードライブ、タイプスピードになっていた。

「さあ、ひとつ走りつき合えよ！」

「もう突っ込まないわ。とにかく、あんたを倒せば異変は終わる。とつとやるわよ魔理沙！」

「おう！最終決戦だぜ！」

「永遠に紅い幼き月、レミリア・スカーレットの力、思い知らせてくれる！」

こうして、紅霧異変さいごの戦いが、始まった。

その頃、紅魔館のとある一室で。

「……………！行かなきゃ。あの人と、アソバなきゃ。」

また一人、希望の元へと導かれ始めた。

此処より、希望は芽生える。全ての悲劇を喜劇に変えろ。絶望も、悲しみも、怒りも。ありとあらゆるマイナスの思いをプラスへ。そのために全てを”壊し、”、”全てを”創れ、”。その血は、その力は、その体は。元よりその為に出てくるのだから。

止まらないオーバードライブ。対処法は？A. 壊せばいい。

「来い！ドア銃！ハンドル剣！」

俺はドライブの武装、ドア銃とハンドル剣を呼び出し、レミアアに向けて撃つ。

「行くぜ！マジックミサイル！」

魔理沙も一緒に弾幕を放つ。が、ひよい、とレミアアにはあつさりど躲される。代わりに。

「そら。上手くかわせよ？」

レミアアも紅い弾幕を放ってくる。

「く…」

苦し紛れにイグニッションキーを回し、シフトカーを前に三回倒す。

(spe. spe. speed!)

シフトスピードの効果で加速し、迫り来る弾幕を躲す。

霊夢も魔理沙も、軽く躲している。三人からしたらこんなのはただの挨拶がわりらしい。

俺にはクツソ辛いつてのに！

「チイツー！」

ところどころをハンドドル剣で打ち落とし、ドア銃で打ち消すものの、それでも凌ぎきれず、数発が当たる。

「があっ！」

「白狼！」

二人が俺の方を向く。その隙は致命的だった。

「バカめ！【必殺 ハートブレイク】！」

レミリアは紅い槍を作り出し、ピュオッ！と勢い良く投げた。

「ツ！霊夢！」

魔理沙は気付き、霊夢を弾き飛ばす。

「きゃ!?ちよつと魔理沙！なにすん…のよ…?」

態勢を戻した霊夢が見たのは、紅い槍に身を貫かれた魔理沙の姿だった。

「魔理沙…魔理沙あああ！」

「くそっ！ドクター！頼む！」

スペルカードシステムのおかげで、死にはしないが、大ダメージであることに変わりはない。しばらく、魔理沙は動けないだろう。

「まず、一人。」

「ツ…いいわ。全力で潰してあげる！これよ！」

怒った霊夢は冷静さを欠き、一心不乱に弾幕を放ち続ける。しかし、レミリアは意にも介さず、余裕の動きで躲していく。

「この程度か？だとしたらがっかりだな。こんなに月も紅いというのに。失望させるなよ。巫女。」

「うっさい！とつとと墮ちろ！【霊符 夢想封印】！」

霊夢の周りに七色の弾が現れ、レミリアに向かって飛んでいく。レミリアは先程と同じように軽かわそうとするものの、弾は追いかけてくる。

「誘導弾か！厄介な！」

「！チャンス！」

レミリアが夢想封印に手間取っている間に、俺は青いシフトカーをシフトプレスにセツト。前に倒す。

(Drive! type, Formura!)

体を再び光が覆い、次の瞬間には、俺はドライブ、タイプフォーミュラになっていた。続けて俺はトレーラーを模した大砲、フォーミュラ砲を手に持ち、シフトフォーミュラをトレーラー砲の上部にセツト。

(Formura, Hoh!)

そしてシフトスピード、黒いシフトカーのシフトワイルドをトレーラー砲内部にイン。

(ヒツサーツ！フルフル！フォーミュラ、大・砲！)

レミリアに向け、

「いっけえええっ！」

大砲をぶっ放した。その光は、未だに手間取っていたレミリアには。

「!!しまっ…！」

ギリギリまで気づかれることなく、

ドガアアアッ！

…爆発した。

「…終わったの?」

霊夢が問う。その様子は、確認というよりも、願望のようで。しかし。

「いやあ、あつぶなかつたねえ、お姉様?」

「っ?!」

残念ながら、その願いは…

「…どういふ風の吹きまわし?フラン?」

レミリアと、謎の少女、フランの声により、

「え？どういうことって、お姉様への攻撃を”壊した”、時点でわかるでしょ？」

文字どおり、”壊された”。

対極

「…誰…?」

霊夢が消え入りそうな声で俺に問う。

「さあな。ただ、フランって聞こえたぜ?…どちらにしろ、向こうに一人増えたようだな。」

状況は芳しくなかった。ただでさえ強いレミリアに増援が来たのだ。それも恐らく。

「レミリアの妹…だろうな。さつきお姉様って言ってたし。ま、会話内容を聞いた限りじゃ、姉妹間の仲はそうでもなさそうだが。」

俺が息を整えつつ言うが、霊夢は聞いていなかった。

「つ…:…:どうしろってのよ。」

パニックになりかけていた。まずい。これは非常に。魔理沙の脱落。そして、向こうの増援。いかに妖怪退治の専門家でも、こういうことには慣れていないのだろう。まあ、言うほど俺も慣れてはいないが。しかし、向こうもこつちも、いつまでもこうしている訳にはいかない。

「霊夢。よく聞け。もうレミリアの戦い方はわかったよな?」

だから。こっからは。

「え、ええ。それが？」

「俺がフランって方を担当する。お前はレミリアを倒して異変を終わらせる。」

俺のステージだよ。

「な、何言ってるのよ！相手の実力は未知数なのよ!?二人で戦った方がよっぽど…」

「予想外のことになってパニックになりかけてるのにか？」

「っ……」

俺の指摘に、霊夢は唇を噛む。

「予想外のこととは全部俺が受け持つ。だからお前は予想通りのことをしろ。」

「!!……ええ。わかったわ。」

「うし。いくぞ。」

どうやら向こうも、纏まったようだ。

「いいわ。フラン。あの男なら、好きにするといいわ。」

「ありがと、お姉様。」

奇しくも作戦は同じようだった。

「私はフランドール・スカーレット。貴方は？」

「…夜月、白狼。」

「ヤヅキ…シロウ…ん、覚えた。それじゃあ、遊びましょ？しつかり避けてね？」
「ったく。こちとら遊びじゃねえっつもの！」

一気に決めるため、ベルトのイグニッションキーを回し、シフトブレスのボタンを押す。

（ヒツサーツ！）

シフトフォーミュラをトレーラー砲からシフトブレスに戻し、前に倒す。

（full throttle! formula!）

「悪いが、一気に終わらせる！はああああつ！」

力を溜め、一気に解き放つツ！

「だーめーんツ！」

フランは、手をぐつと握った。それだけで。パンツ！とドライブドライバーが”壊れた”。

「!?…な…に…?…」

俺には、何が起こったのかわからなかった。フランがいきなり手を握った瞬間、俺のスペルは”壊された”。

「あそぼって言ったのに、終わらせようとしたらダメじゃない。」

フランは口元を妖しく歪ませ、言った。

「まさか、おまえの、能力は…」

俺の声は自然と震えていた。

「うん。そうだよ。私の能力は、”ありとあらゆるものを破壊する程度の能力、”だよ。」
その、能力は俺の”創造、”の対極であった。

”創る,, 者、”壊す,, 者

「【禁忌 クランベリートラップ】！」

「つ…… 【技槍符 テクニックランス】！」

四方八方より迫り来る弾幕を持ち主の技巧を上昇させる槍を手に持ち、弾幕を弾く。

「ぬ、うううっ！（つくそーレミリアより多いぞ……このままじゃ……）っ!？」

俺は思考し、フランの方を見る。すると、彼女は驚くべきことに2枚目のスペルカードを使用していた。

「【禁忌 レーヴアテイン】。いっくよー!？」

2枚目は燃え盛る炎剣を呼び出すスペカだった。それを持ってフランはこっちに飛んできた。

「いいっ!？」

俺は焦り、

「っ!？」

首めがけて振ってこられたレーヴアテインを伏せてかわす。

「チイツー…ふっ!？」

そして素早く体制を戻し、槍を振るう。しかし。

「ふふふっ！当たらないよー！」

ひよいひよいと躲かれてしまう。

「あははははっ！」

「つ……君はなぜ異変に加担する!?姉妹だろう!?なぜ止めない!」

俺の問いにフランは、

「お姉様に加担?勘違いしないでよ。私はただ遊びたかったのよ。初めて貴方を見たときからーなんでも”創れる”, 貴方となら、とつても楽しく遊べそうって!……だからもつともつと、アソビマシヨウ?」

「つ……(狂ってる。こいつ、フランはもう狂ってる。でも、ならなぜ?なんでこんな小さい子が狂わなきゃならない?)」

「考え事?でもさせないよ。そんな暇は与えないわ。【禁忌　フォーオブアカイン　ド】。」

フランが三枚目のスペカを使う。するとフランは、四人に増えた。

「つ!?……な……」

「貴方が、コンティニュー出来ないのよ!」

「冗談じゃ……ねえぞ、クソ野郎が。【槍撃符　絶技槍】ッ!」

嘆きつつ、俺は槍をフランのうち一体にぶん投げる。それは、あっさりとフランのうち一体を貫く。

「へえ「すぐーい。」「でも…」「1対3だよ?」「」

そう。たとえ一体を墜としても、フランは後三体いるのだ。

「関係ない。そろそろ向こうも終わるだろうさ。…お、それ見たことか。もう決着だ。」
「え?」

俺もフランも、もう一つの戦いを見やる。そこには。

【紅色の幻想郷】 ツ!

「これで、終わりよ! 【霊符 夢想封印】 ツ!」

ドガアアアンツ!

「はあ…はあ…はあ…:終わりよ。レミリア。」

勝者として、紅白の巫女がたっていた。

「なあんだ。もう終わっちゃったの? つまんないの。」

と、フランはそう言った。

「「っ!?!」」

いや。厳密にはソレは、フランではなかった。

「くはは。もう少し楽しめると思ったんだが。いやはや。いくら姉上様でも巫女には勝

てないか！ああ、ツマラナイツマラナイ！そしてこの紅霧異変は終わりを告げ、みんな
で笑ってハッピーエンドを迎えるのだから……ツマラナイツマラナイ！だから”壊
す”。そんな結末は。だから”壊す”。お前を。ヤツキシロウ。”

「……オマエ、フランじゃないな。何者だ？」

俺の問いに、ナニカは答える。

「くはは。私はフランさ。フランドル・スカーレット。厳密にはその狂気。」

「つ……白狼！逃げなさい！そいつは普通じゃない！」

「そうだ……逃げる夜月！ソレは、私以上の化け物だ！」

レミリアと霊夢が俺に逃げろと言ってくる。でも、俺は。笑った。

「は、ははは……そっか。別に、元々の心が狂っちゃったわけじゃないんだな。すごい
よ。フラン。自分の心と狂気を、別々に持つておこなう。俺には出来そうもない。俺
にできるのは精々……」

俺は一枚のスペカを持ち、言う。

「君の希望になって、君をその狂気から引き放つことくらいだ。」

ここに、結末は確定した。この瞬間、俺は決めた。誰に言われたからでもない。俺の、
俺を示す二つ名は。

最後の、希望。

少年は希望となりて

「フラン。約束する。俺が君の最後の希望だ！【希望　　ウイザード】。まずは、眠ってもらう。」

ウイザードの力を”創り、ついでに”壊れない、という性質も”創って、おく。こうすれば、気づかれない限り、”壊されることは無いはずだ。

「無駄だよ。すぐに”壊して、”目、が無い!? そんなバカな!?”
「どうやら君にこの”希望、”を”壊す、”ことはできないようだな。」

思惑が上手くいった。そう思い、腰についた手形、ハンドオーサーにドライバードリングをかざす。

(ドライバードリング、プリーズ。)

魔法陣が小さく光り、ハンドオーサーを通り抜ける。その後には、ウイザードのベルト、ウイザードドライバーが顕現していた。ドライバードのギミックを動かす。

(シャバドウビタツチヘンション！シャバドウビタツチヘンション！)

赤いウイザードリング、フレイルムウイザードリングを左手の中指にはめ、

「変身！」

そう叫び、俺はリングをドライバーにかぎす。

(フレイム！プリーズ！ヒー、ヒー、ヒーヒーヒー！)

燃え盛る魔法陣が俺の体を通り抜け、姿を変えさせる。

通った後には、

「さあ、ショータイムだ！」

仮面ライダーウィザード、フレイムスタイルが立っていた。

「つ……所詮人間！それも1対3！勝てるわけがない！」

フランは叫ぶ。そうあってほしいかのように。だが、往々にして現実とは辛く、厳しいもの。

「それはどうかな？」

そういつて、俺は左手に、装飾の増えたフレイムウィザードリング、フレイムドラゴンウィザードリングをはめる。そして使う。

(フレイム！ドラゴン！ボー、ボー、ボーボーボー！)

先程の魔法陣が体を通り抜ける。ただし、さっきと違うのは、真つ赤なドラゴンが体の周りを回り、俺と一体化したことだ。炎が消え去った後に、俺はウィザード、フレイムドラゴンになっていた。黒かったコートは赤く染まり、胸部には竜の意匠がしてあった。

「さて……」

間髪入れずに右手にコネクトワイザードリングをはめ、使う。

(コネクト、プリーズ。)

現れた魔法陣に右手を突っ込み、あるものを取り出す。それは、

(ドラゴタイム！)

大きなタイマー、ドラゴタイムだった。そのタイマー部分をねじり、一周させる。

(セットアップ！)

「っ！いけない！」

フランのうち一体が弾幕を放ってくる。しかし遅い。

タイマーの親指を横した部分を叩く。

(ウォータードラゴン！)

その音声とともに、青い魔法陣が現れ、そこからワイザード、ウォータードラゴンが姿を現した。そして、右手につけた青いリングを使う。

(チョーイイネ！ブリザード！サイコー！)

ウォータードラゴンの前に青い魔法陣が再び現れ、冷気を吐き出す。その冷気で、弾幕は凍り、下へ落ちていった。

「な……分身……っ!?!」

「まだまだいるぜ？そら！」

2回目を叩く。

(ハリケーンドラゴン！)

今度は碧色の魔法陣から、緑色のウィザード、ハリケーンドラゴンが現れる。

「おまけだ。こいつも呼んでやる。」

3回目。

(ランドドラゴン！)

地中から黄色いウィザード、ランドドラゴンが現れる。そして、タイマーの針が一周して止まる。

(ファイナルタイム！)

「これで4対3だ。」

「く…ううううっ！【禁弾 恋の…】

「させるか！」

ハリケーンドラゴンが黄緑色のリングを使う。

(チヨロイイネ！サンダー！サイコー！)

魔法陣より雷の竜が現れ、三人のフランに直撃した。

「「きゃあああっ!!」「」

「…もう少しで救ってやる。今は寝てろ。」

ドライバーのギミックを動かし、タイマーをかざす。

(オールドラゴン！プリーズ。)

その音声とともに、ウィザード四人の体は浮き上がり、一つになる。赤き竜は頭に。青き竜は尻尾に、碧き竜は翼に。黄色の竜は爪になり、俺の体に装備される。

「ファイナーレだ。」

「く…まさか、私が…負ける…とは…くくく。くはは！いいぞ！今回は私の負けだし、しかし、姉上様？蘇るぞ？舞い戻るぞ？私は何度でも！くは、くはは、くはははっ！」

「っ……フラン……」

レミリアは顔をうつむかせた。フランの中の狂気は、笑った。それは、また蘇られることを知っているからという余裕。だが、俺の前で理不尽な傷は残させやしない。俺はドライバーのギミックを動かし、一つのリングを使う。

(チヨロイイネ！キックストライク！サイコー！)

「だああっ！」

翼で飛翔し、空中で一回転、そして飛び蹴り。かなりの勢いをもって放たれた飛び蹴りは、フランの体をまともにとらえた。爆発ののち、俺は姿をフレイムスタイルに戻し、倒れているフランの右手に一つのリングをはめる。

「!フラン!白狼貴様、これ以上は…」

「うるせえよ残姉が。俺は今からフランの中の狂気を封印しなきゃなんねえんだよ。妹が狂ってたからって邪険にしたお前にできることはない。どいてろ。」

「うっ…」

レミリアは、威圧された。ただの人間に。場所を、譲った。

俺はさも当然のようにドライバーのギミックを動かし、フランのリングをかざす。

(エンゲージ、プリーズ。)

「ちよ、白狼!?!待ちなさ…」

霊夢が何か言っていたかもしれないが、フランの中のアンダーワールドへ向かった俺には、聞き取れなかった。

ほんとうは

「よつ、と。ここがフランのアンダーワールドか。」

そこは、どうやら食堂のようだ。フランにレミリア、美鈴に咲夜、パチュリー、みんな揃って夕食を食べていた。

「ああ。やつぱりこの子は優しい。」

「だあれ？」

俺がその光景に微笑んでいると、フランがいた。おそらく、狂っていない方の。俺は一度スペルを解き、姿を見せる。

「…あ、貴方は…あの時の…」

「夜月白狼だよ。君が、ほんとのフランだね。」

紅い瞳、無垢な容姿。狂っている方とはまた違った印象を与える。

「どうしてここに…？ここは私の心の中。貴方は入れない筈なのに…」

フランの疑問に笑って答える。いつもなら、気恥ずかしくって言えないけれど。不思議とフランになら、するすると言葉が躍り出る。

「それはね、俺が君を救いに来たからさ。狂気からね。」

「…無理だよ。私と狂気は、切っても切れないの。だから、一人にして？今回は貴方が止めてくれたけど、そう何度までできるかわかんないでしょ？」

「いや。断ち切るさ。確かに、今回は俺や霊夢が止めた。でも終わってない。紅霧異変は終わってただろうよ。でも君のソレは終わってない。それなのに、悠々とハッピーエンドなんて迎えてられないよ。」

と、俺はフランに言う。と、そこにもう一つ声が響いた。

「驚いたよ。まさかここまで追ってくるとはな。」

「ツ!!」

声の方を向くと、そこにはもう一人フランがいた。妖しく光る紅い瞳、邪悪な笑み。身に纏うオーラも昏い赤色を放っている。

「だが。些か疑問だ。なぜお前がそこまでする？お前はフランを憎みこそすれ、助ける道理はないだろう？襲われてなお、助けられるのか？」

奴の言葉に、俺は睨み、答える。

「俺に剣を向けたのはこっちのフランじゃなくて、オマエだろうが。オマエを憎みこそすれ、こっちを憎む必要はねーよ。ま、多少言いたいことはあるがな。」

「…不愉快だな。だがまあ、いい。どうせ私とそいつは切れない。お前にフランドール・スカーレットを救うことは出来ない！」

奴は大きく宣言する。俺は。

「出来ない、あり得ない、不可能……ああ。もう懐かしく感じるまでに久しく聞いてなかった言葉だな。」

「何……？」

「白狼……？」

俺が小さく笑い、二人のフランは怪訝そうにこちらを見る。俺はフツと笑い、

「二人揃って忘れたか？俺はなんでも創れる、んだぜ？そんな未来はないとか、そんな便利なものは無いって言われても、創って、きたんだ。俺は魔法使いが大好きでね。さつき使った【ウイザード】もそれからだ。知ってるか？魔法使いってのは諦めが悪いし、あり得ないことすんのが魔法使いなんだよ。」

「………！」

「……くっ……くはははは！正気か!?本気でフランを救う気か!？」

「ああ。でなきや、こんなところに来てねえよ。人の心の中覗いたりなんかしねえよ。」

俺の真つ直ぐとした目を見て、奴は小さく舌打ちする。

「チツ……お前……さては大馬鹿だな？」

「さてな。んなどうでもいいこと、忘れた。今、俺の中にあるのは、てめえを封印して、元のフランに戻すことだけだ！行くぞ！【力剣符　　パワーソード】ッ！」

「ここで殺す！【禁忌 レーヴァテイン】！」

俺は使い慣れた力を表す剣を持って、再び戦いに身を投じた。

希望の光

「おおおおおっ！」

「あああああっ！」

ガキインツ!!ガキインツ!!何度も響く剣戟の音。フランはずっとこちらを見ている。力を表す剣を手に立ち向かう俺を。奴も俺を見据える。この場で俺を倒し、”壊す”ために。互角に思えるこの戦いだが、実際はそうでも無い。少しばかり分が悪い。如何に力を表すパワーソードを持っていても、地力の違いは否めない。少しずつではあるが、パワーソードにヒビが入りつつあった。

「くはは!どうした希望よ!私を倒すのでは無いのか?その剣、もう限界が近そうだが?」

「るっせえよ。黙って斬り結べねえのかよ。【剣撃符 絶力破】ッ！」

距離を取り、剣を逆手に持ち、乱雑に振る。振った軌跡から衝撃波が飛んで行く。だが。

「小癩!」

ゴオッ!

奴の炎剣の前ではそよ風でしか無い。

「通じぬぞ?」

「チイツ…:どんだけだよ…:」

これが効かないとなると、本当に”剛”をメインに攻める必要がありそうだったが、正直、靈力量的に厳しい。だが、並みの攻撃は意味がない。それに、封印に使う部分も残さなきゃならない。そんな風に考えていると、フランが言った。

「もういい!もういいよ白狼!ソレは私が背負えばいいものなの!私が、一人で背負えば、誰も不幸になるようなことは何も起こらない!だから…:っ」

「…:ふざけんな。」

「っ!」

俺の声に、フランは驚く。それに構わず、俺は続ける。

「人間だろうと何だろうと、一人で背負えるものには限りがある。度を超えたモノを背負ったって、いつか潰れるだけだ。」

「…:どうして。どうして白狼はそんなにも…:」

「あ?理由なんているかよ。ま、強いて言うなら…:」

俺は、久しく浮かべていなかっただけで、挑みかかるかのような笑みを浮かべ、言った。

「俺が、最後の希望だから。」

「……！」

フランは目を見開き驚く。

「俺の目の前で、理不尽な悲劇は起こさせねえ。好きなものは数少ねえし、むしろ嫌いなモノの方が多い俺だが、最も嫌いなのは、バッドエンドだよ。誰かが犠牲になつて成り立つてる平和とか、世界とかはぶつ”壊し”、たくなる！それが俺の《理由》だ！……なあ、フラン。外の世界つてやつを、見たくはないか？まあ、いいことばかりつてわけでもないが、吐いて捨てるほど悪くもないんだ。きつと、気に入つてくれると思う。…聞かせろよ。君の本心つてやつを！」

俺がそう言うと、フランは泣きながら、求めた。

「白狼、お願い。助けて。」

それを聞いて俺はまた笑い、

「ああ。助けるよ。いつだつて、どこからだつてなあ！」

そう宣言した。その瞬間、俺の頭に、声が響いた。

『見事なり！その理想、その覚悟、その決意！』

「!？」

今度は俺が驚く番だった。その声は威厳溢れる声だった。普通なら萎縮してしまい

そうになる声。しかしその中には優しさを孕んでいた。

『怯えるな、今代の創世者よ。我は創世者^{ザ・クリエイター}。根源の創世者だ。』

「創世者……ご先祖様よ。いらつしやつてもらって悪いけど、今はそれどころじゃねえんだ。」創る、力を勝手にいろんなことに使ってたことは謝るから、説教なら後にしてくれ。」

俺の目の前にいるフランと奴は、何が起こっているのか、わからない、といった顔をし、戸惑っている。

創世者はフツと笑い、

『わかっている。それに、説教などするか。我がするのは、力の譲渡だ。お前の能力を限界まで引き出す一族秘伝の”眼”だ。』

ザ・クリエイティブ・アイズ

【創世眼】だ。』

「!!…随分と都合がいいな。本当にそれだけか?」

『勿論だ。今はあの吸血鬼の少女を助けること以外は捨て置け。元よりそれが目的であるう!』

「言われなくても! スペル回顧! 【創符 創世眼】っ!」

眼に、靈力を集中させる。

「ハッ!? くっ! 多少力を得たからといって、どうにかなるモノではないっ! 【秘弾 所

して誰もいなくなるか?」

『!あれは耐久スペル!スペルの時間切れまで耐える必要がある!だが:』

「ま、律儀に守る必要はねえよな。【クリエイト・チエーン・ブラインド創・鎖・不可視】。」

不可視の鎖を投げつけ、奴ではなくスペルカードを捉える。

「!?な…」

「そつちは律儀にルールを守る必要があるけど、こつちにそれを守る義務はないからな。

【死符 七夜】。」

全てを殺す眼、直死の魔眼でスペルの”死”を直視し、ナイフ、七ツ夜でそこを突く。それだけで、奴のスペルは消え去った。

『決めろ、白狼!』

「わかつてるよ!フラン!よく見てろ!これが俺の、変身だ!【笑顔 クウガ】ツ!!
変身!」

奴は未だに狼狽えている。俺は構わず変身する。外の世界で、何度も真似した変身ポーズ。その終わりには、俺は古代の戦士、仮面ライダークウガ、マイティフォームになつていた。

「つ…:私は死なないぞ?決して!」

その声は震えていた。まったく恐怖が無いというわけでもないのだろう。

「あ？殺すわけねえよ。だから言ったろ？封印するんだってな。【創・心】！」
クリエイト・マインド

創世眼の力で何も無い空っぽの心を”創る”、”どうやらこの”眼”、”創った”、ものを出現させる場所も選べるらしい。便利なことだ。とにかく空の心をフランの後ろに出現させる。

そして。

「はああああつ！はつ！」

右足を力を溜め、走り出す。丁度いいところで跳び、空中で一回転。その勢いのまま飛び蹴り。

「あ……あ……ああー！」

「うおりやあああつ！」

クウガの封印エネルギーのこもった必殺キック、マイティキックが、奴に炸裂した。蹴られた勢いのまま、奴は空の心に吸い込まれる。

『今だ白狼！』

「おう！【創・鍵】。」
クリエイト・キー

俺は黒く染まった心に鍵をかけた。そして。

【創・法】。」
クリエイト・ルール

この鍵に”壊れない”、という世界のルールを”創る”、”どうやらこの眼を使ってい

れば、世界のルールにさえ、手を出せるようだ。……こりや滅多に使えんな。

「……ふう、解除。」

俺は戦いが終わったことを確認し、全てのスペルを解く。そしてフランに鍵を渡す。

「君のこれまでが、この鍵だ。もし、君がアレを乗り越えられる、そう思ったら、開けるといい。もし、それで駄目でも、また助けるよ。」

「……うん！」

……どうやら、なんとかなったようだ。こうして俺とフランは無事に、今回の異変を乗り越えた。

「ふう。ただいま。みんな。」

「ま、無事に戻ってきてよかったわ。死なれたら寝覚めが悪くなるとこだったし。」
というふうに締めた。

「！戻っていたか。白狼。…どうなった？」

どうやらここは地下室らしい。そこに入ってきたのはレミリアと咲夜、美鈴、パチュリー…と黒いドレスみたいな服に赤い髪をした悪魔の少女がいた。

「ああ、レミリアか。…終わった。無事にフランの心の狂気は封印したよ。鍵はフラン自身が持つてる。」

「…大丈夫なのか？それは。」

「阿呆。お前の妹だろ。お前の家族だろうが。他ならぬお前が信じてやらなくて誰がこいつを信じるんだよ。」

レミリアの懸念を蹴っ飛ばす。

「っ…そう、だな。」

「つたく。制御できない能力…ね。」

「白狼？」

俺のつぶやきに、霊夢が尋ねる。

「ん？ああいや、なんでもねえよ。それより、異変はどうなったんだよ。」

俺の問いに答えたのは、レミリアの後ろにいた咲夜。

「もう終わっています。霧は晴れて、眩しい太陽が照っています。」

「…そうか。」

俺はようやく終わった戦いに安堵し、緊張の糸を切る。すると、力が抜け、立てない。見かねたパチュリーが俺の体に触れ、調べる。

「…あなた、いくら今代の創世者だからって無茶し過ぎよ。霊力がもう空っぽじゃない。」

「…ま、もともとのスペックはカスだからな、俺は。」

「まあ、あの骨の脆さから気づいてはいましたけど…」

パチュリーと美鈴の指摘に、俺は悪態もつかず認める。

「あんたって…」

霊夢も呆れて、あまり何も言えなくなっていた。

「ま、なんにせよ、これで一件落着だな。」

こうして、紅霧異変は終わりを告げた。

……………で。

「本当に良いのか?…その…俺が紅魔館に住むなんて。」

「主である私が良いと言っている。遠慮するな。むしろしたら血を吸って吸血鬼にして

やる。それとも、こう言ったほうがいいか？『フランの為だから』と。」

「…それは卑怯だろ。…ああ、わかったよ。よろしく頼む、レミリア。」

「白狼がうちに住むの!?!わーい!」

俺は、紅魔館に住むことになった。まあ、幻想入りしてからというもの、寝てないし休んでない。どの道一泊はしなければならなかったのだが、レミリアの厚意（否定権なし）により、ここに住むことになったのだった。で、そんな俺の立場だけれど。

妖精メイド<小悪魔||咲夜<パチュリー||俺<レミリア||フラン

こんな感じになった。一番下でないからびっくりだ。

さらに言えば咲夜よりも上だというのが。…考えるだけで怖くなってくる。空き部屋の一つを貰い、そのベッドに寝転がる。

「…ま、こっからここに慣れていけってことか。」

小さく笑い、まぶたを下ろす。余程疲れていたのか、すぐに眠ることができた。

ここは、何処だろうか？和、'、といった感じの屋敷。板張りの道場らしき場所。その中心に、俺は立っていた。周りには何人もの人がいた。全員、一人残らず何処か傷…それ

も致命傷を負っていた。その中の一人が言った。

「捧げよ……捧げよ……」

それに同調するかのごとく、他の人も続く。

「捧げよ……捧げよ……」

「自分の全てを……希望に……」

「捧げよッ！捧げよッ！」

「我が一族！此れのみが家訓なり！」

「自らを捨てよ。我欲を捨てよ。貴様の命、それは救う為のみに存在するもの。貴様の希望を、他人の為に捧げよッ！」

「な……んだよ、これ……ッ!？」

一言で言えば、異常だった。これが、歴代創世者たちなのだろうか。それに、この方々の言う家訓。

”他人の為のみに生きよ。”

利他主義、というやつなのだろう。”希望”であるために、利他主義であれ、と彼は言っているのだ。そろそろ五月蠅いな、そう思った時。

『静まれ、愚か者ども。』

「ッ!？」

厳格な声が響いた。人の波の、その向こう側。そこに立っていたのは、

「創世者……」
ザ・クリエーター

「夜月白狼。待たせたな。」

「いえ。そんなに待っていませんよ。」

周りの人を気にも留めないこの会話。

「「初代様……おお……最も強き希望……」」

『黙れと言った。』

創世者が腕に靈力を込め、一閃。それだけで、彼らは霧散した。元々存在などしていなかったかのようになつた。

『すまん。騒がしくて。やれやれ。これだから中途半端な後継者は。』

創世者は深くため息をつき、本題に入る。

『さて、本題に入ろう。白狼よ。お主に、我の全てを渡そう。』

『全て、ですか。また重そうなものですね。』

『まあそう警戒するな。受け取って困るものではないぞ?』

「今更ですね。俺が元の世界でこの能力ちからを持っていた所為でどういふことになつたか、知っているでしょう? ずっと俺の中にいて、見守ってきたあんたなら。」

俺が少し彼を睨む。

『…確かにな。それは悪いことをした。だが。ソレのおかげであの少女と出会えた。そう考えてはくれんかの?』

『…それを言ったら終わりでしょうに。そこであの子は卑怯ですよ。』

創世者の指摘に俺は言葉を濁す。

『…さつきも言ったが、お主の能力を最大限使うためには創世眼が不可欠。それは既に与えた。』

「ですね。元々チートなのに、さらにチートになるとは思いませんでしたけど。」

『希望として在るためには、誰より強くなければならんから。ま、割り切ってくれ。で、あと渡したいものなのじゃが。』

「もう手一杯なんですけど?」

創世者の言葉に俺は遠回しに拒否る。

『安心せい。これはただの考え方じゃ。別に守らなければならんものでもない。むしろお主の代で無くして貰いたいくらいのものじゃよ。』

「それある意味っていうか普通に呪いですよね。俺別に正義の味方になりたいわけじゃないんですけど。」

『なんなら再現しても良いぞ?』

「嫌ですよ。俺は聖杯戦争とかには参加しませんから。」

互いに冗談を言い合えるほどには緊張感もなくなってきた。

『で、その考えなんじゃが、お主は先程聞いておる。』

「ああ。あの利他主義ですか。」

『まあ、それを極限まで上げたものじゃのう。しかし、我はそれを無くしたい。』

「…は？家訓なら、あんたが始めたことでしょう。何故に？」

『過ちじゃった。』

懺悔するかのよう。後悔していると云った風に、彼は言った。

『そんな破綻した考え、すぐに壊れるとわかっていた。それなのに、そうしなければ暴走するからと、我は後に続く者たちに我欲を捨て去る事を創世眼の継承条件にした。何人もが捧げた。何人もが希望となった。そして、何人もが後悔し、死んでいった。その亡霊たちが、さっきの奴らじゃよ。』

「自分で沼に引き摺り込んで置いて愚か者扱いしたんすか…」

『…死してなお、あんな恥を晒しておったからの。死後は解放されるはずなのじゃ。創世者の義務からは。我を除いての。』

「……………つあー！洒落くせえし面倒くせえ！」

突然大声を出した俺に創世者は驚き、語りを止める。

「つまりあんたは、俺に一族のふざけた考えを払拭して欲しいんだろ？…やってやるよ。」

自由に生きろってんだろ？言われなくても、自由に生きてやる！いいか、俺はただ理不尽な悲劇が嫌なだけだ！それを覆す為にこそ、この能力を使つてやる！あんたも安心して、俺の中で見てろ！」

俺がそう宣言すると、創世者は笑つて。

『ああ。安心したわい。お主は我をいともたやすく超えるのう。これなら安心して託せるといふものじゃ。ほれ、頭を出せ。』

ちよいちよい、と腕で俺を呼ぶ創世者。

「あんたの声で頭を出せって言われたらあの暗殺者みたいなんだよなあ。」

そういつつ、歩み寄る。創世者は俺の頭に手を置き、

『継承せよ。我は創世者。根源より、今代へと全てを託す者。全ては全ての幸せの為に。』

その言葉と共に、俺の体に光が降り注ぐ。それと同時に意識も薄れていく。

『しばしの別れじゃ。その力で、多くの者達が救われん事を』

その言葉で再び俺の意識は暗転した。

始まりのおふざけ

紅き館、紅魔館。その地下、ヴワル魔法図書館。そこは溢れんばかりの本で埋め尽くされた図書館。その多くは魔道書で、常人が見れば一瞬にして発狂してしまうこともある。今日、ここに新たな本が入った。

「これが」らのべ、…正式名称ライトノベル…厚そうだけど、内容はそうでもないのね。サクサク読めるわ。まあ、だから」ライトノベル、…なのでしようけれど。」

そう。ラノベだ。古いのはスレ〇ヤーズ！から今のはゲーマー〇！まで。過去と現在のラノベを知っている限り”創った、”のだった。”創った、”といつても、内容までは知らないものも多い。というか、内容全てを覚えられるのは某禁書目録くらいである。故に、さっそく我欲のために俺は「創世眼」を使う必要が出た。これを使えば、”創りたい、”ものさえイメージできれば、後は自動で正しいものに仕立て上げてくれる。俺は【創世眼】の練習とラノベの読破。パチュリーもラノベの読破。一石二鳥だった。「まあ、時々境界〇上のホライ〇ンみたいにならなうか？つてくらい厚いやつもあれば、キノの〇みたいうつすいのみである。ま、千差万別だな。」

「…にしても、提案したのがこっちとはいえ、いいの？こんなことにその眼を使って。」

パチュリーが心配してくる。俺は笑って、

「ああ。創世者自体も、むしろどんどん使ってくれていったしな。…どうやら面白
いって思っているらしい。」

現代のサブカルチャーに甘い神である。いや、娯楽か。

『ふはは！なあ白狼！お主ならこのバハムー○も乗りこなせるのではないか!?!のう!?!』

と最弱○敗の神装機竜を手にはしゃいでいるのを見たときには、速攻で創世者のイ
メージが崩れ去った。

「…なんというか、ゆるい神よね。ほんと。」

「同感だ。ま、許可するのはあの人の過ちを無くしたいってあの人自身が思ってるか
らなんだけどね。」

「ふうん。」

目は本に向けたまま、言葉のみで会話する。すると奥の方から声が出た。

「パチュリー様ー！落第○士の英雄譚の整理、終わりました！」

「そう。じゃあ、これ読み終わったから、お願い。」

「え」が、学○都市アスタ○スク…早すぎますよー！」

さつきからこき使われている小さき悪魔。決まった名はなく、小悪魔とか、こあとか
と呼ばれている。

「こあも大変だな。よし、手伝おう。」

しおりをラノベに挟み、持ち歩いているポーチの中に入れて立つ。

「あ、ありがとうございますー…」

「いやいや。別にいいよ。」

手慣れた動きで本を本棚へ直して行く。俺の安息の地はここだったのかと、時々思う。それほどまでに、ここは楽しいのだった。

妹様の思し召し

ふと、目が覚めた。

いつも通りの朝。手元のスマホで時間を確認する。いつも通りの時間。少し頭を触る。いつも通りのボツサボサな髪。いつもと違ったのは。

「なあ、なんでフランがここにいるんだ？」

そう。俺の腹の上でフランが寝ていたのだ。それもガツチリと俺の腹を捕まえて。

「はあ……どうしろってんだよ。」

これでは下手に動くと起こしてしまう。それもそれで憚られた。

「……はあ。仕方ない。二度寝しよ。」

そうして、俺は再び瞼を落とす……………

こことは、出来なかった。

「白狼様。朝でございます。お目覚めください……失礼しました。」

「っ!? 待って待って待って！ 咲夜さああんっ！ 誤解！ 誤解だからあ！ 待ってえええええー！」

俺の叫びは、紅魔館中に響き渡った。それは勿論、フランが起きるに足る音量だった

ということであり。

「ん……うみゆう……んっ！」

グツ！メキュバキバキバキッ！

起きる時にフランがぎゅっと俺の体を締め付けたため、スペラ○カー並みに脆い俺の骨はあっさりの折れることになったのだった。そうなれば無論、

「WRYYYYYYッ!?!」

再び俺は悲鳴をあげる羽目になり。そうしてようやくフランが目覚め、この惨状を目の当たりにするのだった。

「あ、が、〔走符　ドライブ〕…ドクター。頼む。」

「ご、ごめんなさい白狼。私のせいで…」

俺がスペカで治療しているときに、フランはしょんぼりした様子で謝ってくる。俺は苦笑いして、

「殺されないだけマシさ。大体、俺の体が脆すぎるのが悪いんだし。気にすんなよ。」

と言う。しかしフランは止まらない。

「ううん。だって、白狼にはいっつも迷惑かけてるもん。出会った時も、傷つけたし、本読んだるときにこけて爪で本破いちゃったし、歩いて本読んだときに腹に頭突きして肋骨折っちゃうしで…」

まあ確かに、真ん中のはフランの不注意かもしれないが、

「前後二つは違うだろ。最初のは誰が悪いとかじゃないし、最後のは俺が悪いしな。：ああもうやめだやめ。食堂でみんな待ってんぞ？着替えて早く行くぞ。」

「…うん！（白狼は優しいな。：ちよつと乱暴なところあるけど。）」

俺は中学の学ランに、フランはいつもの紅い服に着替え（勿論別室。）、食堂に向かった。

———食堂———

紅き館、紅魔館。その食堂はとても広い。まあ、百人ほどの妖精メイドがいるし、仕方のないことなのだろうが。朝食は数人のコツクの妖精を除いて皆で食べることになっている。これは俺がここに住むようになってからだ。まあ、それイコールフランが普通に過ごせるようになったから、と言うのもあるが。

「んじゃあ、いただきますす！」

「「いただきますす！」」

皆一斉に食べる。中でも美鈴とフランの食べっぷりは凄まじく、あつという間に完食してしまう。で、速攻おかわり。俺はまあ、それなりに、といった感じである。皆それぞれ談笑しながら食べていた、そんな時に、フランが言った。というか、やり始めた。

「あ、白狼白狼！はい、あーん！」

「「「!?」」」

「なん……だと……?」

今日はカレーだったのだが、フランが突然、スプーンでカレーを掬い、俺の方へ持ってきた。

「ん？ほら。早くしないとこぼれちゃうよ？はい、あーん！」

「あ。お、おう。あ、あーむ、むぐむぐ…」

とりあえずいただいた。…何故こんなことになったのだろうか。

「うふふ。どお？美味しい？」

綺麗な笑顔で聞いてくるフランに、俺は

「…おう。勿論だ。」

と、とてもいい笑顔で答えたのだった。

その夜。

俺は自室で、悶えていた。

「なんだってんだ。ほんとに。…やべえ。明日からフランをまともに見れる気がし

ねえ。…どうしよう。…寝よう。とりあえず。」

明日のことは明日の俺に任せ、今日は寝ることにした。

フランも、今日は自室にて、顔を枕に押し付け、足をバタバタさせていた。

スペルの更新

その閃きは唐突に舞い降りた。

「あ。あのスペル」創って、ねえっ！」

「?どうされました?白狼様?」

俺の突然の叫びに、咲夜が戸惑う。叫び過ぎたことに気づき、顔を赤くし、咳払いをして、言う。

「スペル創造。【命符 エグゼイド】。」

新しく一枚のスペカを”創る”。

「?それは…ベルトと…なんですか?」

「ライダーガシャットさ。ベルトを装着して、こいつのボタンを押す。」

(マイティアクションX!)

ガシャットのボタンを押すと、俺の後ろにゲーム画面が現れる。

「!?!」

咲夜は目を見開き驚いている。

ガシャットを持つ右腕を左側に突き出す。それを右の顔の横に振り回す。その際、左

手も次いで同じ位置に同じ動きで持ってくる。そして、
「変身！」

手元でガシャットの向きを上下逆に回転させ、左手に持ち替え、頭上に掲げ、ベルト、ゲームドライブバーのガシャットホルダーにセット。

（ガツシャット！ レッツゲーム！ メツチャゲーム！ ムツチャゲーム！ ワツチャゲーム!? アイムア、仮面ライダー！）

ゲームのキャラ選択画面のようなエフェクト。その中の一人をセレクトし、光に包まれる。収まると、俺は仮面ライダーエグゼイドLv1になっていた。

まあ、三頭身のデフォルメされた姿なのだが。

「…あら可愛らしい。新しい力はそれですか？」

「…まあな。ゲームには当たり前のシステムつてのがあつてな。それがこれさ。」

そう言つて、俺はゲームドライブバーとレバーを開く。

（ガツチャーン！ レベルアップ！マイティジャンプ！マイティキック！マイティマイティアクション！X！）

Level1のときの顔が背中に。Level1の体からピンクに近い赤色をしたエグゼイドが現れる。頭身は普通の人間サイズになっていた。

「お、おお。すごいですね。そっちが本来の姿、ですか。」

「へへ。まーな。これが基本形態、エグゼイド、アクションゲーマーレベル2だ。で、最強形態は。」

俺は別のガシヤットのボタンを押す。黒と銀色のガシヤット。

(マキシマムマイティX！)

ゲーマドライバーにセット。

(マキシマムガツシヤット！)

「MAX大変身！」

掛け声とともにレバーを開く。

(ガツチャーン！レエエベエエルMAX！最大級のパワーフルボディ！ダリラガーン

！ダゴスバーン！)

挿したガシヤットのボタンを押す。

(マキシマムパワー、X！)

俺の後ろから、大きな装甲が現れ、俺を取り込む。そして頭だけを装甲の上部から出

す。

「更に！」

今度は金色のガシヤットを使う。

(ハイパームテキ！)

それを再びドライブバーにセット。

(ドツキーング！)

「ハイパー、大変身！」

ガシヤットのボタンを押す。

(パツカーン！ムウウウエエエキイイイツ！輝け！流星の如く！黄金の最強ゲ-

マー！ハイパームテキ！エグゼーイド！)

マキシマムマイティの装甲から解き放たれ、光と共に地に立つ。その姿は金、金、金。

エグゼイド、ムテキゲーマー。

「白狼様の時代は魔境のようですね…」

と、咲夜から遠い目で見られた。

「ええ？かつこいいじゃん！仮面ライダー！」

咲夜に仮面ライダーの布教は難しい、というのがよくわかる一日となった。

翌日には、他の人にも同じことを言われるのだが、それはまた、別のお話。

報告。そして開幕

「今回の異変、無事に解決してよかったわ。ありがとう、白狼。」

「おいテメエいっどこから入って来やがった!？」

俺がいつものようにラノベを読んでいる頃、俺を幻想郷に呼んだ張本人、八雲紫が、スキマより現れそう言った。

「あら。普通にスキマで来たただけだけど？」

あつけらかんと言う紫。

「今度から普通にアポ取って正門から来いよ。ビビるだろ。」

「善処することを前向きに検討するわ。」

俺の言葉に紫は嗤って言う。

「なんで俺の世界の政治家達が言うようなことをお前が知ってんだよ。」

「あら。私は外の世界と幻想郷を繋ぐ境界にいるのよ？ 外の世界の多少の知識くらい、持つてるわよ。」

「お前の」多少、がでかすぎなんだよなあ。…で？ 本題はなんだよ？ もう300文字だぞ？。」

「突然のメタ発言はやめなさい。それに、本題ならもう言ったわ。異変解決、ご苦労様と。」

俺のメタ発言を窘めつつ、再び本題を言う紫。

「ん？ああ。そのことか。いや、俺大したこととしてねえし。ただ救いたいものを救った結果だよ。」

「…だから、そういう…あー、いえ、なんでもないわ。忘れて頂戴。」

俺の謙遜に紫は何かを言おうとして、やめた。

「貴方、その病的なまでの自己否定はやめたほうがいいわよ？そのうち、壊れるわよ？」と、紫は警告した。俺は。

「あ？自己否定？いやいや。見てたお前なら分かるだろうけど、俺割と自信満々な発言してんだぜ？どこも自己否定なんてしてな…」

「私が。」

俺のまくしたてるかのようなセリフに、紫はすごい剣幕でかぶせる。

「私が異変の時だけ貴方を見ているとでも？」

「っ…」

それは、その発言は、俺の日常での言動、行動を見ていることの証明だった。嘘を見抜かれた腹いせに、

「人の私生活を覗くとか、ストーカーかよ。どこのASTだよ。怖えよ。マジで。」
と、嫌味を言っておく。

「なんとも言いなさい。とにかく、異変に向かわせた私が言うのもなんだけれど、少しは、自分、という存在に自信を持ちなさい。それくらいの価値はあるわよ。」

そう言つて、再び紫はスキマに入り、帰つていった。一人、自室に残された俺は、

「…はっ。自分を信じろ？誰も、おれを信じる奴がないのに、か？」

俺の、自身への問いに答えるものはいなかった。それは、つまり。

『……………』

初代である創世者さえも、聞くだけで答えてくれなかった、ということである。いつも俺の心の中に巣食う大きな雪の山。その中に小さくあるかもしれない答えを、俺は見つけられるのか。もう春も近い。自然と解けることを祈るしかないのだろうか。

しかし。やはり現実には俺が嫌いらしい。

「どういうことだおい……………」

疑問とは、自分で答えを出すまで、解けることはないらしい。

「なんで未だに雪が降つてんだよ。もう4月だぞ!？」

さらに言えば、俺の救いを求める存在も。いなくなることはないらしい。

氷解

春雪異変の章

飛び立つ希望

「春雪異変…か。」

「異変だね、白狼。」

紅き館、紅魔館。そこは窓が少ない。その内の一枚から、外を見る。未だに降る雪。天より降り注ぐ白い絵の具。それは既に真っ白に染まったカラフルだったキャンバスをさらに白く染め、更には砂山のように積もり積もっていく。

「どうするの？白狼。」

フランが少し妖しく笑って俺に聞く。

「…どうもしないよ。俺は別に全ての希望じゃない。そんなの…成り立つわけない。全てを救うなんて、そんな人間は勿論、神にも無理だろうから。」

俺は苦笑いして言う。開いていた手を強く握り、

「そう。出来るわけないんだ。全員の希望を叶えることなんて…そんな、大それたこと…」

小さく、囁いた。

雪はまだ、溶けるわけがなかった。

食堂にて。

「さて、白狼。お前、異変を解決してくれないか？」

「唐突だなあレミリア。なんで俺が？」

結局、レミリアに言われたのだった。

「隠さなくてもいい。わかっているぞ？その目は、救いたくてしようがないという目だ。この異変によつて困っている無辜の民を救いたいという目だ。もはや病気だな。ソレは。」

レミリアの言葉に、俺は食つてかかる。

「失礼な。俺は別に……」

そう言つて目をそらす俺に、説得力はなかった。

「……はあ。お前も強情だな。フランが、外で遊びたいと言つていてな、しかし今のような雪ばかりでは遊びたくないらしい。春の陽気な夜に遊びたいと。その夢を、希望を。叶えてやつてくれないか？」

それは、目的のすり替え。わかっているながらも、そう言われたらもう言う答えは決

まっている。だって俺は。

「ああ。わかった。俺がフランの最後の希望だ。絶対に叶えるさ。」
フランの、フランのためだけの希望なのだから。

正門にて。

「お気をつけて。怪我をせぬように。」

美鈴に声をかけられ、俺は笑って、

「ああ。きつと無事に帰ってくる。その時は、雪もきつと溶けてるだろうさ。【翼符ドラゴンウイング】」

俺はいつものように竜の翼を創り、飛翔する。

さて、異変の解決と言っても、正直心当たりなんてない。そもそも俺は幻想郷に対し無知すぎる。外の世界、つまりは元の世界に対する知識はあっても、ここでは赤子も同然。一体何処を探せばいいのやら。と、その時。

「ふふ。冬だ！雪だ！私だ——！」

と叫ぶ一人の女性がいた。水色と白色の服。周りに雪の結晶。なんか、黒幕っぽい人だった。

「んー、えーと、貴方は何者ですか？」

一応年上そうなので、敬語で話しかける。すると驚きの答えが帰ってきた。

「私はレティ・ホワイトロック。黒幕だー!!」

「な、なんだってー!？」

まあ、嘘だろうが、驚くほかなかった。

冬の雪って、特別な気分…

「まあ、嘘ですよね？」

「…なにおう!? どうしてそう思うのさ?」

どうしても何も。

「だって、黒幕がこんなところをウロウロして何になるっていうんです? あり得ませんけど、俺が黒幕なら、自分の根城でふんぞり返ってますよ。」

「むう…: そうかー。 あーあ、ちよつと遊びたかったのになあ。」

俺があつさりと言い返すと、レティは少し拗ねる。

「…: そんなに言うなら、少しなら良いですよ?」

と、俺はいつものお節介をしてしまう。レミアに病気とまで言われたお人好しスキルが。

「! : 良いの!?! よしやろうすぐやろう! : よーい、スタート!」

その異常さに気付かぬまま、レティは弾幕を放ってくる。

雪はまだ、降り積もっていく。

「寒符　　リングリングゴールド！」

レティの周りから、雪玉のような弾幕が輪状になって飛んでくる。

「盾符　　ドラゴンシールド！」

すぐさま竜の盾を創り、迫り来る弾幕を防ぐ。

「つ…よく見えねえ。雪は嫌いじゃねえが、こういう時は見にくいな…っ！」

どうやら地の利は向こうにあるらしい。だが。

「いつまでも防いでばっかじゃられないよな…！」

俺の笑みは、熱く燃え上がっていた。レティは変わらず弾幕を放ち続ける。

「ふはははははー！凍るがいい！今は私の季節、次も私の季節！その次も次も！ずっと私のターン！」

そう言つてテンションを上げていくレティ。でも、俺にはそれは、その姿は。

「…解放してあげます。その苦痛から。永遠に人々に凍える冬を与え続けなければならぬその運命から。」

「っ…無理だよ。私は妖怪だ。如何に君が”能力者”でも、私の季節で、私には…っ！」

レティはその言葉と共に冷たき弾丸を飛ばしてくる。

「力剣符　　パワーソード」。【炎撃符　　絶力炎斬】。

「ほら。これやるよ。」

俺はとあるものを、創り、渡す。

「?これは?」

「カイロだよ。これをかなり振って、手に持っとけばそのうち温まる。ゆっくりでも、変わるものはある。ま、例えばカイロの温度とかな。」

そう言つて、俺はレテイの元を離れ、飛び去る。

残されたレテイは、言われた通りにやってみると、しばらくするとカイロに熱が発生する。

「暖かい…まるで暖炉ね。…いえ、この場合、希望の光、かしらね。」

レテイの顔には、一足早い春がやってきていた。

ネコ科は白狼にとつての…

「……………迷った。」

話は単純。迷った。少し低空飛行して探索していると、森にたどり着いた。そこに入ってしばらく探索していると、見事に今までの道がわからなくなってしまったのだ。

「はあ。まさかのここで足止めかよ…」

とはいっても、ひっきりなしに妖精は襲ってくるため、割と退屈はしないのだが、段々とうつとおしくなってくる。

「つたく。一体何処なんだよ。ここは。」

俺の独り言は倒れた妖精達が置いていくピンク色の玉の中に埋もれていく。そう、思っていた。

「ここが何処か、知りたいの？」

「ツ!?!【力剣符　　パワー…】」

「ああダメダメ！にやんつ！」

正体不明の人物に対し、使い慣れた剣を向けようとするものの、はっし！と腕を捕まられて阻まれる。

「全く。今代の創世者は早とちりしすぎなんだよ。」

「君は…?」

俺より速く動いたネコミミを持つ女の子。橙色の服に、二つに分かれた猫の尻尾。

「私は橙紫様、八雲紫の式、八雲藍様の式神だよ。」

と、猫又の式神、橙は名乗った。

「橙か。俺は…」

「夜月白狼でしょ。知ってるよ。紫様から教えてもらってるもん。」

こっちも自己紹介しようとしたところ、名は知られていたらしく、阻まれる。…今日
はよく物事を邪魔される日だな、と、他人事のように思う。けれど聞くことは聞いてお
かねばと、俺は質問する。

「なあ、ここは何処か知ってるか?知ってたら教えて欲しいんだが…」

すると橙はニコリと微笑みつつ頷き答える。

「うん。知ってるよ。っていうか住処だし。ここはね、マヨヒガっていうの。」

「マヨヒガ…まよひが…まよいが…迷い家…ああ。なるほど。そりや迷うわ。」

マヨヒガ。人を迷わせる為だけのようなネーミングである。

「はあ。こりや本当に足止め食らったな。…あー、橙?できれば——」

「ここから出して欲しい、かな?」

「……………ああ。頼ってばっかで悪いけど、俺はすぐにでもここを出なきゃいけないんだ。」

俺が理由も込めてお願いすると、橙は。

「……………嫌。」

「……………え？」

断られた。まあ、俺は人間で、彼女は亜人間。確かに願いを聞く理由は多分ない。

「別に、食べたいからとか、そういう理由じゃない。ただ単に、命令だからだよ。」

「紫の命令か。んー、じゃあ質問を変えよう。どうやったら出られる？」

と問う。すると橙は、

「私に勝てば出してあげる。このマヨヒガからね。」

「やっぱりか。んじゃあ、仕方ない。始めますか！」

俺がそう言うと、俺はスペカを取り出し、橙は爪を伸ばす。

「【力剣符 パワーソード】！」

「【式符 飛翔清明】！」

互いに一枚使い、駆ける。だが、向こうは猫又の式神。こっちは肉体的スペックは平均以下の人間。スピードに違いはもちろん現れる。

「ふっー！」

右上からの振り下ろし。それを橙は、

「甘っー！」

ひよい、と躲し、弾幕を放つ。

「チイツー！【盾符　ドラゴンシールド】っー！」

「そこー！【仙符　鳳凰卵】ー！」

橙が俺が展開した盾に向かって弾幕の塊を投げつける。すると盾を構える俺の目の前で炸裂し、俺に向かって殺到した。

「なっ…!？」

バババババツ！何発も何発も盾に当たる。実はこのドラゴンシールド、見た目ほど強くはない。魔理沙のマスパだと、10枚でようやく耐え切れるほどだ。つまり。パリッ…ガガガガツ！

「がっ…ぐあああつ!？」

無論、壊れる。耐え切れなかった分を一身に受け、俺は吹き飛ぶ。うつ伏せに倒れた俺の少し先にパワーソードが刺さる。

「ぐ…ぐ…速え。なんだあの早さ。あれが橙の能力ってことか。全く。面倒な。」

「もういいでしょ？貴方の剣じや私を捉えることなんて出来っこない。大人しくして、巫女が来るのを待って。」

橙が爪を戻しつづつ言う。俺は、ふらふらとしながらも立ち上がる。

「…あ？悪い。ちよつと聞いてなかった。逆転劇のイメトレしてたからさ。」

「貴方…正気？」

俺の発言に、橙は訝しむ。俺は笑って、

「さあ？忘れたよ。そんなどうでもいいこと。今、俺の中にあるのは、お前に勝つて、こ

こを出ることだけだ！【速刀符　スピードダガー】、【銃符　ニードルリボルバー】。」

俺は二つのスペカを発動し、手を合わせる。

「合体ユニオンッ！【速銃剣　シュートブレード】！」

新たなスペルを”創造”，し、引き金を引く。

「!?見え……………」

橙は咄嗟に頭を下げる。そのギリギリを弾が通り過ぎる。

「あ、危なかった…」

すとん。と、橙が崩れ落ちた。

「あれ？た、立てない？…なんで？」

「…うまくいったか。なんでも、動物には刺激されると動かなくなる箇所があるらしく

てな？今回はそれを狙ったってわけだ。」

「え？まさか、躲されることを見越して？」

「まさか。一応当てるつもりだったさ。いかに普通なら死ぬ弾丸とはいえ、スペルカードシステムで死なないようになったんだ。当たったって大丈夫だったさ。」

気分はあの武偵だ。あの子、ガチで外そうと思わない限り外れないからな…

「……………私の負け。か。」

どうやら、決着がついたようだ。よかったよかった。

その後、橙に案内され、普通に脱出したのだった。その先には。

「……………人形？」

「シャンハイー！」

可愛らしい服を着た空飛ぶ人形がいた。

人の形、人でなし。

「これは…人形…なのか？よくできてんなー。」

「シャンハイイ！」

その人形はフヨフヨと浮き、こちらに近づいて来る。

「ん？なんだ？」

もう少しで人形の手が俺の肩間に届く、と言うところで、

「シャンハイイツー！」

「いいっ!？」

どこからともなく槍を取り出し、突き刺そうとしてきた。俺はそれを急いでバックステツポウ！で躲す。

「あら残念。今ので終わるかと思ってたのに。」

「…ドールマスターってやつか。」

「ええ。私はアリス。アリス・マーガトロイド。人形使いよ。まあ、魔女、とも言うわね。」

青いドレス？に赤いカチューシャをつけた少女が現れた。その右肩ら辺にはもう一

体の人形がいた。

「随分なご挨拶だな。いきなり襲って来るなんて。」

「あら。いきなり現れたのはそつちよ?」

と、お互いの状況を言い合う。

「マヨヒガつてとこでまた戦つて…」

「私は人間に極限まで近づいた人形を作りたくて…」

…で。

「立ち話もなんだし、上がつてく?」

「…そつちからしたらいきなり現れたんだが、いいのか?」

「今更でしょ? お互い敵意はもう無いようだし。貴方の場合、戦いにならない限り敵意すら見せないくらいのお人好しみみたいだし。まあ、気にしなくていいから、遠慮せずに入りなさい。」

そう言われれば仕方ないと、お言葉に甘えて入ることにした。

……で。

アリスの家の中は、なんとというか、よく言えば物がたくさんあり、悪く言えば少し散らかっていた。

「驚いた？ 魔女の家がこんなになってるってことに。」

「い、いや。物が多くあって、いろんなことに事欠かなそうだな、と。」

俺がどもりつつも言うと、アリスは笑って、

「貴方、言葉選びが上手いわね。どうすれば思っていることが伝わるか、伝わらないかがよく分かってる。でもね。世の中、察しのいい人っていうのはいるものよ。上には上がいるの。よく覚えておきなさい。」

…どうやら、思っていたことはバレていたらしい。まあ、

「…肝に銘じておくよ。まあ、俺のは言葉選びっていうよりは、言葉遊びっていうの方が正しいかな。」

「…貴方にとって会話ってなんなのかしら。分からなくなつたわ。」

アリスは少し、不機嫌になったようだ。まあ、こっちはたかが十数年しか生きていない小さな人間。向こうはそれよりもっと長い時間を生きてきた魔女。精神と精神の戦

「白狼？」

「……………あ。」

「ちよつと、どうしたのよ白狼。会話が云々っていうのはいいから、異変のことについて……………」

アリスは、地雷を踏んだかと、話題を変えようとした。だが、元々、そんなの意味はなかった。

「……………ああああああああああアアアアアアアアアアアア！」

俺は叫んだ。声が枯れようが、世界から色を失おうが構わず。

「白狼!?……………ほんとに地雷踏んだわね……………らしくない。上海、お願い。」

椅子に座りつつ、騒ぐ俺に上海人形が手刀を浴びせる。

「ガッ……………」

俺は呆気なく、意識を失った。

「……………この子、とつくに狂って、壊れてるわ。よく正気を保っていられる……………いえ、狂ってるからこそ、あんなに飄々としていられるんだわ。……………外の異変どころじゃないわね、コレ。」

ぐつたりとする俺を見て、アリスは嘆息する。

止まった雪の代わりに、強風が窓を叩いていた。

夜月白狼：オリジン?それともリリイ?とりあえずトラウマで。

「……………」

「…悪いことしちゃったわね。髪もボサボサ。白目向いてるし。汗も出た。余程のことなのね。まだ14、5歳のはずなのに。一体何があったっていうのよ…」

俺は、アリスに介抱され、ベッドに寝かされていた。まあ、髪がボサボサなのは寝癖と探索時の風圧。白目は寝てる時は瞼が閉じ切らないからである。…紛らわしいな。

「…綺麗な髪…手入れしたらもつと綺麗になるのに…」

アリスが一人、白狼の頭を撫でていると、不意に、アリスの頭の中に声が響いた。

『礼を言おう、人形使い、アリス・マーガトロイド。』

「ッ!誰?!」

いきなり頭の中に響いた敵かな声に驚き、周りに上海、そしてもう一体の人形、蓬莱を展開する。

しかし声は、

『怯えるな。魔法使い。我は創世者。夜月白狼の先祖である。』

「白狼の……？」

『左様。我が一族は希望の一族。その能力、”ありとあらゆるものを創造する程度の能力、”により、多くのモノを救い続けてきた。』

「万物創造……そんな大きな力が白狼に……？」

信じられず、白狼を見る。もう落ち着き始めている俺は、すーすー、と寝息を立てていた。

『魔法使いよ。お主はかなり深くまできている。昏き深淵まですぐだ。お主が地雷と言った、白狼の世界での話。』

「っ！やっぱり、余程のことがあったのね。」

『うむ。聞くか？今なら戻れる。元々、お主には関係のないことじゃ。今戻れば、好きな人形作りに没頭できる。お主が深淵を覗き込めば、お主もまた、深淵に覗かれる。』

アリスは、そんなことを言われて止まる少女ではなかった。

「聞かせて。この子は多分、一人でその過去を背負ってる。そんなの酷すぎる。」

アリスがそう言うのと、創世者はフツと笑い、

『では、少年の話をするでしょう。別に星の内海、物見の台から聞かせるわけではないが。ある意味神の祝福に満ちた物語だ。』

そう言って、創世者は語り出した。

地面は少し、湿り始めていた。

運動神経皆無。顔はそこそこ。アニメや特撮が大好き。好きな食べ物はハンバーガーやマグロの刺身。嫌いなものはバッドエンドと誰かが死ぬこと。あと蜘蛛も嫌いだった。

どこにでもいるような少年。それが、夜月白狼と言う少年だった。

生まれは九州、熊本の天草。4歳で熊本市へと移った。そこで幼稚園に入ったわけだが。

へはっ。見ろよこいつーシラガ生えてるぜー!

〈ジジイじゃんー〉〈ギャハハハハハハ!〉

周りは黒髪ばかり。その中で唯一の異色の髪なのだ。元から出ている杭。打たれないわげがない。少年は泣いた。やり返そうと思った。親が言い聞かせ、止めた。

ある日、少年の身体能力がバレた。無論、バカにされた。子供とは良くも悪くも正直だ。考えもせずに行動する。純粋。だからこそ、最も残酷なことを残酷と知らずに行える。

小学生になった。

入学してからは皆がある程度少年の扱いに慣れ、銀髪のこと、身体能力のことも触れなくなってきた頃。能力が発現した。思ったものを、創り出す、能力。白狼は真つ先に親に報告した。

使い方、心構えを教えられ、それをしつかり守った。

学校では、やはりというか、嫌がらせが多発した。幼稚園が同じだった者はしなかったが、小学校で初めてあつた者から、暴力や罵詈雑言をぶつけられ、毎日のように泣いた。先生が来て、向こうが謝り、それを許す。そんな生活を6年間続けた。部活はバスケットをやった。幼稚園の時から一緒だった子に誘われたからだ。

中学。ここが、最も重要な三年間となる。

入学する頃には、能力の扱いに慣れていた。しかし、少年の心は磨り減っていた。毎日日浴びせられる罵倒。先生も割と冗談なのだろうで済ませる。誰一人、少年の心を想う者はいなかった。少年は思った。

「ああ。なーんだ。俺って価値ねえんじゃない。」

それを、親に言うわけにはいかなかった。そんなことを言えば、面倒なことになる。そんなの、俺ごときがやっていいことじゃない。そう思つて、中学に入つてからも、他人や先生、親に相談することなく生きていった。

中学になつても、少年に対する風当たりは強かった。そんなある日、バレた。少年の

能力が。翌日、皆の態度が一変した。

教室のドアをラノベを片手に開ける。すると足元に手が見えた。驚き、前を、教室全体を見る。

「!?」

クラス全員が、土下座していた。

〈おねがいます!殺さないで!〉〈今までのこと、謝るから!〉〈友達になるから!〉〈優しくするから!〉

〈〈殺さないで!〉〉

今まで、少年を傷つけてきた子供達は、白狼が剣を”創り”、さらに”創った”、泥人形を斬り倒しているのをクラスの誰かが見たらしい。それを見てから、クラスの者は皆、これまでのことで復讐されるのではないかと。それを聞いた少年は、

「は?なんで俺がそんなめんどいことしなきゃならんだ?別に、気にしてねーよ。今までののがお前らの人に対する接し方なんだろ?珍しいとか、違うからってそれを挿揄ったり、人の欠点あげて笑ったり、何も言わねえからって殴ってみたり。それがお前らの友情ってやつなんだろ?いいじゃん。やれよ。ほら。俺の目の前で、俺以外にやってみろよ!」

少年の今まで我慢していた分が一気に放たれた瞬間であった。しかし、誰一人とし

て、他の者に少年にやったことをした者はいなかった。

「できねーならやるな。」

少年はそれだけ言つて、席に座つた。

その翌日から、少しずつ関係が修復され、少年も笑うようになっていった。少年は、お人好しだった。無類の。

「持つよ。」

「ん？（こ）？（こ）はね。」

「ん、わかつた。やるよ。」

頼まれたことを断らない。そして自分で無理なことしか頼まない。面倒だからと投げなかつた。つまり、「創造」の依頼も。

少年の霊力全てを持つていく。けれど、少年は、

「俺が、役に立ってる…はは。なんだ。簡単なことだったんだ。」

笑つていた。頼られることが、喜びだった。けれど。崩壊は早かつた。日に日に、依頼する人が増えていった。もう少年のキャパシティを超えたものになつても、構わず来た。

創つて、創つて、創つて、創り続けて。気づけば世界は、少年の名前しか聞こえなくなつていた。

「うるさい。…うるさい。……うるさいうるさいうるさいー！」

少年は家に帰り始めた。依頼を全て終わらせて。

そうして、幻想入りした。

『これが、白狼の過去だ。』

「…何よ、ソレ。私なんかより、ずっと辛いじゃない。」

『それは違う。魔法使いよ。人の過去は少なからず辛さ、悲しみを纏うもの。そこに優劣はない。』

「それでも！こんなあんまりじゃない！なんで、なんで誰も気づかなかつたのよ？白狼が限界だつて、助けてつていつてたのに！」

アリスは叫ぶ。その時。

「う…」

『！！』

うつすらとだが、俺は目覚めた。

「…知らない天井だ…」

「その中に、白狼は入ってるんでしようね。」

アリスの鋭い問いに、俺は。

「もちろん、入るよ。」

嘘をついた。そうでもしなければ、話してくれなかっただろうから。

「…はあ。わかったわ。異変のこと、少し教えてあげる。だから、絶対に解決しなさい。」

「…ん、わかった。」

そう言っつて、アリスは今回の異変について知っていることを教えてくれた。

「それじゃあ、行ってくるよ。」

「ええ。終わったらまた来なさい。今度はお茶くらいならいれてあげるから。」

「楽しみにしとく。それじゃ。【翼符　ドラゴンウィング】。」

俺はアリスと別れ、また大空へ飛び立った。

春のかけら、春度が降ってくる大元に。

ブリズムラーって、やっぱり名曲だと思う。

飛翔する。天高く。妖精達も弾幕と共に向かってくるが、ニードルリボルバーで打ち消し、間を縫って脳天に打ち込み落としていく。スペルカードの効果で死にはしない。だから安心して撃ち込めるといふものである。

そうして雲を抜けると、そこは春だった。暖かかったのだ。

「…でもま、学ランを脱ぐほどじゃねえんだよな。」

『白狼。よく耳をすませてみよ。』

と、感想を述べると、創世者が指示した。そうしてみると、音楽が聞こえて来た。おそらく、ヴァイオリン（よくバイオリンと言う人がいるが、こちらが正しい。ソースは音楽の先生と教科書）と、トランペット、ピアノ…もしくはキーボードだろう。

「これは…音楽？この辺で演奏してるっていうのか？」

『うむ。そのようだ。…名前のない怪物くらいやってほしいものじゃが。』

「あんたは幻想郷に何を求めてんだよ…」

多分サイコ○スはまだ幻想入りしてないと思う。まあ、ドミネーター”創ろう、”と思えば、創れる、けど。しかしまあ、聞けば聞くほど、いい音楽だ。アニソンくらいしか

聞かない俺でも凄いとと思う演奏。うちの中学の音楽の先生もある程度褒めそうだな。

『演奏の大元の方に春度が集っておるようだ。行くといい。』

「ん、そっか。んじやあ行かないとな。」

創世者がそう言つて、俺は演奏の大元に向かう。そこでは、三人の少女が音楽を奏でていた。一人は赤い服を着た、キーボードを奏でている少女、一人は、薄い紫色をした服を着た、トランペットを奏でる少女。最後の一人は、黒い服を着た、ヴァイオリンを奏でる少女。三人は俺に気づく事なく、演奏を終わらせた。パチパチパチ……

「！！！！」

「あ。」

気づけば拍手していた。三人は顔を見合わせ、数瞬の後、クスリと笑った。

「聞いてくれてありがとう！でも、貴方も物好きね！こんなところまで来るなんて！」

トランペットの少女が近寄ってきて言う。

「メルラン…考えたらわかるでしょう。異変の解決に来てるのよ。そいつ。」

ヴァイオリンを持つ少女が気だるそうに言う。

「でもま、聞いてくれた事に変わりはないし、良いんじゃない？」

最後に、キーボードの少女が締めくくった。

「…あー、悪い、邪魔するつもりはなかったんだ。俺はその子が言った通り、異変の解決

に来た。でも、良い演奏だったと思う。音楽に通じている訳じゃないから、そんなに詳しく言い表せないけど、ほんとに。」

「うんうん！ありがとー！あ、私はメルラン！メルラン・プリズムリバー！で、そつちのキーボードの子が、リリカ。ヴァイオリンの子が、ルナサだよ！三姉妹！」

と、メルランが自己紹介をして来るため、こちらも返す。

「夜月白狼だ。夜の月に、白い狼と書く。まあよろしく。」

「へえ、なかなか良い名前じゃない。」

と、リリカが反応する。しかしルナサは、

「二人とも。今はそんな事をしてる場合じゃない。お仕事だよ。結界を越えて冥界に行かないといけないのだから。」

「冥界、ね。そこが異変の大元か。」

『まさか冥界があるとはな。』

初めて聞く単語に、俺たち二人は反応する。

「あ、そうだった！でも、白狼も異変解決に来てるんだよね？だったら一緒に行こうよ！」

とメルラン。

「え、良いのか？」

と俺。

「まあ、私たちは演奏するのが目的であって別にここを通さないのが仕事ってわけでもないしね。」

とルナサ。

「じゃあ決まりだね！レッツゴー！」

とリリカ。俺の狼狽を気にせず、さっさと冥界へのゲートを開く。

「早!? ったく! しゃあない、いくか!」

頭の中で仮面ライダーゴーストのOPを脳内再生しつつ、ゲートをくぐった。そこは。

「…うわあお。暗いな。マジで。」

太陽なき冥界のすがたがあった。

The wheel fate is turning.
level action!

冥界に入り、俺は入ったすぐのところでプリズムリバー姉妹と別れ、冥界の探索を開始する。はずだったのだが。

ヒュンツ！

「っーうおあっ!？」

刀の言つてな一閃が飛んで来た。俺はそれを身を引くことかわかし、犯人を見据える。

俺と同じ、銀髪の少女だった。緑色の服を着て、刀を持っていた。側には人魂つぼいのまでいる。

「あつぶねえ。よく奇襲されるよ。まったく。んで？君は？」

俺は少し不機嫌になり、少女に問う。一応、パワーソードのカードを用意して。

「魂魄…妖夢。貴方の春度…頂きます。」

「成る程。君が集めているってわけか！」

「こうして、戦いが。」

「行きます。【幽鬼剣 妖童餓鬼の断食】。」

「くっ！やるしかないか！【力剣符 パワーソード】！」

ガキインツ！…始まった。

「やあああつ！」

妖夢が素早く左右に動き、そこで何も無い空間を斬り、その軌跡からウロコの形をした弾が飛んでくる。

「っ！【剣撃符 絶力破】！」

こちらにも負けじと衝撃波で弾を打ち消す。風が強く発生する。

「っ…厄介な力。警戒すべきはその力強さ、ですか。」

「ま、少し乱暴なのは否めないけど。行くぞ！【剣撃符 絶力斬】！」

大きく構え、上から剣を振り下ろす。

「ツ！！」

ガキインツ！ズズンツ！

「く…重い…なんて力…」

「まるで俺がゴリラみてえな言い方だなあ、おい。」

咄嗟に二刀を以って防ぐ妖夢。しかし、その勢いまでは防ぎきれず、地に膝をつけてしまう。

「く…【符の壺 二重の苦輪】…!」

妖夢が新しいスペカを使う。すると虚空からもう一人の、いや、妖夢の幻影が刀を以って斬りかかってきた。

「それは本物と同じように斬られたらダメージを負いますよ!」

成る程。このままにしていたら幻影妖夢に斬られ、かといって幻影妖夢の攻撃に反応すれば、本体に攻撃される可能性が高い。であれば……

「二つ同時に受ければいいだけの話。【双符 ツインストライク】。」

スペルカードをパワーソードに溶け込ませる。するともう片方の手にパワーソードがもう一本現れる。

「なっ…!?!」

ガキインツッ! 幻影妖夢の一撃を、もう一本のパワーソードで受け止める。

「二刀流…っ!」

「おうともさ。ま、達人とまではいかななくても、それなりのことは出来るぜ?」

そういつて、俺は。

「ああ。それと。一本だ。妖夢。【力劍符　　パワーフレイムソード】。【劍撃符　　絶力双破】。」

劍に炎を灯し、離れた妖夢に向かつて、ゴウツ！と衝撃波ならぬ炎撃破を飛ばす。

「ぐ、あああつ！」

ギリギリで刀で受けたものの、力を表す一撃はそう軽いものではない。妖夢は吹き飛ばされ、壁に打ち付けられた。

「かはっ……」

「悪いな。異変を終わらせるためには、なりふり構ってられないんだ。」

俺は、救わなきゃならないから。こんな狂乱は、終わらせるって。レティと、アリスと、レミリアと。そう誓ったから。

心の中でそう叫び、俺は先へ進む。その時、俺は気づいた。

「ん？あれは……」

長い階段を登り終えた時に目の前に広がっていたのは、大きな大きな桜の木。花はまだ開いておらず、つぼみまでしかついていない。

「アレに……春度が集まっているのか……？じゃあ、元凶の目的は……」

雪は止まり、風も凩いだ。後はもう。ゆっくりでも、とけていくだけである。

The wheel fate is turning
g. level 2, action!

大きな大きな桜の木。そこに向かって、多くの春度が集まっていく。

「……とりあえず、急がねえと。アレはやバイ……そんな気がする。」

スペルカードはそのままに、俺は更に奥へと飛び立つ。

だが。そう甘くはなかった。

「ま……て……それ以上は……それ以上進めば……貴方が……死んでしまうッ！」

「……? どういう事だ? ……でも。押し通らざるを得ない!」

再度追ってきた妖夢と交戦する。しかし、先ほどのような技のキレはなく、正直言って死に体の妖夢はいとも容易く吹き飛ばす。

「ぐっ!?!」

「寝てろ。起こさないから。【剣撃符 絶力破】。」

いつもより弱めに放った一閃でも、妖夢は防げず、その意識を刈り取る。

「……ふういー。さて、本番だな。」

そう言って、振り返る。するとそこには。

「ええ。従者たる妖夢を倒したのですもの。そうなれば主の私が出るのは道理。さあ、春度を渡してもらおうね。」

「渡すかよ。あの桜は何かがヤバイ。咲かせたらきつと、後悔する。俺も、貴方も。そんなことにはさせない。そんなの、ただのバッドエンドだ！たとえ、限りある命を燃やし尽くしたとしても、そんな結末は、焼き尽くす！行くぞ！」【霊符　　ゴースト】！

俺は新たなスペカを使う。下腹部に両手を翳す。するとそこにベルト、ゴーストドライバーが出現する。変身アイテム、オレゴーストアイコンを”創り”、ボタンを押す。するとアイコンの瞳の部分が変化し、Gの文字が見える。ドライバーのカバーを開き、アイコンをセット。カバーを閉じる。

(アーイー・バッチリミネナー！バッチリミネナー！)

ドライバーからパーカーゴーストが出現し、あたりを飛び回る。

「へえ、生きているのに死者の真似事？なかなか面白いわね。」

そう言いつつ、なかなかに厳しい弾幕を浴びせてくる。ゴーストがなんとか防いでいる。俺はレバーを引き、左手を開き、右手は忍者のように人差し指と中指だけを立て、残りは握る。それらを左右に広げ、徐々に自分の目の前に持つてくる。そして、右手を左手の後ろから前に回し、天高く掲げる。そして再び目の前に右手を下ろし、

「変身ッ！」

レバーを入れる。

(開眼！俺！レッツゴー！覚悟！ゴ・ゴ・ゴ・ゴースト！)

するとパーカーゴーストが俺の上から覆い被さり、体が光に包まれる。それが収まる
と、俺は仮面ライダーゴースト、オレ魂になっていた。

「姿が変わった…奇天烈な人もいたものね。そんなに自分が嫌いなのかしら。なら、死
んでみる？違う自分になれるわよ？」

「生憎だが、俺はまだ死ぬわけにはいかない。きちんと帰るって、いろんな人に約束した
からな。さーて、命、燃やすぜ！」

(ガンガンセイバー！)

俺はドライバーからガンガンセイバーを召喚し、宙へ跳び上がった。

最終戦、開始。

飄々として咲く死の花

「うおおおっ！」

ガンガンセイバーを手に、俺は女性に斬りかかる。しかし、ひらりとかわされ、弾幕を放つ。

「くっ！」

こちらもなんとかかわす。

「あら。なかなかやるわね。そういえば、名乗ってなかったわね。西行寺幽々子よ。貴方は？」

「夜月……白狼……。」

言いつつ、俺は茶色いアイコンを使う。

(開眼！ビリー・ザ・キッド！百発百中ズキューンバキューン！)

カウボーイのようなゴーストが覆い被さり、姿が変わる。ビリー・ザ・キッド魂。専用武器、バットクロックを呼び出し、ガンガンセイバーもガンモードに。二丁拳銃で幽々子に向かって撃つ。

「ーなんだ。ちゃんと弾幕も撃てるんじゃない。」

そう言いつつひよいひよいとかわすのだから訳がわからない。

「チツ！ちよこまか飄々としやがって！」

「あら。堅くなるより柔軟にできた方がいいと思うけど？出せる答えはいつだって一つじゃないんだし。」

「！」

その、言葉は。俺のトラウマの結末に対して言ってるのか？

「お前、俺の何を知ってる？」

「私は知らないわ。貴方が知ってるのよ。夜月白狼。」

「おい待てなんでそのネタ知ってるんだよお前。扇かよ。」

と、幽々子の突然のアニメネタに突っ込む。

「知り合いに情報通がいてね……」

「あつ（察し）。あんにやろうめ。勝手に知って勝手に広めんじゃねえよ。」

「でも、どうしてあんなことをしたの？今まで酷い目にあってきたのに、どうして復讐とか考えなかったの？」

一旦二人とも攻撃をやめ、向かい合う。俺はため息をついてから、

「だから、気が乗らなかつただけだったの。あいつらなんて殺す価値もない。そう思っただけさ。…それに。」

俺は空を見る。ここは冥界で、暗いけど。

「俺の知ってるヒーローなら、ここで復讐なんて無意味な真似、するはずねえよなって、思っただけだ。」

「…そう。やっぱりお人好しね。」

「いや。俺はただ、人間を信じられない自分信じられないだけさ。自信がないだけ。」

「それが異常だつて言われてるのよ。」

幽々子の言葉に、俺は目を見開く。

「そ、それは…」

わからない。わかりたくない。脳が理解することを拒否している。

「それは貴方が」

「……………めろ。」

「他人の感謝に飢えてるとかじゃなくて」

「やめろ。」

「他人に頼られることで自分が上だと思いたかったから。」

「……………。」

頭が真っ白になった。それが真実を言われたからか、言われて初めて気づいたからかは、わからなかった。でも、それでも、思考は止まった。

「運動で勝てない。勉強で勝てない。ゲームでも、じゃんけんも、なんでであろうと勝てない。だから、頼られようとした。そうすることで立場的に上に立ちたかったから。…違う？」

「……………あ。俺、は。」

「…壊れたかしら？随分と脆いわね。今代の創世者は。」

『白狼！しつかりせぬか！お主は、お主の根底にあるものはなんじゃ!?全てを救うことじゃろう!?今回立ち上がったのは、フランのためだけではなからう！誓いもあるのではないのか!?おのこなら約定の一つや二つ、守ってみせろ!』

「…あ……………そうだ。過去がどうか、どうでもいい。もう、あの世界の俺は死んだのだから。レティにアリス、フランにレミリアとも約束した!こんなところで、折れるわけはいかない!想いは、永遠に不滅だ!」

創世者の叱責に我に帰り、俺は意識を取り戻す。

俺は一度オレ魂に戻る。そしてレバーを引き、もう一度入れる。

「俺が、俺であるためにも。命、燃やすぜ!」

(大開眼!オレ!オメガドライブ!)

右足に光が集まり、俺は幽々子に向かって跳ぶ。

「でえやあああ!」

「…ふふ。そう。貴方はそっちを選ぶのね。頑張るといわ。壊れない程度に、ね。」

そう小さく言って、幽々子はそのまま蹴られ、桜の方へ飛んでいく。

「ふういー、これで、異変は解決…」

『いや、まだた！白狼！あの桜を見ろ！』

俺は言われた通り見ると、そこから多くの弾幕が飛んできた。

「なあ!?まだ何かあるってのか!?!」

反魂蝶、一分咲。

雪は溶けた。後は、白狼自身が、その答えを見るかどうかである。ただまあ、その前にあのさくらをとめなければならぬのだが。

不完全なる開花、完全なる救い。

どこを見ても弾、弾、弾。今まで溜めてきた春を解放するかのように、桜から弾幕が飛んでくる。

「ちよ…っ！シヤレになんねえぞ?!なんだってんだ!?!」

『…わからぬ。しかし、あの亡霊が桜に取り込まれてからああなったのは確かじゃない。』

俺がなんとか弾をかわしまくっているというのに、創世者は冷静に思考する。

『白狼。あの亡霊の名はなんと叫びたか?』

「っ！解除！ああ!?!西行寺幽々子だったろうが！っつか聞いてなかったのか!?!」

俺は一度ゴーストを解除して答える。

『そうか。西行寺…西行寺…！そうか。あの西行寺か。』

どうやら思い当たるものがあるらしい。

「【盾符 ドラゴンシールド】、【翼符 ドラゴンウィング】、【技槍符 テクニツクランス】！」

竜の盾に竜の翼、そして技巧を上げる槍を持って、弾を弾きまくる。そして、

「何か思い当たるのか!? だったら教えてくれ!」

『うむ。時間がないので手短かに伝えるぞ。幽々子は今、消滅寸前だ。』

「おう。…はあ!？」

突然の言葉に、俺は一瞬動きが止まる。が、すぐに我に帰り、また弾を弾く。

「幽々子が消えるって、どういうことだよ!？」

『幽々子はあの桜、西行妖に自分の肉体を封印して亡霊になったのじゃ。その封印は桜が咲くと解けるしかけになっておつての。』

「成る程。じゃあ、このままほつといたら、幽々子は消えるんだな?」

『うむ。桜が満開になれば、幽々子は消滅する。』

創世者の言葉に、槍を握る手が強く握られる。

「……ふっざけんな。させるかよ。そんなこと。俺の前で、誰一人死なせやしない!」

符 創世眼「っ!」

俺は大きく叫び、切り札を切る。

「絶対に、助ける!」

クリエイト・ゲート

「創・門」!

霊力を使い、西行妖内部の幽々子がいるところに繋げる。

「届け!」

クリエイト・チェイン

「創・鎖」!

幽々子の手から俺の元に鎖を”創る”。

「くっ……くおおおお！」

それを、俺は力の限り引つ張る。グググググッ！

しかし、鎖が手元に来る気配はない。

『白狼！ただ引つ張つても無駄だ！彼奴は西行妖にとらわれておる！睨いてしまいうまで離れんぞ！』

創世者のそんな気弱なセリフに俺は、

「知るか！どんなに難しかったってやってやる！方法がないなら」創つて、やる！それが、そうして救っていくのが希望だろうが！」

『！白狼、お主……』

創世者は、悲しそうに声を上げた。俺の言葉に反応して。

（思考が、希望に引つ張られて……、やはり、希望とは自分を犠牲にし続ける運命なのか？）

俺は、創世者のそんな懸念も知らずに、足掻き続ける。

「ち、あんまし気が乗らねえが、仕方ねえ！【創・限剣】！」
クリエイト・パビロン

ヒュヒュヒュヒュッ！ブチブチブチブチッ！創った、ゲートに向かって大量のパワーソードを射出する。それらは寸分たがわず幽々子を捉えていた木の根を切り裂く。

『まさか!』

「今だ！ツゼエエエアアアア！」

瞬間、鎖を引つ張り、幽々子を西行妖から引つ張り出した。

「止まりやがれ、化け桜！」

俺の言葉とともに、弾幕は消え去り、春度は現世へと戻っていく。

「はあ、はあ、はあーっ。なんとか、なった…！」

俺は息をつき、能力を解除する。

『まさか、本当に方法を』創つて、まだ幽々子を救うとは…』

創世者の言葉は。

「あ…」

ドサツ…と倒れてしまった俺には、聞こえなかった。

雪は溶けた。あとは、露わになった答えを見るかどうか。それで、結末はかわる。

氷解、夜桜の下。

「…あ。…知らない天井だ…」

目覚めて、いつものセリフを吐く。そして起きる。

「……は……？」

周りを見て一言。すると部屋の戸が開いた。

「失礼します。白狼さん、おはようございます。」

「あ、おはよう、妖夢。……え？……フアツ!？」

俺は、驚き、妖夢はそんな俺に驚く。

「え、と、どゆこと？」

「あー、説明してませんでしたね。…異変は終わりました。桜は散り、春は幻想郷中に戻りました。」

「そつか……待て、幽々子はどうなった?！」

「そちらもバッチリです。幽々子様は消えることなく、いつも通りたくさん食べていますよ。」

妖夢の言葉に安心する。

「つてか、腹ペコキヤラなのな、あの人…」

「あはは…ええ。まあ。」

俺は息を一つつき、部屋の外に出ようとする。が、突然視界が歪む。

「な…!?!」

俺は姿勢を崩し、すっ転ぶ。

「!無理はいけません!まだ全快してないどころか、ボロボロだったんですよ!」
と妖夢に諫められる。

「…なっさけねえな。折角異変解決したのに、結局みんなに迷惑かけてやがる。」

再び布団に潜りながら、自分を責める。しかし、

「どうして、貴方はそんなにも自分に厳しいのですか?」

「…は?」

俺は、妖夢の問いの意味がわからなかった。ラノベは読みたいときに読むし、お菓子とかだつて割と食るように食べる方だ。めんどいことはしない。それぐらいには自分には甘い。厳しいとは到底言えないのに。

「貴方は、自分のやったことに対して厳しすぎるのです。他人に認められてようやく自分でも認める。しかも、それはわかったからではなく、みんながそう言ったから。」

「ツ!!それ、は…」

その言葉を、俺は切れなかった。

「貴方の過去に何があったのか、紫から聞きました。」

「!!」

俺は眼を見開く。そして決める。よし、今度あいつシメよう。と。

「貴方の過去は、辛いものだと思います。どうしようもないものでもあるでしょう。しかし、それは貴方が自分を認めない理由にはならない、いや、してはいけない。」

「っ……お前に何が……」

「わかりません。私は貴方ではないし、”創る”、力も持っていないから。でも、忘れましたか？ 私は貴方に負けているんですよ？」

妖夢の、そんな簡単な指摘に、俺は。

「あ……」

そう、小さく呻くことしかできなかった。

「認めてあげてください。貴方は貴方のことを。信じてあげてください。貫いてください。貴方は貴方の思ったことを。」

「!!………そうか。そう、か……なんだ。本当に、簡単なこと。単純で、真つ直ぐで、尊い。でも、誰にでもできる、簡単なこと。」

俺はようやく、答えを見つけたようだ。

「どうやら、答えは見つかったようね。」

「幽々子様。」

「…幽々子…」

俺を見る幽々子は、出会った時と同じく、少し妖しげな、笑っていた。

で。

「悪い、世話になった。」

「もう帰るの？もう少しゆっくりしていけばいいのに。」

幽々子の言葉に俺は、

「ま、俺がいないと寂しがる奴が居るからな。」

少し顔を赤くして答える。

「ふうん。ま、頑張んなさい、希望さん。」

「あ？やめろよ。いつも通り、白狼って呼んでくれよ。」

少し、自分を誇示するような言い回し。いつもは、無理して、嫌いだけど、そう言う
しなくて。でも、これからは、

「なあ、皆。俺、少しだけ、自分のことを好きになれそうだな。」

現世へと戻り、そう一言、口にする。

（うむ。西行寺幽々子には少し感謝せねばなるまいて。呪いの突破口を、一条の光が差し込む程度じゃが、開いてくれた。白狼。お主はもう、我慢せずともよいのだぞ？）

創世者の思いを知らず、俺は紅魔館への家路につく。別れと出会いを告げる、桜の花びらと共に。

OVA的な感じの一休み。

ようこそ、靈力至上主義の樂園へ

「……で？」

「……はい。」

紅き館、紅魔館。その一室である俺の部屋にて、俺は。

「……………」(カチコチ)

正座していた。

「異変を終わらせたのはすごいよ？ 誇れることだよ？ でも。どうしてなんの連絡もなしに外泊したのかな？」

「いや、その…それは。俺もそんなつもりはなかったっていうか…」

「ええ？ (威圧)」

「いえなんでもありません。」

有無を言わせないような剣幕のフランに、俺は冷や汗をかくばかりであった。

「……はあ。まあ、無事に帰ってきたからいいけど。もうやめてね？」

「！ああ！もちろん。」

「ならよし。…白狼！」

「え？フラ…わぶっ!？」

お叱りが終わり、正座したままの俺に向かって、フランが飛びつく。支えられず、俺とフランはベッドに倒れこむ。

と、その時。ガチャリ。

「白狼様。妹様。昼食の…」

その時、俺とフランは一緒にベッドに倒れているように見えるわけで。そうなれば、どう誤解されようと仕方がないのだが。

「お楽しみ中でしたか。失礼しました。」

「!!待って待って待って!!」

最近、咲夜さんはタイミング計ってきてる気がする今日この頃。なにかと、タイミングが良すぎるのだ。

「ふ、フラン?と、とりあえず行こうか。」

「…うん。」

かき乱され、すっかり疲れた俺たちはすぐに着替え、食堂へ向かった。

…で。

「申し開きはあるか白狼?」

「えーと、一応言わせてもらおう。誤解だ。」

「そこでもやつぱり正座だった。レミリアのオーラが怖い。」

「…はあ。まあもうほぼ相思相愛のようだが…」

「あ?何か言ったか?」

「いや。なんでもない。」

レミリアのささやきは、俺には聞こえなかった。うん。

「なんにせよ、ほんと誤解だから。そういうことはしてないからね?」

「わかったわかった。まったく。」

と、いうわけで解放された。…のだが。

「はい、あーん!」

「おいこら…まったく。あーむ。むぐむぐ…うめえ。」

なんとというか、至れり尽くせりだった。レミリアは少し顔を赤くし、パチュリーは砂糖を出しかけた。こあは何かを熱心に書いているし、咲夜はパチュリーの世話をしつつティッシュで鼻を抑えている。唯一、美鈴は苦笑いで終わってた。

「……カオスだ。」

いやまあ、楽しいが。

その後、みんななんとか昼食を食べ終わり、部屋に戻る。

「さて、なーにすつかな。」

「お疲れ様。白狼」

”ニードルリボルバー、”。

開いたスキマに向かってスベカ無しで”創った、”ニードルリボルバーを向ける。

「…何のつもり？」

「てめえこそ。なんで俺の過去を知って、ペラペラと言いつらしてんだよ。」

俺は無意識的に創世眼を発動させ、言い放つ。

「……悪かったわよ。でも、知りたいと言ったのは彼女達なのよ。」

「ほう？俺が知りたいと言ったことは時々隠すくせに、人のプライバシーになったら喋るのか？」

「だから悪かったっていつてるでしょう？でも、そのおかげで”答え、”を見つけられたでしょう？」

紫は妖しく笑う。

「まあな。そこは感謝してやる。だが。あいつらに背負わせなくていいもん背負させた

のは許さねえ。」

「なら、どうするの?」

紫の問いに、俺は一度リボルバーを消し、今度は、

「銃符 ニードルリボルバー」。表でろ。少し、ドタマぶち抜かせろ。」
それは、新たな宣戦布告だった。

自由と平和を守る戦士達

「本当にやるの？」

「たりめーだ。お前はやり過ぎた。だからお灸をすえるんだよ。」

紅き館、紅魔館。その上空で、俺と紫は対立していた。

「白狼……」

「白狼様……」

「白狼さん……」

「白狼君……」

下では、フランに咲夜さん、アリスにこあ、レテイ、妖夢と、今回の関係者勢揃いしていた。

「なんであの子達を呼んだのかしら？」

紫が心底不思議そうに問う。俺は答えない。

「さてな。どうでもいいよ。そんなこと。今、俺の中にあるのは、てめえをぶつ倒すことだけだ！行くぞ！」【翼符 ドラゴンウイング】、【盾符 ドラゴンシールド】、【技槍符 テクニックランス】！」

俺はいつもの二つに、弾を弾くために槍を装備する。

「はあ。仕方ないわね。少し戯れると致しましょう。」

そう言つて、紫は。

「【結界 夢と現の呪】。」

スペカを使つた。

「なっ!？」

俺を覆つたのは、幽々子の弾幕とは比べものにもならないレベルの物量の弾幕。

「チィ!はっ!」

やはり予想していた通りになつたと、槍で迫り来る弾幕を片つ端から弾いて行く。

「貴方は何が気に入らなかつたのかしら?」

「ああ!?!んなもん、皆に背負わせなくて良いもん背負わせたことだよ!」

現に、幽々子や妖夢はそれで俺に突つかかつてきている。アリスだつて、創世者が教えたから、あんな誓いをする事になつた。俺の過去は、今も未来も足枷にしかならぬ。

「俺の過去は俺だけが背負えば良いんだよ!俺のものだ!誰にどう伝えるのかは、俺が決める!勝手にやんな、クソ野郎!」【槍撃符 絶技槍】!」

俺は叫び、槍を紫に向かってぶん投げる。

「!甘いわよ?」

「わーってるよ!」【笑顔　クウガ!】

俺はライダーのスペカを使い、仮面ライダークウガに変身する。

【銃符　ニードルリボルバー】

さらにニードルリボルバーを使い、緑のクウガ、ペガサスフォームへと超変身する。

「狙い撃つぜ!」

クウガの力で専用武器、ペガサスボウガンへと変化したニードルリボルバーを紫にむけ、ボウガンのボウの部分を引っ張り、

「フオイア!」

引き金を引いた。ドギユンツ!

「きやつ!?!……な!」

「ふう。なんとか1枚目は割ったな。」

超遠距離からの狙撃! (カズマ感) これぞペガサスフォームの真髄! (レイ感)

「やってくれたわね…」【結界　動と静の均衡】!

またもや囲まれる俺。だったら!

「解除!」【魂符　アギト】!」

俺は一度クウガを解除し、新たなスペカを使う。両手を左の腰の方に構える。右手を

一度前に出し、今度は右胸の方に持つて来る。すると腰にアギトのベルト、オルタリングが出現する。俺はそのまま右手を前に出し、

「変身！」

の声と共にベルトの両側にあるボタンを押す。すると俺は光に包まれ、俺は仮面ライダーアギト、グランドフォームへと変身していた。

「次から次に…よく飽きないわね。」

「飽きるわけねえよ。こんな俺にいつも希望を見せてくれた戦士達だぜ？」

そう。あんなに色々されてた俺に。世界の素晴らしさを教えてくれた。クウガから今のやつまで。いいや。1号から。彼らがいなければ、とつくに折れて、死んでいただろう。ここに來ることなく。

「貴方は厳しすぎる。」

「！」

その言葉は、つい最近妖夢達に言われた言葉。

「なんだよ。もう答えは見つけたんだよ。今更掘り返すなつての！」

「そう。じゃあ話してもいいわよね？」

「それとこれとは話が別だ。知らなくてもいいことつてのはあるんだよ！」

アギトのツノの部分が開く。

俺は両腕を左右に広げ、左手をベルトの左側に。右手は自分の手前に。左足を後ろに。右足を前に出し、力をためる。足元にはアギトの紋章が浮かび、両足へと吸い込まれていく。

「はっ！」

そして、そのまま飛び上がり、

「はああああっ！」

飛び蹴りを決めた。

「っ！」

と思ったのだが、紫は咄嗟にスキマを開き、そこへ逃げ込み、遠くから出現した。

「厄介だな。そのスキマ。だったら、開く隙なんて与えない。解除。〔光速 カブト〕変身。キャストオフ。」

すぐに俺はスペカを切り替え、仮面ライダーカブト、ライダーフォームに変身し、

「クロックアップ。」

（クロック、アップ）

超高速移動を以って、距離を詰める。しかし、弾幕は展開されたまま。そこに高速で飛び込むわけだから、密度がやばい。

「ちい！仕方ねえ！」

俺はベルトのボタンを順に押していく。

(1. 2. 3.)

「ライダー、キック！」

(ライダー、キック！)

俺は飛び上がり、弾を消しつつライダーキックを敢行した。

そして、爆発があった。

「[[白狼(くん)(様)(さん)！]]」

爆発の中から出てきたのは。

「く…」

「あーきつ。でもま、俺の勝ちだろ。」

ボロボロの紫を担ぐ俺の姿だった。

で。

まあ、皆気になったらしく、事実を脚色とか無しにありのままを伝える。まあ、気が変わった。いや。あの爆発の中で、俺は紫に言われたのだ。

「貴方は他人を頼らなさすぎるのよ。少しは頼りなさい。別にそれで貴方を傷付けるよ
うなモノはいないわ。」

信用した訳じゃない。でも、やろうと思った。彼らならきつと、そうするだろうから。
胸にあるのは、いつだってあの戦士達への憧れ。弱きを助け、強きを挫く。そんな正義
のヒーローに、俺はなりたかったのだ。

「白狼？」

「ん？」

「どうしたの？ 難しい顔をしてるけど？」

でも。今。今の俺は。

「なんでもねえよ。ただ、昔の俺とは別れようって、思っただけさ。」

「ふうん。でも、いいの？ 白狼って、頼られるの好きじゃなかったっけ？」

フランは緩そうに見えて、実際はそうでもない。本質を簡単について来る。

「まあな。でも、あいつらのは。あいつらに俺がやったのは、”助け、”じゃなくて、墮
落だよ。”創る、”という甘い蜜を知ってしまった。だから、ああなつたんだ。」

「…そうね。でもさ。誇つていいと思うよ？ 白狼は、結局皆、一人残らず希望を叶えたん
だから。それって、キリがなかったでしょ？ どうやったのかは聞かないけど、誰にだつ
てできることじゃないよ。」

「フラン…」

「もし、まだ自分を信じられなくて、嫌いで、認められないなら。」

フランはおもむろに、俺の前に立ち。

ぎゅつ、と。

「え…」

抱きしめた。とくん、とくん、と聞こえるフランの心音。そして、生きていることを示す暖かい体温。

「私が認めてあげる。私が白狼を信じる。私が白狼を好きでいるから。だから。」

そういうえば、俺はなんで、フランを見るとどきりとするのだろうか。あーんをしてもらったとき、顔が赤くなるのだろうか。夜、悶々として眠れなかったのだろうか。ふと、フランの顔を見る。その時、俺は答えを得た。かんたんなことだった。

「白狼を信じる私を信じて。」

フランの言葉に、俺は。

「…ああ。俺を信じてくれるフランを俺は信じる。俺を認めてくれるフランを俺は守る。俺を好きでいてくれるフランを、俺はフランが俺を好きでいる以上に好きでいる。」

俺は、いつの間にか、フランに“壊されて、”いたらしい。ならば、多少の責任は取ってもらわねば。俺はフランの背中に手を回し、抱きしめ返す。顔は見えなくなっただけ

ど、心音と、体温で大体わかる。お互い、おんなじ顔をしているであろうことが、
月は高く、静かに輝きを放っていた。

思わぬ成就

紅き館、紅魔館。いつもなら、大して来客もないここに、今日は珍しく来客が来た。「俺のターン！ドロー！うーん、舞踏で消すか？イスラで殴るか？……よし！俺は！竜爪の首飾りを配置！そして、死の舞踏を発動！俺が破壊するのは、オズ！」

「白狼様、失礼しま……」

俺がデュエル（影）をしていると、咲夜が入って来た。そう、俺がポーズを決めてやっている時に、咲夜は開けたのだ。

「……」

「……失礼しました。」

「待ってええええ！咲夜さああん！」

ほんとに、なんでこうもある意味タイミングがいいのかと、小一時間ほど問い詰めたかった。

「お客様です。」

「へ？俺に？」

「はい。ちよつとした依頼だそうで。」

「はあ。」

というわけで、応接室へ案内され、ドアを開ける。するとそこには、少女がいた。シャツに赤いズボン。サスペンダーでそれを留め、白く長い髪を白と赤のリボンで結んでいた。

「お前が夜月白狼か？」

思ったよりも低めな声。

「ええ、まあ。貴女は？」

俺が問うと、少女は頭を下げ、

「私は藤原妹紅。人里に知り合いがいてな。そいつが風邪をひいて、仕事が出来ない。

その代わりに頼みたい。」

そう言つて来た。

「え？えーと、失礼ですが、その仕事って、俺でもできるモンなんすか？」

「ああ。もちろん。それと、敬語は無しでいい。」

そう言われたら、そうせざるを得ない。

「わかった。引き受けよう。うちの人たちには言つとく。」

「助かる。」

と、聞くのを忘れるところだったと、俺は問う。

「ちなみに、その仕事ってのは？」

すると妹紅は、知らないとはいえ、デカイ爆弾を落としていったのだった。

「ああ、いつてなかったな。寺子屋の教師だよ。」

「え……………」

それだけ告げて、妹紅は咲夜に連れられ、館の外に出る。

俺はまだに、思考がフリーズしていた。頭の中で、緑のあいつがボタンを押した。

(Restart…)

「ハッ!?はああああ!?!」

…で。

「どうしよう…」

「どうするもなにも、引き受けるって言ったんなら、やればいいだろうに…」

俺は食堂で昼食を食べ終え、うなだれていた。そして、レミアに呆れられていた。

「そもそも、なんで渋っているのだ？お前は頼られるのが好きなのだろう？よかつたじゃないか。」

「るっせーな。そんなにホイホイできるものじゃねえんだよ。教師つてのは。」

そう。そもそもそんなに簡単に教師ができるのなら、向こうの人たちも困ったりしていい。

「まあ、人にものを教えるのだから、難しいのはわかるがな。そんなに難しく考える必要があるのか？」

「あるんだよ。教師は俺の唯一の夢だから。中途半端は許せねえんだよ。」

俺の言葉に、レミリアは不思議そうに言う。

「？夢ならばなおのこと悩む必要なんか無いだろう。これはチャンスだぞ？」

そう。降って湧いたような大チャンス。でも。

「そう。チャンスだ。でも、だからこそ、こんなに簡単に叶っていいものじゃ無いって思う俺がいる。」

俺の言葉に、またレミリアはため息をついて。

「…はあ…お前のその自分に対する厳しきは相変わらずだな。…いや。逃げ、か。」

「つ…!?!逃げ、だど？」

「そうだろう？」

レミリアの言葉に反応する俺をレミリアは皮肉げに笑って言う。

「お前は外の世界のこととはもう考えたくも無いのだろう。だから繋がっているものはな

んであろうとスルーして来た。…違うか？」

「……………」

違わない。外の世界を思い出したくなかったから、俺は人里には近寄らなかつた。結局、俺が極度なまでのビビリだった、と言うだけだが。

「お前がやりたいことならば、ものにしろ。お前が中途半端を嫌うように、私もそれは許さん。やるならやりきれ。いいな。」

「……ああ。」

こうして、決意は固まった。

その夜、俺は創世眼を使い、外の世界の教科書を創った。寺子屋の子達がどこまで解けるかわからない。だからこそ、複数創る、ことになったがもともと霊力は有り余っている。

「これで良し、と。」

翌日。

「ここが寺子屋だ。んじや、あとは任せたまよ？」

「ああ。なんとかする。任せてくれ。」

ここに、俺の夢は叶う。

「すううううーはああああ……よし！」

俺は、意を決して、寺子屋の戸を開け……

ガララ……ヒュッ！

「っ!?!【盾符 ドラゴンシールド】!?!」

バチイ！盾に当たったのは、一冊の教科書らしきものだった。

……どうやら、わりと今回の俺に起きた出来事は、一筋縄ではいかないらしい。

作ろう、実力主義の教室を!

教室に入って早々、俺は困惑していた。

「えーと、何かあったのかな?」

と、俺が聞くと、気の強そうな男の子が一人、

「あんた誰だ! けーねせんせーを出せ!」

ええ… (困惑) いきなりの不満だった。

「えーと、おれ… 僕は、そのけーねせんせーが風邪をひいちゃったからって、知り合いに頼まれて来たんだけど… その、聞いてなかったかな?」

と俺が問うと、

「え……」

その男の子は、見るからに青ざめた。そして。

「お、おい! けーねせんせーが風邪って、どういうことだよ!? なんで!」

「そんなの僕に聞かれても困るよ… 君だって風邪はひくでしょ? けーねせんせーだって、ひくよ。」

「でも… でも!」

やはり、子供なんだな、と思った。自分で納得いかないことはたとえ聞いていることが正しくても、認められない。自分に都合のいい結果しか受け入れられない。自我が芽生えたばかりの子供であればあるほど、それは強い。

でも。とりあえず、私情は置いてもらわねばならない。

「とりあえず、授業はやるよ。大丈夫。すぐにけーねせんせーも治るさ。」

「本当か？」

「うん。もし長くなりそうなら、僕がなんとかするよ。」

「……勘違いすんなよ！俺はあんたを認めたわけじゃないからな！」

そう言つて少年は席に戻つた。

よし。じゃあ、始めよう。

「さて、みんなはどこまで解けるかな？というわけで、ちよつとした問題を配るよ。結構広く、浅くで作つてるから、解き方を知らないってのもあると思う。そういう時は開けて置いていいよ。それじゃあ、始め。」

みんな、一気に解き始めた。

取り扱つたのは、俺の世界での小学校の計算系。四則計算に、割合、確率、面積、体積、頭の体操でよく使う魔法陣などだ。

何人かはすらすらと解き、多くは少し止まりながらも着実に解いていく。で、残りは

動かない。

頃合いを見て、止める。

「そこまで。回収するよー。採点してる間、わからなかったところ復習しといてね。」

そう言つて、”創つて、”おいた答えでみんなの回答を採点する。…で。

「んじゃあ、返すよー。」

一人一人、名前を言つて返す。その際、名前と顔を一致させていく。

「……はい。講評ね。全体的には、まあ普通だね。かもなく不可もなく。何人か、筆が止まったまんまだつたみたいだけど、しっかりと復習していけば、きつと解ける。間違えたところがある人も、復習しよう。そうすれば全部解けるはずだよ。」

「しろーせんせい、ほんとにできるようになるのー?」

「うん。でも自信がないなら、ルールを作ろう。わからない問題が解けたら、ご褒美をあげよう。お菓子を一個。」

そのとき、みんなの目が光った。

「ただし。みんな歯ブラシを持つてくること。ここで食べて、ここで歯磨きして帰ること。いいね?」

「はーい!」

みんな、いい返事だ!」

こうして、とりあえず一日目はのりきったのだった。

Cryする夜

さて、今日も今日とて授業なのだが。

「しろーせんせー！できたー！」

「ほう？では、採点だな。」

生徒の一人が問題を解き終わったため、採点する。

「お、ここできてるな。…惜しい。で、正解。5問中3問。ご褒美三つだね。」

と、俺がその子の頭を撫で、お菓子をとり出そうとする。と、その時。

ヒュッ！と小石が外から投げられた。狙いは…子供。

「っ！【向符 一方通行】！」

俺は石に触れ、来た道をそのまま逆走させる。ただし、来た時よりも速度をあげて。つまり、投げたから、と踏ん返り返っている奴にクリーンヒットさせる。

ヒュガッ！

「いっふっ！？」

「………やれやれ。みんな、ちゃんと解いておくこと。」

俺の指示を素直に守ってくれる子供達。ああ。尊い。

俺は外に出て、投げたやつを確認する。いつかの氷精だった。

「お、お前は……!!」

「よう。何してんだ？」

中にいる子供達とそう変わらない背の高さの少女。違うのは種族と、能力があること。まあそれぐらいだ。

「ふっふっふっ。ここであつたがえーと、一年目！覚悟！」

「まあ、会つてから一年経つてねえから、間違っちゃいなんだけどさ。」

正しくはここで会つたが百年目、だ。それに、俺とこいつには、そこまで言えるような因縁はない。

「【氷符 アイシクルフォール】！」

奴、チルノはおもむろに弾幕を放つて来た。

そもそもこのいたずら、一度や二度ではないのだ。最近、というか、俺がここを一時的に任された翌日から毎日だ。うんざりもする。

「はあ。【力炎剣 パワーフレイムソード】。【剣撃符 絶力炎破】。」

今日も今日とて、チルノの弾幕を燃やし、そのままチルノに剣撃がヒットする。

「みぎやあ!?…きよ、今日はこのくらいにしといてやるー!お、覚えてろー!」

と、おきまりのセリフを吐いていく。よく飽きないものだ。逆に感心するレベルだ。で、授業に戻って数分後、大妖精の大ちゃんと一緒に謝りに来るところまでがテンプレだ。しかも、チルノは大妖精に強く出られないらしく、その子の前では決して手を出さない。現金な奴である。

…で、そんな日々が一ヶ月続き、もうみんな、俺に慣れてきたころ。夜、寺子屋の鍵を閉め、人里から離れようとした、その時。パシインツ！と、何かが、叩かれるような音がした。

「……行くか。」

厄介ごとだろうと思いつつも、音の元へ向かう。するとそこには、
「この野郎！また柿の木を凍らせおつて！」

「や、やめ、きやつ！」

チルノが叩かれていた。里の人間に。

しかも、チルノの頭からは血が出ている。もう何度も叩かれた証拠だ。

「……はあ。」

俺はこの時、何故かため息をついた。それは、チルノが性懲りも無くいたずらをした

から？否。厄介ごとに入り込んだことを後悔したから？否。その理由とは。

（やっぱ、人間にも悪はいるもんだな。ど畜生。〔審判 クロノス〕。）

俺は今初めて”創った”，スペカを使う。エグゼイドの時と同じく、ガシヤットのボタンを押す。

（仮面ライダー、クロニクル。）

手に持ったバグルドライバーツヴァイを腰に装着。ガシヤットを挿し、

「変身。」

ボタンを押す。

（ガシヤット！バグル、アップ！天を掴めライダー！刻めクロニクル！今こそ時は！極まれり！）

緑の光が体を覆い、次の瞬間には、俺は仮面ライダークロノス、クロニクルゲーマーへと変身していた。

「さあ、審判の時だ。罪深き人間よ。」

「な、なんだお前!?!」

「私のことなどどうでもいい。ただ私は。貴様を絶版にするためだけにきたのだ。」

そう言つて、俺はドライバーのBボタンを二度押す。

（キメワザ…クリティカル、クルセイド！）

その夜、人里に、二人の悲鳴が上がった。

始まりはいつも突然、終わりも突然。当然だな。

『白狼…お主…』

「ああ。わかっているよ。殺しちゃいねえ。スペカを使つたし。」

紅き館、紅魔館。そこにある自室で、俺は寝ていた。

『いや。お主は間違つたことはしておらん。いたずらをしたあのチルノとやらも悪いが、だからと言って暴力を働いたあやつにも、非はある。』

「でも、俺がやりすぎたのは事実だ。」

時間が近いため、俺は学生服に着替える。そして、翼を創り、人里へと飛んだ。

人里。

「君が、夜月白狼君だね。」

青い服を着た女性が俺を見つけてそう言った。俺は里の人達に囲まれていた。

その目は、憎悪の目。まあ、里の人間を襲つたのだ。当然だろう。…で、この人が…
「上白沢慧音、寺子屋の先生をやっている。」

この前まで風邪をひいていた人。

「君には悪いが、尋問をさせてもらう。」

そう言う慧音の目にも、少しながら憎悪が混じっていた。そんな視線の檻の中にいる俺は、

（ああ。やっぱ人間はこうなるのか。まあ、そうだよな。俺は能力者^{ヒトデナシ}だから。普通の人からしたら、怖くて、触りたくなくて、居て欲しくなんてない。そんな存在。）

と、今の状況を見て思っていた。

「ああ。わかった。」

俺はあつさり尋問を受ける。その様子に、慧音は小さく驚く。

（……いつはなんでこうも素直なんだ……）

しかし、それは顔には出さず、俺への質問を繰り返す。

それに俺は正直に、速やかに答えていく。で、最後に。

「君は、あの寺子屋に戻りたいかい？」

と、慧音は問うた。だが、再び俺は速やかに答えた。

「いえ？そんなことはありませんけど？そもそも依頼は貴女が治るまででしたし、問題を起こした俺は、この里にすら入ってはいけないうぐらいの危険人物になったはずですからね。」

と、ケロリと答える。その様子に、慧音は。

「なっ…!? 君は教師が望みではなかったのか!？」

「ええ。まあ、夢ですけど、問題を起こしておいてなんの罰も無しにのうのうと夢を叶えるような凶々しすぎる心は持ってませんよ。」

そんな言葉に慧音は、

「君の年齢でそれは…辛すぎる…一体、何があつたらそんな性格に…」

「それは、紫に聞いてください。あいつなら、なんでも答えてくれるはずですから。」

と、それだけいってここを出る。そして向かうは寺子屋。

人間たちが俺の前に並び、竹槍を向けてくる。

〔音符 ビートストライク〕

自分の声に重みを”創り”、

「退け。」

この一言で、人たちはザツ!!と道を開ける。さながらモーセだ。

そして俺は、寺子屋に向かう。最後の、授業をするために。でもま、その前に。

「みんな、すまない。」

子供達に事情を説明し、俺は寺子屋を去った。俺は晴れて、依頼を解決したわけだ。

これで、めでたくハッピーエンド…で、終わるわけがなかった。

永夜異変の章 始まりの夜に

紅き館、紅魔館。教師の依頼をある意味強引に終わらせた俺は、

「オラア！イストラ進化殴り！効果で全体2ダメ！ウロボロスで顔殴って10点ンギモヂ
イイイイ！」

「またもや決闘（影）をしていた、しかし、今日はなぜか、違和感があった。

「んー、なんだろう。この違和感。なんか、ほんの少しずれてるような…」

『よく気づいたな、白狼。異変だ。月がほんの少しだけ欠けているのだ。普通の人には満月にしか見えんがな。しかし、妖怪たちにとって、それは許せることではない。それは神でも同じこと。』

俺の独り言に、創世者が返してくれる。

「はあー。妖怪にとつてダメってことは、フランにとつてもダメってことなんだよなあ。しやーない。行きますか。」

『白狼…今回ばかりは、無理をするなよ？お主はいつも無理無茶ばかりするからの。』

俺の台詞に、創世者も言う。

「わかってる。無理なことはしないさ。俺には元々、そんな度胸も、できる実力もないし。」

『お主…本気で言つとるのでは無かろうな?』

創世者は呆れる。

「…わかったよ。いい加減にしとく。うん。認めるよ。なんでも創れる、なんて、そんなチートな力持つてるのに弱いんだ、なんて言つても嫌味でしかないって。でもさ、違うんだよ。強さつてのはさ、単なる力じゃない。そういうものに吞まれずに使いこなす心。それこそが強さだから。そういう意味じゃ、俺は最近やっちゃったから。」

と、俺は苦笑しつつ言う。創世者は口にこそ出さないが、心配している通りになってきている、と思った。

(のう、白狼。気付いておるか?最近のお主は、義憤に駆られることが多くなっておる。自分のことを打ち捨てて。それは、我が無くしたかったもの…利他主義になってきているのじゃぞ?)

…で。俺は、相も変わらず、夜空へとこの狂乱を終わらせる為に飛び立った。

「白狼……」

フランは、いつも通り異変の解決に向かった白狼を心配して、少ない窓の一つから外を見ていた。

「【銃符 ニードルリボルバー】！」

わらわらと湧いてくる妖精たちを、創った、銃で撃ち抜いていく。タタンツ！ダスッ！

「それにしても、いい夜だ。」

月は高く、綺麗に輝いている。星は燦然と、自分の存在を誇示していた。

「ま、俺には眩しすぎる気もするが。堂々と自分を表現するようなものとは合わないんだよな。」

と、もはや持ちネタになりつつある自虐を披露しつつ、引き続き、俺は夜空を飛んで行った。

時、同じくして、

「いくわよ霊夢。」

「わかつてるわ。」

紅白の巫女と、妖怪の賢者。

「行けるわね？ 魔理沙。」

「勿論だぜ！ アリス！」

魔法使いコンビ。

「いくわよ妖夢。着いてらっしゃい。」

「はい。幽々子様。」

白玉の主従。

この4チームが、今回の異変、のちに永夜異変と呼ばれるこの異変を終わらせる為、動き出した。

蛍、命の輝き。

夜空を飛び続けて20分ほど。あたりは黄緑色で溢れていた。

「蛍か。綺麗だな。」

『うむ。なかなか華やかだな。こんな夜でなければ、ゆっくり見たかったのだが。』

俺は少しだけ見ながら突き進む。と、そこに。

「蟲たちの為に！リグルー…キイイイックッ！」

一人の少女がライダーキックをかまそうと襲ってきた。

「【盾符 ドラゴンシールド】！」

俺は慌てることなく盾を創り、少女の蹴りを防ぐ。

しかし、威力は殺せても、その勢いまでは殺せない。俺は蹴りを受け止めつつ押される。

「く…うっ…」

俺はなんとか盾の角度をずらし、少女の蹴りをしのぐ。

「つとと。やるね。私はリグルー！リグルー！ナイトバグ。蛍の妖怪さー！」

「いきなりなんだってんだ？俺はこの夜を、そしてあの月を終わらせなければならぬ」

んだが?」

と、すこし睨みつつ問う。

「私は、ただ君を倒したいだけさ。希望。君を倒せば、蟲達の地位は格段に上がる。」

「…悪いが、それをやらせるわけにはいかん。」

「どうして? やつぱり、蟲は弱いから?」

すこし、悲しげな表情を浮かべるリグル。俺は。

「誰もそんなこと言ってるねえだろ。へ一寸の虫にも五分の魂^{こゝろ}ってな。俺はどんなに小さな命であろうと、甘く見たりしない。」

「ほんと…?」

「ここで嘘をつく理由がねえだろうが。俺と君は初対面。君の事を何も知らないのに、君を陥れて、俺になんの得がある?」

俺が思っている事を言うと、リグルは笑って、

「そう…だね。うん。君を信じる。えっと…」

そういえば、名前を覚えてなかったな、と、俺は。

「白狼。夜月白狼だ。」

「うん。ありがと白狼!」

どうやら、リグルの不安は払拭されたようだ。

「…で、だ。この異変について、何か知ってる事はないか？」

「うーん、ごめん。あんまり知らないや。月がおかしいってのはわかるんだけど…」

「どうやらリグルは知らないらしい。ま、あわよくばってかんじだし、別にいいけど。」

「そっか。わかった。ありがとな。」

「うん。頑張つてね！白狼！」

リグルからエールをもらい、俺は再び探索を始める。ふと、人里のことを思い出す。

「……まあ、みんな外に出てる、と言う事は無いだろうし…」

と、独り言を言っている、体は正直で、人里へ向かっていた。

俺の目は、あまり周りが見えなくなっていた。心理的にも、物理的にも。

「この歌は…一体…？」

聞こえてくる、なかなか綺麗な歌声。しかし、今聞こえてくるのはどこかおかしい。

つまり。

「あー…また能力者か…」

つまりは、そういうことだった。

光は音よりも早い。常識だな。

気づいた時には、手遅れだった。視界が狭い。かろうじて数メートル先の弾幕が見えるか見えないか、というほどに、視界が狭くなっていた。

「ふふ…私の歌を聞いたら、鳥目になるのよ。もうあなたは鳥籠の中。」
「お前がこの鳥目の原因か！ちっ…厄介な！」

苦しい声を上げる。こうしていても、弾幕の手が緩む事は無い。

「あはははっ！」

「くっそ！だったら、これだ！【力炎剣 パワーフレイムソード】！」

パワーソードを、創り、、それに炎を灯す。

「続けていくぜ！【剣撃符 絶力炎破】！」

剣を逆手に持ち、あの闇を操る少女の時と同じように、剣を乱暴に振るう。ゴオオオッ！

「なっ!?きや!?!な、なんて滅茶苦茶な…」

「はっはあ！鳥目つてのは暗いから見えねえんだろ？だったら物を燃やしやいいんだよ。その明かりで、テメエの位置はわかる！」

そう。音はもちろん速い。秒速300メートル程だったか。だが、光の速さは桁が違う。1秒で地球を7周半するのだ。その速さをもってすれば、今の敵の位置を知ることなど造作もない。

「捉えた。もう逃さない。【剣撃符 絶力炎斬】！」

「う、嘘…私が、こんな…」

俺が再び剣を振りかぶり、少女へ切りかかった。

「うあああああつー！」

「きゃあああつー！」

俺の剣は、間違うことなく少女の小柄な体躯を捉え、少女の体は燃えていない木に当たり、気を失った。

それと同時に、俺の視界も戻った。

「……ふういー。…また今度、遊んでやるよ。だから、とりあえず今回は、俺の勝ちだ。」
俺はそう少女に言い残し、また、止まったままの夜空へ飛び立った。

俺は、希望。

フランの為だけの、希望。それ以外の奴らの希望にはなり得ない。今まで、俺は誰も

彼もを救おうとした。助けようとした。それが、俺の唯一出来ることだと思つて。でも。そんなのは、思い上がりも甚だしかったのだ。本当の意味で救えたのはほぼほぼなく。只々。俺は俺に依存する人間を増やしただけ。そのことに気づいたのは、もうとつくに何もかも終わつてしまつた後だった。だから。今度は、失敗しないように。

「そうだ。俺は、俺には全ては救えない。だからこそ、救えるものを100パー救うんだ！」

差し当たつては、この異変だが、少し、気になることがあつた……らしい。らしい、というの、俺は別に見る気は無かつたのだが、体はそつちに行つていた。そう、人里に。

だが。

「……は？」

その、そこにあるはずの人里は、影も形も無くなつていた。そう、消えた。

歴史つて、勝者の記録だろ？

「…は？」

俺は、呆気にとられていた。そこにあるはずの、人里が、跡形もなく消えていた。脳がフリーズする。しかし、状況は待つてはくれない。

妖精の一人が俺に向かって弾を放つ。

『!!白狼!』

「!?っ」

創世者の声で思考の海から引きずり出され、咄嗟に出していたドラゴンシールドで防ぐ。

『油断大敵じゃぞ?!何を呆けていた?!』

「悪い…もう、大丈夫だ。」

落ち着いて考えると、すぐにわかる。なんてことはない。

「また能力者か。全く。紫の言った通り、人外魔境だな。幻想郷は。」

霊夢がいたら、お前が言うな、と言っていただろうな、とここまで考えて、背後に気配を感じる。

「……夜月、白狼か……」

「……上白沢、慧音さん……」

お互いに、気まずい、といった顔をする。

俺は、認めたくない事実には、たどり着いてしまう。

「貴方が、人里を……？」

「……ああ。私の能力。”歴史を食べる程度の能力”で。」

「人里の歴史つてやつを食べたつてことか。」

「ああ。しかし安心してくれ。人里に住む人たちに害は無い。」

「ああ。……え？」

突然の無事発言に、俺は固まる。

「え？大丈夫、なの？だつて、消えてるよ？跡形もなく。」

「あ、ああ。大丈夫だ、問題ない。」

そのセリフはちよつと怖い。が、慧音はこのネタは知らないはずだったな、と思い、聞き流す。

「満月の夜までは、ただ消えているだけで、存在はしている。満月になったら、もう一つの能力で元に戻す。これを異変のたびに繰り返していたんだ。」

「異変のたびに……あ！じゃあ、紅霧異変の時も、春雪異変の時も!？」

「ああ。両方とも、やってる。」

「…道理で。」

と、ここで慧音は話題を切り出す。

「なあ、白狼。君は、あの時里の人間を攻撃した。その理由は、あの氷精がいじめられていたから、助けた。そうだな？」

「…ああ。そんなこともあつたな。もう忘れてたよ。あまりにここのとこ、刺激的だったから。」

嘘だ。しっかりと脳裏に焼き付いている。いかに助けるためとはいえ、人里で人間に手を出したのだ。どうなつてもおかしくなかつた。

「白狼。君は正しかった。」

「!?何を…あの時の氷精は自業自得だつた!それが気に入らなかつたから俺は手を出したのに!」

「いいや。確かに、あの氷精も悪かつた。だが、あの者も里では少し評判が悪い者だつた。あの時は人かどうかわからないという噂の立っていた君が騒ぎを起こしたから、あんなことになつたが、違つたんだ。君が正しかったんだ。」

慧音のその言葉に、俺は、

「ちよ、やめろよ。あの時の、俺は…」

震える声は、止まらなかった。

「もともと君は、私の代わりであの場にいた。本当なら君が背負うことのなかったものだ。それを背負わせたのは私だ。どうか、許してほしい。」

「そういつて慧音は頭を下げる。」

「!?やめろ！だから、関係ねーだろ!?アレは俺がカツとなってやったことだ！それに、教師だつて向いてなかったんだ！俺には、そんなもの…」

「そう言う俺に、慧音は頭を上げ、

「あの後、紫がきてな、私に教えたんだ。君は、君の夢は、教師らしいね。」

「つ!!（あの野郎…）」

「内心で抱いているものを明かされ、外面は驚き、内心でキレル。なんともまあ器用なことだ。」

「…向いてないことなんてないよ。少なくとも、私と、あの子達はそう思っている。」

「つ!!!」

慧音の言葉に、俺は唇を噛む。

「この異変を君が終わらせてからで構わない。あの子たちの前で、もう一度だけでもいい。教鞭をとってはくれないか。私も、君の授業を見たい。」

その、提案に。俺は笑って返した。

「……おう。こんな俺でいいのなら。」

そう言って、俺は次に気になる場所、迷いの竹林へと向かったのだった。

バトルロイヤル、デュエツ！

竹林の中は、カオスだった。いや、マジで。

「〔夢符 封魔陣〕っ！」

「〔魔符 スターダストレヴアリエ〕！」

「〔人符 現世斬〕！」

とりあえず、言おう。

「『どうしてこうなった？』」

そう言った俺の隣の木が、弾に当たって崩れた。

まあ、事の始まりは単純。

霊夢、魔理沙、妖夢はパートナーの妖怪のことは疑わず、それぞれ別の妖怪、つまり紫、アリス、幽々子を犯人と疑い、バトルロイヤルに発展した、というわけだ。まあ、結論としては、皆犯人なのだが。さらに言えば、創世者の指示で、俺も加担している。久しぶりの創ザ・クリエイティブ・アイズ世クリエイト・タイム眼で、夜の時間を創り、続けた。

命名するなら、創クリエイト・時タイム。文字通り、時間を創って、いる。みんな揃って知らないのだから無理はない。実際紅霧異変のときはフランのアンダーワールド内では使っ

ていないし、春雪異変の際には桜の開花の時にしか使っていない。皆知らないのに、思
い当たるわけがなかった。で、皆見当違いのまま、戦いが始まったのだった。

「…にしても、カオスだよな。ホント。たまに流れ弾飛んでくるし。【盾符 ドラゴン
シールド】。」

飛んでくる流れ弾を盾で防ぐ。

【華霊 ゴーストバタフライ】。

【罔両 ストレートとカーブの夢郷】。

紫と幽々子の弾幕が展開される。あたりではもう、弾がないところを見つけるのが難
しい。

「あーあーあー。もうめちやくちやだよ。つてか、ずっと創世^ク眼^レ展開^シといてよく靈力
切れにならないよな。俺の体。」

と、独り言。創世者は、

『当然だ。言っただろう？ 我の全てを託すと。つまり、その全てのなかに、我の靈力、ひ
いては、今までの後継者達全ての靈力がお前に受け継がれている。』

「なにそれクソチート！」

その驚きの声は、靈夢達にも聞こえ。

「白狼!？」

「なんでここに!？」

「あ。や、やあ。どーもどーも。異変、解決しにきましたー!」

「あら、よくもまあ、そんな事が言えるわね。その眼…創世眼…だったわね。それで夜の時間を創って、いるのに。」

うえから、霊夢、魔理沙、俺、紫。で、紫のセリフに、俺の内心は跳ね上がる。

「…は? なんの証拠があつて…」

「そ、そうよ! 白狼は自分から異変なんて起こさないわよ!」

アリスが言う。妖夢も、口には出さないが、そう思っているようだ。

「…そう。じゃあ、なんで白狼の眼はずっとソレなのかしらね。」

「…ハッ。だったらテメーはどうなんだ? 朝と夜の境界を弄って、夜を止めてんじやねえだろうな?」

言っているうちに、察する。ああ。これは。

「……良いでしょう。リベンジよ。」

「…来いよ。また捻り潰してやる。【力剣符 パワーソード】。」

「ちよ、紫!」

三つ巴どころか、四つ巴のバトルロイヤル。はてさて、どうなることやら。今宵の夜はまだまだ永そうだった。

弾と人形、刀と剣と。

「そらっ！ 【剣撃符 絶力破】！」

「ちっ…乱暴で面倒だわ。ソレ。」

当然だ。そういうものなのだから。

そう心の中で返しつつ、外面では黙って戦う。

「おっと。【盾符 ドラゴンシールド】。」

本日何度目かのドラゴンシールド。いやあ、本当にお世話になってる。…ちよつと脆いけど。

「ああもう！本当に面倒ね！ 【結界 光と闇の網目】！」

紫の弾幕は、物量で押しつけてくるものが多い。当然、今のパワーソード程度の力では太刀打ちできない。だから。

「【力炎剣 パワーフレイムソード】！続けていくぜ！ 【剣撃符 絶力剛破】！」

パワーソードを強化し、さらにいつもの絶力破を超える威力を持つ剛の技を放つ。放たれた剣撃は、いくつもの弾を消し、紫に向かって飛んでいく。が、紫は相変わらずスキマでかわす。

「ちい！ほんと厄介だなそのスキマ！」

「お互い様でしょ、創世者。」

俺たちは、変わらない。

その頃。

「恋符 ノンディレクシヨナルレーザー！」

「獄炎劍 業風閃影陣」 つ！」

「靈符 夢想封印！」

こつちもこつちで変わらなかつた。皆、誰かが犯人だと思ってる。いやまあ、事実なのだが。でもまだ疑念、だ。だから。今の俺が取れる最良の手は。

「……ああ。認めよう。俺が夜を止めた。」

「「「「「つ!」」」」」

俺の突然の自白に、皆が驚く。数人は信じられず。そして、数人は意外で。

「な、何言ってるんだよ!?!白狼は一番、異変を嫌ってたらろ!?!」

まず、魔理沙が食ってかかる。が、

「いや。俺は異変が嫌いなんじゃない。俺は、理不尽な涙が嫌いなだけだ。」

「どう違うってんだ!？」

「白狼…貴方まさか…」

「霊夢。悪い、少し、黙っててくれ。」

「っ!?(声が…)」

音符 ビートストライク。俺の声に、または何かが発する音に様々な効果を付与するスペル。今回は、俺の声に”服従”の性質を付与した。これにより、音の対象には俺の指示が絶対となる。

「白狼…貴方、」

「紫。もちろんお前もだ。」

「っ!?(どうして貴方はまた…)」

取り敢えず余計なことを言いそうだったため、口を止めさせる。

「まあともかく、俺を倒せば、この夜も終わる。お前からしたらハッピーエンドだな。」
「お前からしたら? 妙に気になる言い方ね。」

「まあな。ここにいる妖怪たちはみんな、気づいてるはずだが? 月がおかしいってこと
よ。」

「[[[:]]」

驚いたのは、初耳な人間勢。でも

もう一々説明してる余裕はない。だから。

「取り敢えず、寝てろ。起こさないから。【創・限劍】。」
クリエイト・バビロン

何も無い空間に劍を多数創り、射出する。が、ここは弾幕勝負のプロ。難なくかわす。だったら。

「【創・鎖・不可視】。」
クリエイト・チェーン・ブラインド

俺は見えない鎖を創り、一人残らず拘束。そして、無数の劍で貫いた。無論、スperlカードシステムで死にはしない。見た目はアレだけど。

「……これが終わったら、どんな説教でも聞くから。だから、今は……」
俺は、そう言って、竹林の中を進んだ。

潜入、永遠亭！

鬱蒼とした竹林の奥深くに、その建物はあつた。

立て札には、「永遠亭」と書かれていた。ここから、大きな靈力を感じる。

「どうやら、ここがアタリのようだな。」

『そのようだ。しかし、大丈夫か？白狼？』

俺の声に、創世者が問う。

「え？何が？」

『靈力だ。もう3時間も時間を創って、いるのだぞ？もう限界なのでは無いか？一度出直すというのも…』

「いいや。大丈夫だ。大体、あんたが言ったんだぜ？こんな異変、今夜中につて。」

俺は力なく笑い、さらに目に靈力を込める。

『しかし、それでお主が倒れでもしたら元も子もないであろうが！』

「そうなる前に、この異変を終わらせりや何てことねえよ！」

そう強く言い放って、俺は永遠亭の戸を開けた。その瞬間、視界が爆ぜた。

「ぐ、おおおっ!？」

ゴロゴロと転がる自分の体。俺は直ぐ立ち上がろうとするも、足に力が入らない。

「ぐ……ち……」

一本のパワーソードを”創り”、地に突き刺す。それを杖に立ち上がる。

「くっそ……」

『白狼……お主、やはり限界が……』

「うっせえ。黙って見てろ。俺は、異変を終わらせるんだ。困ってんだよ。人間じゃなくても、ここに生きる妖怪たちが！フランだって！今頃気付いて、きつと困ってる！そんなの許容出来るかよ！何人かの身勝手な欲望で、何人もの人が理不尽な目に遭うのを！だからやるんだ！俺が！終わらせる！」

俺の決意。それを聞いて、創世者は、

（白狼……やはり近づいている！私の危惧するものになりかけている……白狼……お主の守る対象は、どんどん増えておるのだぞ？このままでは……潰れてしまう。）

創世者の心配を他所に、俺は傷を癒す為に能力を行使する。

「はあ……はあ……はあ……く、クリエイト・コンディション【創……態】……」

クリエイト・コンディション。その名の通り、状態を”創造”する。これで、傷は治った。だが、消費した霊力と、疲れは治せない。

「くっ……こんなんで……俺の足を、止められると思うなよ！っ【力剣符 パワーソード】！」

俺は大きく吠え、剣を手に再び永遠亭に突撃した。そこには大量の妖精達がいた。壁のように立ちはだかつてくる。

「どけ！【剣撃符 絶力剛破】！」

直後、永遠亭の入り口はふつとんだ。

「つ…はあはあ…」

『白狼！無茶をしておって！そんな霊力量で”剛”の技を使うなど…』

「うっせえって。なりふり構ってらんねえんだよ。」

カラカラと剣をひきづり、俺は永遠亭の内部に潜入した。

入ってから、どれほど経っただろうか。景色が歪んで見える。あっちへフラフラ、こっちへふらふらを繰り返している。

「とーう…ここはこの因幡てゐが守る！ここは通さないよー！」

「あ？」

「ひっ!?!」

突然出てきた中ボスらしきものも、一瞥しただけでスタン。ま、こんなものだ。

「寝てろ。起こしたくもねえ。【剣撃符 絶力破】。」

もはや作業的なまでに乱暴に放った絶力破で、てゐは吹っ飛び、壁に頭を打ち付け、気絶した。

「…行くか。」

さして気にせず、俺は先へ進む…ときに。

「止まりなさい。剣を置いて、両手を挙げなさい。」

…どうやら、また新たな能力者の登場らしい。

紅き瞳：：サングラス：：うつ頭が

からん、と剣を落とす。まあ、背後を取られている以上、どうしようもない。

「貴方は何者です？」

後ろにいる少女が俺に問う。

「：夜月、白狼。夜の月に、白い狼と書く。」

「夜月、白狼：：続けて問います。目的は何ですか？」

「この異変を終わらせに。偽りの月を無くし、真実の姿を引つ張り出す。」

「っ！やはり、敵：：！」

確認は終わったようだ。であれば。

「そうなるな、さて。どいてもらおうか。」

「っ！！」

後ろで靈力の高まりを感じる。だが、遅い。

「【技槍符 テクニクランス】。」

俺の背後にテクニクランスを創り、振り向いてキャッチ、そのまま振り回す。

「っ！きゃー！」

その少女は態勢を崩す。

「【槍撃符 絶技槍】。」

これを好機と見た俺は後ろに飛びつつ、槍を投げた。それは寸分たがわず少女を貫き、爆散した。

「……さて、次だ。」

俺は終わったと思ひ、次に進もうとする。その時、

「何を勝った気でいるんですか？」

と、心底冷ややかな声が聞こえた。

「っ何!？」

その声は、紛れもなく先ほど倒した少女のもの。だが、その声は冷やややかではあるが、しっかりとしている。ダメージを受けていたら、こんな声は出せない。

「まさか!？」

声と共に、倒れているはずの少女の方を向く。が、そこには誰もいない。

「!? な…」

「なぜ、でしょうね。貴方はさつき、私を倒したはずなのに…」

「っ…幻影…か？」

「私にそんな力はありませんよ。ただ、貴方はとづくに狂っています。」

「おい、創世者。」

『……』

「おい!?返事をしろ!……くそ。まさかこつちまで介入されてるとはな。思ったよりやる。こりゃあ、あんまし手加減なんてできねえぞ?」

俺は久しぶりの窮地に、俺自身は気づいていないが、笑っていた。後に、この異変を振り返ったこの時俺と戦った少女、鈴仙・優曇華院・イナバはこう語る。

まるで某タタリのようなだった……と。

「ひらけ!」クリエイト・パレロン【創・限剣】っ! 【銃符 ニードルリボルバー】!

力を解き放ちつつ、俺は飛ぶ。しかし、視界がグニャグニャと曲がり、真っ直ぐ飛べない。

「くっ……どうなってやがる……!?!」

「無駄ですよ。貴方の波長は私が操っている。まともには戦えませんよ。」

「波長……?合わせてやるんなら魔女狩りもできそうだなおい。」

少女はこちらに弾を放ちつつ言う。

「私の能力、”波長を操る程度の能力”で、貴方の波長を狂わせています。だから、貴

方はまともには戦えません。」

「ふーん。だから？」

「…え。」

少女の指摘に、俺は不敵に返す。

「俺はな、もともと自分が普通の人間だなんて思っちゃいねえんだよ。何でも」創れる、そんな人間が、まともな神経してると思うなよ？」

俺は切れかけている創世眼のスペルに再び靈力を流し、言う。

「てめえが俺の波長を操って、てめえがどこにいるかわからなくさせてようが関係ない。あたりを吹っ飛ばせばな。」

「!? な…」

「くらえ、クリエイト・ボンバー【創・爆】。」

直後、今夜で何回目かの爆発があつた。

揺れた、歪んだ世界。

「キヤツ!」

ドゥー!と誰かが壁に叩きつけられる音がした。俺はそつちを見る。そこにいたのは、うさ耳を付けたブレザー少女だった。

「……どつか高校とかあったっけ。」

『いや、幻想郷には高校は存在しなかったと思うが…』

俺のボケに創世者はしつかりと返してくれる。これだからツツコミ役がいるときのボケはやめられない。

「ぐ…しまった、能力が!?!」

「おう。バツチリ見えるぜ? お前の姿が。そしてもう、見逃さない。【欲望 オーズ
!」

すかさず、仮面ライダーオーズの力を”創り”、オーズのベルト、オーズドライバーを腰に装着する。そして、変身アイテムであるオーメダルを三つドライバーにセットする。

その後、オースキャナーで、ドライバーのメダルをスキャンする。

「変身！」

(タカ！トラ！バッタ！タ・ト・バ！タトバタ・ト・バ！)

光に包まれ、俺は仮面ライダーオーズ、タトバコンボに変身した。

「な…変身…した…!?!」

「ああ。ま、人間の自由と平和を守る戦士ってやつだ。さて、まだ、やるか？」

「わかりきったことを！【狂視 狂視調律（イリユージュョンシーカー）！】」

少女は力を振り絞り、スペカを使う。辺りに白い弾丸が多く出現する。…が。

「…もう、いいだろ？」

どこからともなく武器、メダジャリバーを取り出し、それに銀色のメダル、セルメダ

ルを三枚投入する。そしてスキャン。

(トリプル！スキヤニングチャージ！)

剣に銀色のエネルギーが収束する。

「はあああああつ！」

大きく掲げ、

「セイ、ヤー！」

振り下ろした。その一閃は一瞬、景色を両断し、元に戻る。しかし、弾は切れ、少女も、

「かはっ…」

多大なダメージを負い、倒れた。

「…ふう。終わりだ。先に進ませてもらうぜ。」

と、変身を解除し、歩き出す。少女は、気を失っていた。

「……よかった。これが終わったら、名前を聞こう。それで、友達に…なんて、甘いか。」

さつてと、次は一体誰が出て来るのやら…っ!!」

俺が歩いてすぐ、遠くから弓矢が飛んできた。

「っ！【盾符 ドラゴンシールド】！」

すぐさまドラゴンシールドを創り、防ぐ。

「…いきなりだな、おい。」

「あら、いきなり入って襲撃したのはそっちでしょう？」

出てきたのは、赤と青の服を着た銀髪の女性。弓を持っていた。

「…あんたは？」

「人に名を訪ねる時は…」

「あーはいはい。夜月白狼だ。で、あんたは？」

「…八意永琳よ。一応医者よ。」

女性、永琳は、そう名乗った。

「あんたが元凶か？あの月の。」

「いいえ。この奥の姫様よ。」

「…で、あんたはそこへの門番…か。」

「ええ。そんなところよ。」

ならばと、俺はすぐさまスペカを取り出す。

「悪いが、直ぐに通らせてもらおう！【命符 エグゼイド】！」

直ぐにゲーマードライバーをセット。ガシヤットを起動。

（マキシマムマイティX！ハイパームテキ！）

まずマキシマムをセット。

（マキシマムガシヤット！）

レバーを開いて、ガシヤットのボタンを押す。

（レヴェルマアツクス！）

間髪入れずにムテキをセット。

（ドツキーング！）

ボタンを押す。

（パッカーン！ムウウウテエエキイイイ！輝け！流星の如く！黄金の最強ゲーマー

！ハイパームテキ！エグゼイド！）

光と共に降り立つ俺の姿は、仮面ライダーエグゼイド、ムテキゲーマーになっていた。
「その、姿は…?」

「ノーコンティニューで、クリアしてやるぜ！」

蹂躞の、始まりだった。

偽りの月の真相

金色に輝く体。がっしりとしたアーマー。最強の医療ライダー。仮面ライダーエグゼイド、ムテキゲーマー。

使用ゲームはハイパームテキ。その内容は、敵の攻撃を一切受け付けない主人公最強の無双ゲーム。これが出た以上、永琳に勝ち目はない。いや、唯一あるのは、スペルカードの時間切れ。

「…ま、そうなる前に先に進ませてもらうが。」

「…随分と眩しい姿ね。まるで夜なのに朝みたい。」

と、永琳は例える。ま、当たらずも遠からず、といったところか。

「…押し通る。」

お話もそこそこに。俺たちはぶつかり合う…前に。

「…あ、そうだ。」

「?何かしら?」

「あんた…あの月の理由、知ってるか? どうしてあんたのこの姫さんが月を偽ったのか。」

俺は永琳に問う。すると永琳は、いとも簡単に答えた。

「姫様を匿うためよ。」

「……は？」

「姫の名は、蓬萊山 輝夜。そうね……かぐや姫、といったらわかるかしら？」

かぐや姫。現代にまで伝わる御伽噺の一つ。元々は竹取物語という古典が元になっており、竹取の翁が竹取の最中、光る竹を見つけ、その中のかぐや姫を見つけ、育てる。すくすくと成長した姫は、時の帝に目をつけられ、求婚される。他にも、五人の皇子にも求婚され、皇子達には、手に入れるのがとても難しい、五つの難題を出す。が、誰一人として達成できず、姫は月に帰ってしまう、という話である。が、もし、この先にいるのが本物のかぐや姫だとしたら、一つの疑問、いや、矛盾が生じる。

「後世に伝えられているものと結末が違う……かしらね？」

「!!……ま、そうなるわな。」

「先に答えを言うなら、カモフラージュよ。どこに月の使者がいるかわからないから。もう帰った、ということにしないと危ないのよ。月に姫を帰すわけにはいかなかった。」

「……………」

黙って思考する。思い出すのは、紫から教えてもらった結界のこと。

博麗大結界。幻想郷と外の世界、つまるところ、俺の元いた世界とを隔てる結界であ

る。幻想郷の住人でない限り、結界は超えられず、外の世界の住人は幻想郷には来れない。逆に、幻想郷の住人は外の世界には行けない。…であれば。

「ひとつ、あんたらは思い違いをしている。」

「え？」

「恐らく、あんたらが危惧している追っ手は幻想郷にすら来られない。」

「……どういふことかしら。」

目を細め、永琳は問う。

…スペル限界か。話しすぎたな。スペルを解きつつ、話す。

「どういふこともなにも、言葉通りだよ。幻想郷と外の世界には、博麗大結界という結界で隔てられてる。滅多なことじゃ越えられない。」

「……月を、舐めないで。」

「随分と自信があるな。やっぱ故郷だからか？」

「……黙りなさい。」

いいや。言わせてもらう。

「安心しろよ。たとえあんたらの危惧する状況になったとしても、俺がなんとかする。」

「……ただの人間が、出来るとでも？」

「…は。その人間に好き勝手やられといてよく言えるな。それに、俺は血筋上、普通の人

間じゃないらしいぜ?」

「……は?」

「現人神……らしいぜ? 俺って。なにせ原点は創世者……世界創造の神様だからな。……だから! 月だろーが木星だろーが! どんな状況からでも、俺がひっくり返す! 最高のハッピーエンドってやつを掴み取ってみせる! だから、あんたらも、この異変を止めてくれよ。」

と、俺は汗をダラダラと流しながら言う。

「……どうして。どうして貴方はそんなことが出来るの? 私達とは、初対面なのに……」
「関係ねーよ。助けを求めてんなら、誰にだって手を伸ばす。それが、最後の希望だ。」

俺は、瞳を揺らさず、しっかりと永琳を見据えて言った。

「……異常よ。貴方。狂ってる。」

「知らんな。さあ、どいてくれ。あんたと戦う理由はもう無いはずだ。」

俺の言葉に、永琳は。

「……………そうね。……………行きなさい。」

「ああ。通るぜ。」

俺は先へ進んだ。

いくつもの襖の先、不思議な空間に出た。

空がある大きな空間。空には月。恐らくアレが、本来の月。そして、空間の中央に浮遊する長い黒髪をたなびかせた少女。

「…あんたが、蓬莱山輝夜、か？」

「……貴方は？」

今から、話は結ばれていく。そう。めでたしめでたしへと、向かっていくのだった。

月まで照らせ、希望の光。

俺の目の前に浮遊する少女。長い黒髪。まさに貴族つといった感じの着物。

「誰？」

「…夜月、白狼だ。」

もう何度も繰り返した自己紹介。そろそろバリエーションがいるかな？

「どこから来たの？」

「この幻想郷の湖の先にある紅い館、紅魔館から。間違っても、月からじゃない。」

「……じゃあなぜここに？」

「…偽りの月を本物に直すためだ。」

「そう…貴方は私に月に帰れって言うの？」

少し目を潤ませる輝夜。だが、俺にはその嘘は通用しない。

「……いいや。月の奴らは決してここには来れない。」

「……嘘ね。」

「いいや。本当のことだ。」

「信じられない。」

「そうか。なら。」

俺はスペカを取り出し、輝夜に向ける。

「力づくでも信じさせる。」

「クスツ…やっぱりそこに行き着くのね…」

「……らしいな。」

「私がかつて出した五つの難題。貴方はいくつ解けるかしら？」

「……あんまし頭は良くねえが、やれるだけやってやるよ！【力剣符 パワーソード】、

【盾符 ドラゴンシールド】、【翼符 ドラゴンウイング】。……さあ、ショータイムだ！」

俺史上初の、月という星一つを賭けた戦いが、始まった。

「【剣撃符 絶力破】！」

「【難題 竜の頸の玉】。」

俺は剣を乱暴に振ってできた衝撃波を飛ばす。

向こうはスペカからでた弾を飛ばす。

俺の飛ばした衝撃波はいくつかの弾を消して消える。

「ちいっ！流石に弾が多すぎるか!？」

「ふふ、どうしたの？」

「つくそ、余裕かましやがって。」

『白狼。お主、我から見ても靈力が切れかかっておるな!? 無茶をするな!』

「…悪い。んなこと言つてらんねえんだよ。あとで、説教とかはまとめて聞くから、だから、今は…力を貸してくれ。創世者^{ザ・クリエイター}?」

『…よかろう。しつかりと、異変を終わらせるのだぞ?』

そう言つて、創世者は靈力のリソースを分けてくれる。ああ。俺は先祖からして、恵まれてたな、と、今更ながらに思う。

既に俺の中の靈力は空だ。だから創世者に頼つた。これは俺自身の力不足。

『渡しきつたら、もう我が目覚めることはない。我は元々、靈力だけの存在だからこのう。なあ、白狼よ。お主は、万能の希望になる必要はないのじや。自分の欲を持って。願いを持って。意志を持って。我が認める。お主はお主の心のままに、生きるのじや。』

突然の創世者の告白に、俺は。

「…:は?ちよつと待て、目覚めることはない、だど!?!おいやめろ、だつたら受け取らねえぞ!今すぐ、靈力を送るのをやめろ!」

『白狼。短い間ではあったが、実に楽しいものだったぞ。願わくば、お主の次の世代からは、鳥のように、自由に生きる者たちであらんことを…』

霊力が湧いてくる。そして、創世者の体が薄く消えていく。声も遠くなっていく。

「おい！まてよ！いま、あんたを失ったら、俺は…」

『白狼。お主はもう、みんなのために生きる必要は無い。ここからは、お主のすてーじ、じゃ。』

「創世者ツ！……………くつそ…なんだよ…ふざけんなよ…わかったよ。俺は、俺の生きたいように生きてやる！まずは、この狂乱を終わらせる！」

「何?!この濃密すぎる霊力…!」

俺は創世者より受け取った霊力を解放する。

クリエイト・チエーン・ブランド
「創・鎖・不可視」!

ガシイン！と見えない鎖で輝夜を縛る。

「きや!?!何これ…鎖?」

「これで終わらせる。【剣撃符 絶力剛炎破】。」

いつもの倍ぐらいの炎を灯した剣から大きな衝撃波が放たれる。それは抵抗のできない輝夜に向かって飛んでいき…

「きやあああ!?!」

「……………ふういー。」

……………終わった。これで、月は元に戻って、みんなも、笑っていける…

「そう、夜を止めていたのは、貴方だったのね。」

「ツツ!?!」

ぞくり、とした。煙が晴れ、そこから現れたのは、夥しい量の弾幕。

【「永夜返しー丑三つ時ー」】。

「つな!?!ぐつ!?!」

とつさにドラゴンシールドで防ぐ。が、すぐに壊される。そして、またすぐに多くの弾が俺を襲う。

「ぐ、が、あああつ!?!」

「次よ。【「永夜返しー寅の三つー」】。」

とめどなく襲ってくる弾幕。

「ぐ……ぐ、【創クリエイト・シールド・盾】……っ!」

再び眼に霊力を流し、俺の目の前に空気の盾を創る。

数十秒経ち、輝夜が最後のスペルを使う。

【「永夜返しー夜明けー」……】

そこから、俺の記憶はない。意識を失った俺の体は、果たして最後のスペルを防ぎきったのか、それとも、失った時点で俺は地に落ちたのか。真相を語らない輝夜以外、真相は誰も知らない。

…で、結局、異変はどうなったのかというところ。

永夜異変の首謀者は、俺、夜月白狼、ということになっている。他にもやった奴はいるが、そんなのは些細なことだ。別に問いただすようなことはない。

本題だった月のことも、元どおりになっている。月から使者が来ることもなく、今は永遠亭のものも、幻想郷に慣れつつある。人里にて、医者のようなことをしているらしい。

で、俺にとっての本題の、創世者のこと。

やはり目覚めてからというもの、創世者の声どころか、気配すら感じなかった。つまり、消えたのだ。本当に。

「……俺のせいだ。あの時、全部自力でやってれば……」
俺の涙は、真新しい枕を、ジワリと湿らせていった。

犠牲から生まれた日常

紅き館、紅魔館。

その一つの部屋で、俺は泣いていた。

「……………くそ。俺は、俺は……」

「……………白狼……………」

ドアの向こう。廊下でフランは、俺を心配していた。

永夜異変の最後の戦い。その時に、俺は、俺の実力不足によって、大切な人を失った。

「創世者…俺はどうしたら……」

俺は創世者を失った。

俺の先祖。俺の家訓を、呪いを解けと言ってくれた。

俺の、家族にして、道しるべ。それを俺は、失った。

バアン！とドアが開かれる。飛び込んできたのは。

「ツ白狼!!」

「へ? わぷつ!!」

フランだ。

「フ、フラン!?! どうしたんだよ?」

「どうしたんだよ、じゃないよ! いつまでそうしてるの!?! 創世者だって、白狼がそんなじゃ浮かばれないよ!」

「……ああ。わかっではいるんだよ。でもさ、俺にとつての、家族だったんだよ。」

他人と別れるのとはわけが違う。フランの言うことは正しい。だが、俺にはキツすぎるのだ。俺には、万人の味方なんて大それたことは出来ない。

思えばこの時ぐらいであれば、まだ引き返せたのでは無いかと、今では思う。まあ、後になって後悔したかと聞かれれば、ノーと答えただろうが。

「でも、創世者は白狼に落ち込んで欲しいって思ったの?」

「……それは、違うけど。」

俺は目をそらし、答える。

「俺には、なんかのアニメの主人公みたいに、きついことを受け入れて進む、なんてことは出来ないよ。いつまでも、どこまでも、引きずる。」

俺がフランに見せた、初めての弱音。それを、フランは、咎め……

「うん。いいと思うよ?」

「……………は?」

なかった。

「私は、白狼にそんなの求めてない。どんなことでも受け入れて前に進む、なんてことを求めてなんて無い。そんな事は、絶対に無理だし、出来たとしても、出来る人を、私は人とは思えない。」

「……………」

「辛いことがあったのに次の日にはケロリとしてる、なんて薄情な白狼にも、なってほしく無い。だから、それでいいの。辛いこと、悲しいこと。その全てを受け入れろなんて言わない。引きずって生きつつあって構わない。でも、自分が前を向かない言い訳にしたらダメだよ。私が前に狂気をそれにしてたのと、おんなじように。」

「!!……………」

俺は、フランのその言葉に、圧倒され、頭を揺さぶられ。気付いて。

「……………悪い、面倒かけた。」

「ううん。ただ強いだけの人を、私の希望にたく無いから。私の希望は、強くなくたっていいの。私の希望は、私を守るから。」

フランの決意とも、願いとも取れるそのセリフに、俺は

「…決めた。ぜってえフランに守ってもらう事はしない。俺は、フランの最後の希望だからな。」

フランの頭を撫で、言う。

取り戻した日常は、犠牲があつて得たもの。

絶対に守り抜く。俺はそう誓い、今日のこの日を過ごした。

リアルだと夏休みの終わりに書いた一休み。
教師、いたずら阻止の段

「……人里にでも行くか。」

唐突に、思い立つ。

「……どうしたの急に。」

パチュリーがゼロ○使い魔を読む手を止めてこちらを見る。俺は読んでいた魔法科高校の○等生にしおりを挟み、テーブルに置いてから出口へ向かう。

「ただ、約束を思い出しただけさ。」

俺はそれだけ言うと、ドラゴンウイングを使って空へ飛翔した。

人里。の寺子屋。

子供たちは変わららず、元気に学び続けていた。

「……よかった。皆、元気そうだ。」

俺は遠くから、その様子を見ていた。

…ほんとに。よかった。

俺は教室を遠くからみて、立ち去ろうとする。が、俺は子供の目の良さを見誤っていた。

「あー！しろーせんせいだ！」

「しろーせんせい！」

「…おいうそだろなんでだよ。…不幸だ。」

あつさりと見つかり、教室へと連行される。そこにはもちろん慧音もいたわけで。

「おや、夜月じゃないか。約束、忘れてなかったんだな。」

「……………ああ。忘れてないよ。」

目を逸らしつつ、言う。

「はは。まあ、なんだ。1時間、やるか？」

「……………はあ。ま、このまま手ぶらで帰るのもな。やるよ。」

というわけで、久しぶりの俺による授業が行われようとしていた。

その頃。

「うささ……いい事聞いたウサ。あの人間が授業……絶対に台無しにしてやるウサ！」
とあるウサギも、誓いを立て、動いていた。

外でのドツヂボール。ま、男子女子で身体能力に差があるため、なんとかルールを改変して、できるだけ公平に近づける。

「くらえーしろーせんせー！」

「おっ……っ！とと、あつぶね。」

子供たちの投げるボールをゆっくりと手加減しつつ躲す。時折取りながら、もちろん加減して投げる。時々当たる子もいたが、それはご愛嬌。

と、その時。足元にワイヤーが見えた。しかもご丁寧に俺の次に足を置くところにピンポイントに張られていた。

（誰のいたずらだっただけ？……ま、どうにかなるからいいけど。）

俺は心の中でそう毒づき、弾をしゃがんで躲し、ワイヤーを引っ張り、罨を引きづりだす。

大きな丸太だった。

「っ!? 【光速 カブト】!」

子供たちの安全面を考え、仮面ライダーカブトに変身し、

(クロックアップ)

クロックアップで超加速。丸太を。

【死符 七夜】。

目を直死の魔眼にしつつ、カブトクナイガンで死の線をなぞり、丸太を”殺した”。

「……ふういー。”解除”。」

すぐさま元の場所に戻り、全能力を解除し、しれつと競技に戻る。

その頃。

「ムキー! なんなんだウサー!? あのアホみたいにはやい動きは!? あれが白狼とやらの能力なのかウサー!」

どうやら、まだ諦めてはいないらしい。

中立だからこそ。

…問題が、立て続けに起こった。

何故か、罨が多数仕掛けられていたのだ。それも、俺に向かつての物が多くあつて、まあまだ良かったが。ま、生徒たちに向かった瞬間、容赦しねえが。

「……はあ。不幸だ。」

「しろーせんせー、だいじょーぶー？」

「んー？ああ。まあな。大丈夫だ。」

「ウサササ…疲れてるウサ。このままいけば、いつか疲れて引つかかる…！」

近くの茂みで、てゐるは暗躍していた。

「…んで、ここはこうなるわけだ。と、今日はここまでだな。」

時間になり、生徒たちは帰宅する。その時である。

「へ？うわあああ!!」

「!？」

どしやあ!と生徒の一人が何かに落ちる音がした。

「夜月!」

「分かってる!おい!大丈夫か!?!」

見れば、誰かが仕掛けた落とし穴に落ちてしまったらしい。

「【走符 ドライブ】。変身!」

(ドライブ!タイプ、ワイルド!タイイヤコウカーン!フッキング、レッカー!)

すぐにスペカを使い、仮面ライダードライブ、タイプワイルドレッカーに変身し、落ちた生徒を救出する。

「これでよし。ケガは無いか？」

「はい!」

「よし。んじゃあ、気をつけて帰るんだぞ。」

そうして俺は生徒を改めて見送る。…で。

「………覚悟しろよ。野ウサギが。」

「っ!? (バレたウサァー!?)」

俺が言うのと、近くの茂みがガサリ、と音を立てる。

「俺だけならまだしも、生徒たちに手エ出しやがって。ぜってえゆるさねえ!」【武士 鎧武】!」

新たなスペカを使う。左手に戦極ドライバー。右手にカチドキロックシード。ドライバーを腰に装着。ロックシードを起動。

(カチドキ!)

ドライバーにセットし、ブレードで切る。

(ソイヤッ!カチドキアームズ、いぎ、出陣!エイ、エイ、オー!)

そしてすかさず極ロックシードを取り出し、起動。

(フルーツバスケット!)

「ま、ままままざいウサァー!」

てゐるは危機を察知し、飛び去ろうとする。だが。

「逃すか!ふっ!」

極ロックシードをドライバーにセット。極ロックシードをひねり、

(ロック、オープン!極アームズ。大・大・大・大・大將軍!)

俺は仮面ライダー鎧武、極アームズに変身し、極ロックシードをひねる。

(ドンカチ!)

ハンマー型の武器、ドンカチを召喚し、サッカーよろしく蹴る。その軌道は、飛び去ろうとするてゐの後頭部を容易く捉え、撃ち落とした。

「ウサー!?!ぐえっ!」

もちろん、着地など出来るはずもなく、したたかに身体を打ち付けたてゐは。

「きゆう……」

気絶した。

「ハッ!?!」

「よう、目覚めたか、うさぎさん?」

「げえっ!?!夜月!?!」

目覚めて早々、ひどい反応だ。

「ま、許さんけどな。…で?なんであんなことした?」

「……仕返しウサ。あの時、思いっきりやられた仕返しウサ!」

「……あー、俺がブチギレてた時の。たしか…因幡てゐ…だったか。」

「……………」

てゐは答えない。

「どうでもいいけど、俺だけにしとけよ？俺じゃなかったら大変なことになってるものもあつたんだから。」

「……………え？」

俺がそう言うのと、てゐは驚く。

「な……怒らないウサ!？」

「いや、もう罰みたいなの食らつたろ。お前。まあ、強いて言うなら、俺にとってはあの程度、なんでも無いぜ？」

「……………めちやくちやウサ。どう考えてもこつちが悪いのに……」

「ま、俺は今回中立だからな。善でも悪でも無い。お前が相對している俺が善でも悪でも無いんだから、お前にも善悪なんて問えないよ。悪があつてこそその善、善あつてこそその悪だからな。」

俺はそう言つて笑ひ、去つていく。

「…………卑怯ウサよ……それ。よし！こつちがなつたら、もつとすごいいたずらやつてやるウサ!!」

こつちして。俺とてゐの、それなりにルールの決まっていたはずら合戦がはじまつたの

だ
っ
た。

Which is lead?

フランドール・スカーレット。

紅霧異変の時に出会った少女。俺は、あの子に降りかかる理不尽な悲劇を止めるために戦った。んでまあ、その時に色々言ったから、ただの同居人、というわけでもなくなってきた。実際、あーん、をしてもらったこともあるし、ベッドに入り込まれたことなんてザラだし、それに…

『俺はフラングが俺を好きでいる以上に好きでいる。』

なんてことも言っていた。

「あああああああああ！なんてこと言ってるんだ俺!？」

永夜異変のことで忘れてたが、ありやもう告ったようなもんだ。しかも両思いで。

「……………」。恋人…ってことになんのか？似合わないにも程がある…」

俺は久しぶりの一人のベットで、うーうー唸っていた。

夜月、白狼。

お姉さまがやった異変の時に出会った少年。

私は、彼に救われた。その時から、お互いに色々言ってきたから、ただの同居人……とは言えなくて。

……いや、言い訳をするのはやめよう。

私は、白狼が好きだ。多分、異性として。長いこと地下に閉じ込められてた私には、まだ分かってない事が多いけど、この大きくなる胸の鼓動はわかる。

白狼も言ってくれた。私が白狼を好きな以上に好きでいる、と。……最近は、そんなところを見せなくなってきたけど。……よし、年齢上年上な私が、リードしてあげようっと。

ガチャリ、とドアが開く。入ってきたのは……フランだ。

「お、おう。フラン。よく来たな。」

「う、うん。」

互いに、ぎこちない挨拶。今までは、こんなことにはなかってなかったのに。

「ど、どうしたんだ?」

「えっとね、その…伝えたい事が、あつて。」

瞬きをしつつ、そう答えるフラン。自然と、俺の心臓はいつもより早く脈打っていた。

「……あのね、私……白狼のことが好きって、前に言ったよね。」

「あ、ああ。俺はそれ以上にフランを好きでいる、とも。」

お互いに、似たようなことを考えていたらしい。

「それでね、その…私たちが…どういう関係なのかなって…」

「……っそりやあ、その…」

恋人、と言おうとして、顔が赤くなつたのがわかる。

心で思うことは簡単だが、言うのは恥ずかしいらしい。

「恋人…なの、かな?」

「……フランがどういう関係でいたいか、だよ。」

「え?」

俺は、俺には、関係を自分の意思で決める勇氣も力も権利もない。だから、俺には決めてもらうしかない。

「俺とフランが、どういう関係でいたいのか。それは、フランが教えてくれ。俺は、そうなるように頑張るから。」

「白狼…」

俺は卑怯だ。自分にできないことを、フランに押し付けようとしている。過去に失敗したから、逃げているのだ。

他人と一度線を引いたら、なかなか変えられない。それが、たとえ俺の好きな人になつたとしても。

「…私は、白狼がいい。恋人にするなら。付き合うなら。」

「……………」

フランはしつかりとした目でこちらを見つめ、言った。さらに。

「白狼はどうなの？」

「え？」

不意打ちを食らつた。そんな気分だつた。

「白狼はどうしたいの？私、嫌がる人を恋人にはしたくないよ？」

…参つた。まさかそんな手で来るとは。

「…その言い方はずるいぞ。」

「女の子はちよつとずるいくらいが可愛いだよ。あと、私にこんな選択をさせたの、白狼だからね？押し付けるんだもん。」

「はは…悪い。俺は未だにビビりだからさ。怖いんだよ。関係が変わって、傷ついたりすんのが。」

俺が言ったセリフに、フランは笑って、

「人が人と関係を持つ以上、傷つくのはしょうがないよ。だって、考え方も、価値観も何もかもが違う。」

「でも、だからって傷つくのが当たり前の世界なんて…!？」

嫌だ、とまでは言わせてもらえなかった。唇に人差し指を当てられたからだ。

「…まったく。白狼はいつもみんなのことばかり。でも、ここで問題になっているのは、私と白狼の問題。」

気づけばフランはいつもの調子になっていた。

「白狼自身が、私とどうなりたいか、なんだよ?」

「……あーもう。負けたよ。まったく。わかった。付き合おう。フラン。こんなめんどいやつだけど、それでもいいのなら。」

「もちろん。だって私は、そういう白狼が大好きだから!」

俺は、ここでようやく一歩進めたような気がする。過去を乗り越える、第一歩。

…で。

俺たちが付き合うことを、紅魔館のみんなに話すと、みんなが、ああ、やつとか。みたいな反応だった。

意外と、お互いの気持ちはみんなには筒抜けだったらしい。

俺とフランは夜、外に出た。季節はもうそろそろ夏。ひまわりが見えるだろう。……だが。

「ねえ、白狼。」

「……ああ。わかってる。……こりゃあ、異変だ。」

明らかに夏に似合わない花が咲いていたのだ。そう。桜だ。

これは、新たな戦いを、予言していた。

花が咲き誇る花映塚と巻き起こる萃夢想編。

限定依頼

「…フラン。」

「解決、でしょうか？…いいよ。待ってる。」

はあ。俺はフランには敵わないらしい。思ってることが筒抜けだ。

「……うん。行ってくる。」

そう言つて、取り敢えずドラゴンウイングでも使うか、と思つた時。

「待ちなさい白狼。今回は動かないで。」

「!?!」

背後から声がした。振り向けば、紫がいた。

「…どういうことだ？異変が起きたら解決する。それがお前が俺にした依頼の筈だが？」

俺は少し声を厳しくして話す。

「簡単に言うわ。害はまったくないからよ。」

「……は？」

一瞬にして素にもどる。害がない？んなばかな。

「え、だつて異変だろ？」

「ええ。でも、数十年に一度は確実に起こるものよ。そうね…貴方で言えば、オリンピッククの様なものよ。」

「んなわけあるか!?!数十年に一度単位のオリンピックとか過疎つてるにも程があんだろ!?!」

ちなみにオリンピックは四年に一度。随分な差である。

「とにかく、今回貴方は動かなくていいわ。愛しの人と精々ピンク色な日々でも送つときなさい。」

「んなことするか!?!だいたい、俺やフランには早すぎるつつの!」

「あら、貴方はナニを想像していたのかしら？」

「るっせえ!あーもうわかった!お前の言うとおり、今回だけは紅魔館にいてやる!ただし、正当防衛はさせてもらうからな!」

「まあ、貴方に襲いかかるのなんて、よほど自信のある人か、馬鹿くらいでしょうし、いいわよ。」

そう言つて紫はスキマから帰つていった。

で、そこに残されたフランと俺は、ため息を一つついて。

「……戻ろうか。」

「うん。」

二人で紅魔館の中に戻っていった。無意識のうちに、お互いの手を握って。

「……で、暇なんだよなあ……」

「恋人になったのにそれっぽいことしてない！そのくせ暇っていうとかどうなの!？」

「いやあ、俺って恋愛経験どころか友情経験すら幻想郷こっちに来るまでなかったし……何していいか。」

フランのツツコミに俺は笑って答える。如何にどんな物さえも”創れる”俺でも、知らないものはどうしようもないのだ。

「大丈夫。私がリードするから。」

と、フランは自信満々に言う。

「女子にリードされる男子ってのもどうなんだ……？」

と少しばかりの反論を試みるも、

「じゃあ白狼は私をリードできるの?」

と言われれば、黙るしかない。

取り敢えず、苦笑いしておく。その手の上でスマホをいじりつつ。

「じゃあ…あ！私、外に行きたい！」

と、フランは切り出した。それは、俺がフランに言った言葉。

「いいことばかりでもないけど、吐いて捨てるほど悪くもないんでしょう？」

「……ああ。わかった。夜になったら、外に出よう。」

初めての、デートの約束だった。

裁くのは……俺の恋人だーッ！

で、夜になった。日頃から”創って、”おいた靈力回復薬（俗に言う兵糧丸）を食べ、外に出ておく。

「おや、お出かけですか？」

門番をしていた美鈴に声をかけられる。

「あ、美鈴。まあね。フランに館の外を見せるって言ったから。」

「ああ、なるほど。だからこの時間に。」

「うん。でないと危険だしね。」

と、お互いにこやかに話す。と美鈴が彼方を見つめ、目を細める。俺もそつちを見つめ、密かに戦闘態勢を整える。

大きな鎌を持つ赤髪の女性と、その隣で笏を持った少女。

「貴方が夜月白狼ですね？」

「……まあ、そうっすけど、貴女は？」

おそらく鎌を持った女性は少女の部下なのだろう。少女しか喋らなかつた。

「申し遅れました、今代の創世者。私は四季映姫・ヤマザナドゥです。わかりやすく言う

と、閻魔です。」

と、普通の人なら腰を抜かす様な事をさりりといいやがった。

「ヒュウ。まさかの閻魔とはね。この人生でどんだけ超常の奴に会ってんだか。」

妖怪に始まり、妖精、魔女、吸血鬼。そして終いにや閻魔だ。

「…どうも今代のは大分ゆるい様ですね。」

「おや、こういう創世者はお嫌いですか?」

「いえ。少なくとも、常にふざけている者よりはマシです。多少の融通がきいたほうが好ましい。」

「…へえ。貴女は俺のご先祖を知ってるって訳ですか。…で、目的はなんすか?俺、これから約束があるんすけど?」

と、笑みを浮かべつつ言う。映姫も笑って、

「あまり時間は取らせません。いいたいことがあっただけです。」

「ふうん。で、その内容は?」

「そう。貴方は少し、自分に自信がなさすぎる。」

そう、言い放った。

「……へえ。俺にそんなこと言って、何をさせたい?」

「いえ。何も。私はただ、貴方たちのこれからに数多くの善行があるようにと、忠告して

いるに過ぎません。」

「忠告にしては、だいぶ踏み込んだことを言うのな、閻魔つてのは。」

俺が言うと、映姫の眉がピクリ、と動いた。

「…そうですね、小町。」

「はいはい。わかってますよ。…さあ、構えな白狼とやら。お前の実力、あたいが確かめてあげるよ！」

と、大鎌を構え、小町、と呼ばれた少女が言う。

まあ、時間があるなら、それでもよかったんだが、

「残念。時間切れだ。」

「え？」

「白狼から離れて。【禁忌 レーヴアテイン】。」

ゴウツ！と炎剣が振られ、二人揃って飛ばされる。

「これから私と白狼はデートなの。邪魔しないで。」

と、今度は顔を赤くすることなく言った。

「行く、白狼。」

「あ、ああ…【翼符 ドラゴンウイング】。」

フランの怒りに触れた二人に少しだけ同情しつつ、俺はフランとともに夜空へ繰り出

した。

「……すいませんねえ映姫様。ちよつと、油断してました。」

「いえ。私も少なからずそういうところはあるので、お互い様です。…それにしても…吸血鬼との逢瀬ですか…少しは、自分に素直になつてきているのでしょうかね。」

「……映姫様?」

まるで母親のような顔をする映姫に小町が声をかける。

「いえ、なんでもありません。行きましようか、帰ったらキリキリ働いてもらいますからね、小町?」

「ゲエツ!?忘れてなかったんですかあ!?!」

「忘れるわけがないでしょう。さあ、観念して働いてもらいますよ!…この異変、元はと言えは…」

この二人は、これが平常運転らしい。

「わあ……白狼、これが外、なんだね。」

「ん、まあな。……どうだ？初めて、じゃないけど、ゆつくり外が見れて。」

「うん。とても満足。白狼や魔理沙、咲夜達は、こんな綺麗なものを見てたんだね。」

少し手を伸ばせば、肩を抱ける距離。とても位置的には近いが、ヘタレでウブな俺にはとても遠かった。それを知ってか知らずか、フランは手を握ってきた。

俺はそれを見ると、

「嫌……だったかな？」

「……バカ言え。好きな人と手繋げるんだぞ？嫌なわけねえよ。」

そんな会話をしつつ。綺麗に半月の月を見上げる。

そうか。今夜は。

「」半月の月がのぼる空、か。」

「？白狼？」

「ん、なんでもねえよ。さ、冷えるといけねえ。今度、また来よう。」

「うん。それじゃあ、約束。」

「おう。」

そうして、俺とフランは指切りをして、さも当然のように、手を繋いで館へと帰っていった。

酒飲む鬼

一応、俺は未成年である。で、なんでこんな当たり前のことを言っているか、という
と。

「あによ白狼？あたしの勧める酒が飲めないってえの？」

「…ええと。」

夕子の悪い霊夢酔っ払いに絡まれているからである。

俺は未成年であるため、酒を飲むことは出来ない。故に、飲んだことなどあるはずも
ない。

「霊夢、俺、酒飲んだことないんだが…」

「そう？ならいい機会じゃないのー。グイツといっちゃいなさいって。美味しいわよ
？」

「いや、その…飲めない年齢なんだよ。」

なにそれ、と霊夢がつぶやき、さらに酒を煽る。

そういえば、霊夢は何歳なのだろうか。人間だから、100を超えていてこの容姿で
はないのだろうか。

そんな事を考えつつ、俺は夜の博麗神社にて、かれこれ3回目の宴会に参加していた。そう。一昨日から1日も欠かさずに、だ。

はつきり言つて異常だ。この前四季折々の花が一斉に咲くという異常があつたばかりだが、またもや新たな異変、というわけらしい。

「霊夢？もう気づいてるんじゃないのか？これは異変だつて。」

俺がそう言うのと、霊夢は、

「んあ？らんのこと？」

「うっわあこりやひでえや！」

まるで話にならなかつた。しかし、この状況が異常なのは事実。なにか大きな力も感じていた。

「この幻想郷で、一体なにが起きてやがる…？」

俺はまだ、全容はつかめないでいた。次の宴会まであと三日。それまでに、どうにかしないと。

とりあえず、これは一体なんなのか。そして、元凶は誰なのか。なにが目的なのか。その辺りをはつきりさせなければ。

「悪い霊夢。ちよつち急用を思い出したから、ここで失敬！」

「ああ!?逃がさないわよ！【霊符 夢想封印】！」

突如、霊夢は酔った勢いのまま、俺に弾幕を放ってきた。

「いいっ!!」【盾符 ドラゴンシールド】っ!」

咄嗟にドラゴンシールドを創って、防ぐものの、この時の霊夢は酔っていて加減をしておらず、割とすぐにシールドが壊れてしまう。

「くっ!やろうってか!?!」【鏡符 龍騎】!」

適当に創った、鏡にカードデッキをかざす。すると腰にベルトが装着される。

「変身!」

デッキをベルトにセットする。すると鏡像が体に重なり、俺は仮面ライダー龍騎に変身していた。

「っしやっ!行くぞー!」

(ソードベント)

デッキからカードをドラグバイザーに読み込ませ、ドラグセイバーを召喚する。

「お!?皆ー!霊夢と白狼が戦うってよー!」

「見ものだ見ものだーっ!」

「つたく、見世物じゃねえっつの!はあっ!」

大きく飛び上がり、霊夢に斬りかかる。

まったく。ほんとはこんなことしてる場合じゃねえのに!

「いやあ、ほんと、見ものだねえ。希望さん？」
瓢箪を片手に、神社の屋根上で、鬼は見ていた。

巫女と鬼と。

「銃符 ニードルリボルバー」！そこだ！

タタンツ！と”創った、銃で霊夢に狙いを定め、引き金を引く。が、

「ふははははー！当たらないわよー！」

「なんつー出鱈目な動きなんだよ怖っ！」

当たりそうな弾をジャンプで躲し、それと同時に飛び蹴りで着地する。それは、世界でも有名なTASの…
頭の可笑しい奴ら

「まさか、霊夢がドウエリストだったとはな…つて！誰が予測できるかなんモン！やるなら魔理沙だろ！（ニコ動感）」

「アレは私であつて私ではないんだぜスパーク！」

横からマスパが飛んでくる。

「光符 ホーリーストライク」、【力劍符 パワーソード】！合体ツ！ユニオン【光劍 ホーリー
パワーソード】！理不尽な怒りはヤメツ…ヤメロオオオカリバーアアア！」

とりあえずパワーソードを”創り、それに聖なる光を灯し、ビームとして放つ。もちろん元ネタはあの勝利の剣。

もうしつちやかめつちやかなこの戦い。しかも、どさくさに紛れて妹紅と輝夜が偶然（笑）と言つてヤリあつてた。

「オットエダガスベッター！」

「オットホノオガスベッター！」

しかも、俺と霊夢を挟んでヤリやがるからタチが悪い。

二人揃つて酔つてるし。しかも、霊夢は持ち前の勘で全て避け、俺は何とか防いでいた。もうやだこの戦力差。

「ま、だつたらとつとファイナーレに持つていけばいいだけの話なんだけどな。さて、霊夢。

い い た い い ゆ め み れ

た か？

「ヒエツ…」

一瞬にして霊夢の顔が青ざめる。まあ、大方演技だったのだろう。バレた以上、許さんが。

【創符 ザ・クリエイティブ・アイズ 創世眼】。

滅べ。（進化後ルシフェル感）【創・爆発】ツ！（アークウイザード風に）

直後、博麗神社は、核の炎に包まれた！（嘘）（北斗感）

まあ、周りの被害を考えずにブツパしたため、もちろん俺以外みんなが倒れていた。「ふういー。…全く。困ったもんだ。次はうまくやれ。何に注意し、誰を避けるべきかは、わかったたろう？」

俺はそれだけ言い残し、紅魔館へ足早に去って行った。

「うぐつ…まさか、周り全部吹っ飛ばしていくとは…さらに、持ち前の能力で直ぐに神社は、壊れる前より頑丈に、強固に”創り、直すなんてね…こりやあ、うかうかしてるとやられるかな？」

自分の能力で存在を疎くさせ、爆発を躲した鬼は、去って行った希望の方を睨み、不敵に笑う。

「いやあ、地底から出てきた甲斐があつたもんだねえ。まだまだ強い人間がうようよいる。本当に、面白い。」

鬼は笑っていた。瓢箪を片手に、どこまでも。

無双する hope! (前編)

紅き館、紅魔館。異変のことを調べるため、俺はパチュリーが居を構えるヴワル魔法図書館へときていた。

「さて。【創符 ざ・クリエイティブ・アイズ 創世眼】。」

能力をフルに使つての調べ物になるため、惜しげも無く「眼」を使う。そして一言。「さあ、検索を始めよう。キーワードは…宴会。」

俺がキーワードを言うと、関連する書物のみが本棚より飛び出す。

「続けて、妖気。」

さらに本が仕舞われ、本が絞り込まれていく。しかし、今までの調査でめぼしいキーワードはもう使い切ってしまった。だが、本は絞りきれしていない。何か足りない、と言ふことだった。

「んー…これだけじゃ絞り込めないか。当たりはつけられると思つたが。」

「何してるの白狼?」

一人で悩んでいると、フランがやってきた。

「おお、フラン。今起こつてる異変の情報を集めててな。あわよくば元凶の正体も知り

たかったのさ。でも、キーワードが足りないから、それも無理なんだけど。」

「ふーん。犯人は妖怪？人間？それとも別？」

フランはテキストに本を取り、パラパラと読み始める。

「恐らく妖怪。人間なら妖気は集めないからな。」

「そっか。じゃあ、宴会好きの妖怪ってことだね。さらに言えば、お酒好き？じゃあ鬼かもね。」

「鬼？」

フランがあつさりと元凶に当たりをつけてしまった。何故そう言えるのか、俺にはわからない。

「だって宴会で出される物って、割とアルコール度数高いんだもん。あんなの最後まで潰れずに飲めるのは鬼くらいだよ。」

「にやーるほどねえ。んじゃま、最初からやり直しますか。ほい。検索リセット。キーワード再設定。」

本がまた多く出現する。そして、キーワードを宣言することで本を絞り込む。

「キーワードは…酒。鬼。…宴。」

三つのキーワードから本が絞り込まれ、一冊の本のみになる。その本には、酒呑童子と書かれていた。パラパラとめくり、気になる名前を見つける。

「伊吹萃香…か。」

今の人たちには、酒吞童子といった方がわかりやすいかもしれない。まさかこっちにきているなんて思わなかったが、どうやらこいつが元凶で間違いなさそうだ。

さて、読もう。そう思い、本に手を出した、その瞬間。ツドオオンツ！と、館の外で音がした。

「どうやら読書はできないみたいだね？」

パタンと読んでいた本を閉じ、フランが小さく微笑む。

「…ああ。そのようだ。…はあ。全く。誰だよこんな時に！」

俺はスペカを持ち、本日5回目の挑戦者を倒すのだった。

無双するhope!後編

「ライダー100億ボルトバースト!」

黄色い雷が弾を打ち消す。そして少し向こうに飛ぶ。

「くっ!」

天狗の少女、射命丸文が横に飛び、躲す。

「全く!本当につきませんねえスペカ!」

「当然。今代の創世者舐めんな!」

「ちよつと取材するだけでしように!」

「申し訳ないが脚色どころかゴシックブツパな記者はNGだ!」

「失礼な!真実をありのままに書いていますとも!」

文と俺は、かれこれ五度めの激突となる。

「行くぜ!」

俺は使っていたフォーゼドライバーに40番のスイッチ、コズミックスイッチを押し、スイッチを押す。

(コズミック、オン。)

どこからともなく残りの36のスイッチが俺の元へ飛んで、光と共に一つになる。俺は、仮面ライダーフォーゼ、コズミックステイツに変身していた。

「皆の絆で、宇宙を掴む！」

「なんかヤバイ姿になりましたー!? っていうか、宇宙ってどこです？」

文の問いには答えず、俺はランチャースイッチを起動し、胸にあるスイッチの番号が描かれたものの中で、フリーズスイッチが描かれたところをタッチする。

(ランチャー、オン。フリーズ、オン。)

右足にランチャーモジュール、そこから発射されるミサイルが着弾し、あたりが凍る。文の足にかすり、身動きが取れなくなる。

「よし、行くぜ！抜いて、挿す!!」

(リミットブレイク！)

「ライダー、超銀河フィニッシュユ!!」

コズミックステイツの専用武器、バリズンソードにエネルギーを溜め、一回転ののちに放つ。その青き剣閃は、慌てふためく文に直撃し、これで6度目撃退と相成った。

「……ふういー。」

スペルを解除し、一息つく。すると、隣で声が出た。いや、話しかけられた。

「いやー、強いねお兄さん。次は私と戦らないかい？」

そう言つて来た少女の頭には角があり、手には瓢箪があつた。どうやらこいつがあの本に書かれていた、伊吹萃香、らしい。

「……まさか、そつちから出向いてくれるとはね。感謝感激雨あられだよ。」

「……ま、あの視線に気づいたくらいだし。多少興味は持つさ。」

「ふーん。ま、俺から聞きたいのはただ一つ。何の為にこんな異変を起こしたか、だ。」

と俺は問う。すると萃香は瓢箪の中身をあおり、笑つて答えた。

「目的かい？そんなの、私が宴をもつと長く楽しみたいからだよ？」

と、さらりと言つた。

「……は？なんだよ、それ。」

「酒が飲めない君からしたら不思議なのはわかるさ。でもね、これは別に害にはなっていないよ？君が多くの希望が潰されるのが嫌なのもわかっているさ。でも、誰の希望も潰していない。君がこの異変を終わらせる理由は無いはずだよ？」

「……はっ。おいおい。建前はもういいだろ？お前のその目は、そんなの関係ないって

顔してるぜ？戦いたくてしようがないんだろ？」

と、俺が挑戦的な目を向けると、萃香はもつと唇を歪め、「分かってるじゃないか。もうそろそろ我慢も限界。さあ、楽しませてくれ、創世者！」

そう言つて、萃香は妖気を解放した。

俺もまた、スペカを取り出し、霊力を解放するのだった。

大いなる鬼、小さきボトル。

「先手必勝！〔銃符 ニードルリボルバー〕！」

速攻で銃を”創り”、萃香に向けて発砲する。が、萃香は「のろいねえ。」

ひよい、と軽く躲す。

「つ…遠距離からは当たんねえか！だったら！〔雷符 ライトニングストライク〕、〔速符 スピードダガー〕、〔死符 七夜〕！」

体にスピードダガーを溶け込ませ、さらに雷を纏わせ、体を活性化させる。N A O U T Oの千鳥のようなものだ。

そして、手にはナイフ。その柄には、七ツ夜と書かれている。業物のナイフが”創られて”いた。

「シッ！」

七夜に付随する体術技術で立体的に動き回り、萃香を攪乱しつつナイフで斬りかかる。しかし。

「おっとーふふん。多少早くなったようだけど、まだまだ、甘いよー！」

萃香がナイフを白刃取り、カウンターでボツ！と出された拳に、俺は気付くものの、体反応しきれず、モロに腹に食らう。

「が…っ!?!」

「取り敢えず、飛んできな。」

萃香は腕に少し力を入れ、見た目以上に軽い俺の体を軽々と吹き飛ばした。

「ぐ、あああ!」

そのままの勢いでゴロゴロと地を転がり、数メートル先でようやく止まる。

「ふむ。人間にしては動きはいい。でも私には敵わない。」

「…な…に…?」

「何故かって? 簡単さ。私は鬼。でも君はただの人間。どう足掻いたって、肉体的には勝てない!」

萃香が得意そうに語る。ああ。分かってんだよ。

「はっ…」

「? 何がおかしいんだい?」

「いいや。あんたのその慢心が、今回の、あんたの敗因だ。」

俺の強がりになしか見えないその言葉に、萃香は腹を抱える。

「くっ…くはははは! いいねえ。いつみても、啖呵を切る人間を見るのは面白い! さあ、

希望よ！超えられるというならやってみろ！ただし、安易に超えられるとは思わぬことだ！」

俺は無言でスペカを”創り”、使う。丁度今、頭の中に流れ込んできたスペルを。

「【双造 ビルド】！」

俺は、新たなスペルを行使する。俺の手には新たなベルト、ビルドドライバー、そして、赤と青の小さなボトル。

まずはドライバーを腰に装着。

「何をする気だい？」

「まあ見てなつて。変身すつから。」

そして、二つのボトル、ラビットフルボトルと、タンクフルボトルを両手で一つずつ持ち、振る。そして、蓋を正面に向け、ドライバーにセット。

（ラビット！タンク！ベストマッチ！）

「…行くぜ。」

ドライバーの横にあるレバーをぐるぐると回す。ボトル内部の液体が上下に動き、ライダーとしての体を創造^{ビルド}していく。

「変身！」

レバーから手を離し、ファイティングポーズをとり両手をグーのまま下ろす。

(鋼のムーンサルト！ラビット、タンク！イエーイー！)

ビルドされたボディが俺の体を挟み、変身が完了する。右手左足にウサギの力、左手右足に戦車の力を宿した戦士、仮面ライダービルドに。

「な…なんだい、そのすがたは…!?!」

「さあ、実験を始めようか！」

俺は専用武器、ドリルクラッシュャーを手に、萃香へ駆けた。

(物理的に) 大いなる鬼

「いくぞー！」

左足に力を込め、飛び出す。左足に宿るウサギの力が、前へ、前へと進めてくれる。

「なっ!？」

「はっ!！」

専用武器、ドリルクラツシャーを振りかぶり、振るう。が、そこは鬼。軽くかわす。

「っ…なんつー反応スピードだよ…」

「ちよつと驚いたけど、これが人間と鬼の”埋まらない差”、ってやつさ!！」

そう言つて萃香は攻めに転じる。

ブオンツ!と振られる小さな腕。ゴツ!という音と共にガードする俺。仮面で見え

ないが、顔は苦しい。

「つてえ…馬鹿力かよ。」

「意外と遠慮なく言うなあ、君。」

言われつつ、距離を取り、フルボトルを振る。今度は水色と茶色だ。ドライバーに

セット。

(ゴリラ!ダイヤモンド!ベストマッチ!)

レバーを回し、フォームチェンジ。

「ビルドアップ!」

(Are you ready!?)

輝きのデストロイヤー!ゴリラモンド!イエイ

!)

剛腕を持つパワーファイター、ゴリラモンドフォーム。

「行くぞ!」

再び、インファイトに持ち込む。

互いの腕が交差し、互いの顔に衝撃を与える。

「がっ!?!」

「ぐう!」

ズサリ!とたたたらをふみ、それでもと立て直し、また殴り合う。

(このままじゃすぐに意識が持ってかれる!投げねえと!だが、んな技量は...!)

そこで、あのスペカのことには思い当たり、すぐに実行に移す。

「【技槍符 テクニクランス】!」

槍を体に溶け込ませる。すると、少し、動体視力が上がる。そして。

ガッ!と振るわれた腕を掴み、

「なっ!?!」

「でえいやあっ!」

投げた。鬼同士の喧嘩でも投げ技は使わないため、投げられた経験のない萃香はろくに受け身も取れず、肺から空気を絞り出す。

「かつはあ…」

「今だ!」

俺はすぐにラビットタンクに再び変身し、レバーを回す。

(Ready.: GO! ボルテック・フィニッシュ!)

ラビットの力で大きく跳躍。すると物理でよく見る矢印に記号などが現れ、萃香を拘束する。

「な…なんだこれ!う、動けな…」

「はああっ!」

俺は矢印の上に沿って段々と速度を増していき、ライダーキックをかました。

「きやあああ!?!」

「どうだ!?!」

これでなんとかなった、そう思った瞬間、ヌツ!と、大きな腕が現れ、

「へ?」

ばっちいいんっ！とデコピンで俺の体を吹き飛ばした。

「ぐわあああ!?!」

吹き飛ばされ、地を転がり、ダメージによりスペルが解ける。勿論変身も解除される。

「ぐ…一体、何が起こったんだ…?」

「あたしのスペルだよ。【鬼神 ミツシングパープルパワー】。」

声はなぜか、上から聞こえた。

おそるおそる上を見る。そこには。

「さあ、第二ラウンドといこうかい!?!」

かなり巨大化した萃香の姿があった。

「…やれやれ。俺はライダーが好きなものであつて、戦隊モノはあんまし見てないんだが

ねえ!」

言いつつ、俺はスペルを使い、飛翔した。

搦め手

「力剣符 パワーソード」【盾符 ドラゴンシールド】【翼符 ドラゴンウイング】！
スぺルカードの並列駆動。3枚同時使用で飛翔する。

「はああっ！」

萃香は大きい腕を振るい、俺を叩き落とそうとする。

「っ！っ！とー！」

俺は翼で飛んで躲し、一度地に立つ。すると萃香は俺目掛けて拳を落とす。

「！うひあっ！」

おどけたように躲し、萃香の腕に乗り、駆ける。

「おおっ!?!」

肩の辺りまで来た時に跳び、手に持つパワーソードで斬りかかる。

「おおおおおっ！」

剣の切っ先が萃香の体に触れるというその瞬間、バツ！と萃香の体が霧散した。

「なっ!?!」

俺は驚き、動きを止める。その隙に、萃香は姿を現し、

「ふんっ！」

その巨大な手を以って俺を吹き飛ばす。いかに俺が戦闘の技術や、センスを「創つて」、いたとしても、避けられないものはある。まあ、つまり何が言いたいかというところ、が、ああああああ!!」

モロにくらい、大きく吹っ飛んでいった。木々を何本かヘシ折り、ようやく止まる。肺から空気が搾り出され、咳き込む。

「ゴフツッ！ゲフツッ！あゝー！やりやがったなこなくそっ！」

俺は息を整え、再び飛び立つ。

「まだ来るかい！だったらまた落としてやるよ！」

向こうも再び拳を振るい、叩き落とそうとして来る。

「今度は、当たらない！」

紙一重の回避を繰り返しつつ、一枚のスペカを取り出し、使う。

「【希望　　ウィザード】！変身！」

（ハリケーン！プリーズ！フー！フー！フー！フー！フー！）

緑の魔法使い、ウィザード、ハリケーンスタイル。その力で、俺は再び飛翔する。

（どうする!?どんな物理攻撃でも霧散されたら意味がねえ！かと言って弾幕ぶつけようにもあいつ相手じゃ豆鉄砲だ！）

「考え事かい？だとしたら、馬鹿だね！」

萃香が拳を振るう。

「ツ！くっ！」

またまた紙一重の回避。しかし、このままではこつちが先に当たってしまうだろう。

（大体、霧散するってったって、何処までだ？もし、もしだが、粒子レベルまで行けるとしたら…）

であればと、俺は指輪を入れ替え、使う。

（シャバドウビタッチヘーンシーン！インファイニティー！プリーイズツ！ピースイフー
ドーボーザバビュードゴーンツ！）

空色の魔法陣が足元に光り、龍が舞う。俺の体を結晶が包み、舞っていた龍が降りて来て、結晶を砕く。そこには、燦然と輝く戦士、仮面ライダーウィザード、インファイニティースタイルが顕現していた。

「ツ！力が増した…本気ってわけかい！」

「ああ。こんな狂乱を終わらせるためにも、俺はお前に勝つ。来い、ドラゴン！」

俺が呼ぶのは、水晶の龍。龍は手で姿を変える。剣と斧が合わさった専用武器、アツクスカリバーが。

俺はすぐさまアツクスモードに切り替え、手形に左手をタッチさせる。

(ターンオン！ハイタッチ！シャイニングストライク！キ・ラ・キ・ラ！キ・ラ・キ・ラ！)

斧を振り回し、徐々に巨大化させる。

「なっ!?む、無駄だよ!」

俺は声に構わず、スペカを一枚、創り、使う。

「[双造　ビルド]!」

変身はしない。ただ必要なのは、敵であるスマッシュの成分を抜き取るための空のフルボトルのみ。それが手に来たと認識し、跳ぶ。

「はああああっ!だああああッ!」

萃香の遙か頭上より放たれた必殺技、ドラゴンシャイニングは、萃香に当たる、その瞬間に、萃香の体が霧散したことで外れた。が、これでいい。

「かかった!」

「なんだって!?!」

俺はすぐさまボトルのキャップ部分を正面に合わせ、萃香に向ける。すると、霧状の萃香がどンドン吸い込まれていく。

「な、く…」

抵抗むなしく、萃香は残らず吸い込まれてしまった。俺は急いでキャップ部分を正面

からずらし、閉じる。そして。

「へへへ……うおりやああああつ！」

カシヤカシヤカシヤカシヤツ！

「うわあああ!?!」

振った。振りに振った。フルボトルの本来の使い方っちゃあ、そうなのだが、この絵面は、割とシユールだった。

この後、萃香は降参し、この異変は幕を閉じた。たいていの人妖たちは気づきすらしなかったと言うのだから驚きだ。だがまあ、こうして幻想郷は再び平和を取り戻した。

……で、後日談……と言うか、今回のオチ。

「ふーん。で、また白狼は無茶したんだ。一人で。」

「う…いや、こればかりはしょうがなくね？あっちが仕掛けて来たんだし…」
「でも向こうは白狼がって言ってるよ？」

「うぐつ（もう覚えてないなんて言えねえ…ッ!）」

「しーろーう?」

「ひゃい!」

マジギレした、と思った俺は目を瞑る。フランは。

「!?え…」

「無事で、良かった。全く。言ってくれば私も行ったのに。」

俺を優しく包んでくれていた。

「……………悪い。」

「うん。反省してるようだし、許す!」

どうやら、姫の機嫌は取れたようだ。

少し前、白狼の元いた世界。つまりは、外の世界。

「んー、いないね、白狼。」

『こりやあマジかもなあ?』夜月、は、楽園、に行つたつてのは。』

「うん。じゃあ、行つて確かめてみよつか。僕の先祖、破界者?」

パリン…

こうして、外の世界には、誰もいなくなつた。

シーズン1ー最終章

創る者、壊す者へクリエイト・

デストロイ》

破界者く【追想】外の世界く

その子は、とてもじゃないが運動が苦手だった。

その子は、算数が得意だった。

その子は、月のような銀髪を持っていた。

その子は、底なしのお人好しだった。

その子は、なんでも”創れた”。

その子は、いじめられていた。

その子は、その子は、その子は。

その子は、世界に、世界中の人々に食い物にされていた。

僕は、運動が得意だった。

僕は、国語が得意だった。

僕は、太陽の黒点のように黒い髪を持っていた。

僕は、底なしの臆病者だった。

僕は、なんでも”壊せた”。

僕は、傍観していた。

僕は、僕は、僕は。

僕は、その子を食い物にした世界中の人々を”壊した”。

その日、11月10日。白狼の誕生日の一週間前に、僕は動いた。僕の一族、朝日家に伝わる能力、”壊す”、力で、まず両親を壊した。もともと邪魔だったし、白狼に敵意を向けていた。”壊す”には十分な理由だ。

学校には、風邪で休むと伝え、外国との距離を”壊し”、外国に向かった。ここにいる全員が、白狼を食い物にした。だから。

「出来ない白狼の代わりに、僕がやってあげるね?」
「クラッシュハンマー」
「壊人衝」!
「ッドンツ!とハンマーを地に叩きつける。これを、日本以外の全ての国に行った。響く悲鳴。怒号。でも、僕の心には響かない。全部、全部お前らが悪い。白狼を食い物にした、お前らが。」

11月15日。日本人以外の人種は、絶滅した。アメリカ、ロシア、北朝鮮は白狼に核を”創らせて、いた。

鉄道、ジャンボ機、橋。全ての国が、白狼の”創る”、力を目当てに動いていた。

日本に帰った僕は、日本の北から、”壊し”、続けた。そして、

11月17日。白狼の誕生日に、僕は白狼と僕以外の全ての人間の破壊に成功していた。

「おい黒兎くろと!みんなを知らないか?学校に来てないんだ。」

まだ真相に気づいていない白狼。早く気づかないかな?もう、最高の誕生日プレゼントを贈ってるのに。

「うん。知ってるよ。」

「本当か!?教えてくれ!」

「つていうか、テレビ見ないんだね、白狼。」

「え？だつて砂嵐だつたら？」

もう、鈍いなあ。

「あー、うん。そうだったね。だつて。僕が”壊した”、もん。」

と、あつさりバラす。まあ、仕方ないよね。

「……………は？お、おいおい。冗談言うなよ。黒兎は朝日家だけど、能力は持つてないつて……………」

「……………ああ、あれ嘘だよ？白狼にこの世界をプレゼントするためのね。」

白狼の顔が青ざめていく。

「な……………じゃあ、まさか……………ほんとに……………」

「うん。一週間前からやってたんだ。だから、間に合つてよかった。」

僕が笑つと、白狼は怒つて、

「黒兎！どうしてこんなことを!？」

「そんなの簡単さ。君のためだよ。『誰も君を傷つけない世界』。それを叶えたかったのや。」

「俺の傷つかない世界……………？そんなののためにお前は……………」

白狼は拳を握つて震わせる。どうして怒るんだろう。僕は、君のために行動したの

に。

「…許さねえ。テメエはここで、殺してやる。」

「アハツ。いいね。やっと僕を殺してくれるね。」

いつか交わした、白狼が僕を殺さざるを得なくなった時には、僕を殺す、という約束。

「……【パワーソード】。」

白狼は、これから何度も使うことになる剣で、僕を攻撃する。あつさりど、その剣は僕の胸に突き刺さった。

「っ……クソが。」

空は曇り、雨が降る。僕は力尽き、ドサリと倒れる。傷口から、血が溢れてくる。体温とともに、血も抜けていく。

白狼は剣を消し、どこかへ行ってしまった。…うん。これでいい。

『本当に？』

うん。これが僕の望んだことだ。

『…ハ。気に入った。力をくれてやるよ。この破^{ザ・デストロイヤー}界者がな。お前の名は？』

朝日…黒兎。

こうして、僕は正式に今代の破界者となり、のちに白狼もまた、日本とは異なる地で、今代の創世者となる。

まさに運命だね。

『……………ぎ、おい子兔!どうした?』

「んーん。なんでもない。ちよつと昔を思い出したただけだよ。ザデスさん。」

約束は巻き戻った。じゃあもう一回果たさせないと。僕は、そのために。

「さあ、幻想郷に行ってみようか、ザデスさん。」

『おう。世界を、お前が続べろ。子兔。』

真の対極、あるいは裏。

紅き館、紅魔館。秋という過ごしやすい季節になろうと、ここは変わらずの紅さを誇っていた。まあ、年中無休でそんなのはやっているのだが。

「はあ。ま、平和なのはいいことなだけだな。」

「どうしたの、白狼?」

その一室、俺の部屋にて、フランは俺の膝の上に座り、本を読んでいた。

「…いや。なんでもねーよ。ただ、今日はあの日だったかと、思ったただけ。」

「あの日……?」

今日は、11月10日。アイツが、世界を”壊し”、始めた日だ。あの一週間の間も、俺は休むことなく、モノを”創り”、続けていた。家から先祖が”創っていた”、靈力回復薬を学校に持ってきて、片っ端から飲んで、”創って”、を繰り返していた。だから、気づかなかった。日本以外の国が、15日の時点で滅んでいたなんて。そしてそれが、(あの黒兎のせいだなんてな。)

「……………ろう、白狼!」

「…わ、悪い、ぼーっとしてた。」

「…大丈夫？ここのところずっとそんな感じじゃない？それに、あの日って…白狼、随分と隠し事、多いんじゃない？」

「…ああ。そう、だな。悪い。」

「別に謝って欲しいわけじゃないんだけどなあ…」

と言いながら、フランは俺の膝から降りて、向かい合う。

「私達、相思相愛なんだから。相談くらい、乗るよ？」

と、俺の目を真っ直ぐ見て言うんだから、照れて視線を逸らしてしまう俺。いかに希望といえど、経験してないことはどうしようもない。

「いや、大丈夫だ、問題ない。」

「そのネタ教えたの白狼だし。それ、ほとんど大丈夫じゃない時に使うんだよね？」

「うっ…」

いつもはネタを覚えるの遅いのに、これだけは直ぐ覚えたのだ。…そんなに使った覚えはないけどなあ。エルシヤダ○ネタ。

「さあ、キリキリ吐きなさい！一体何を隠してるの？」

フランに、悪意はない。だって、知らないのだから。俺が過去に一度、人を殺していることなど。

「いや、マジでなんでもないから、うん。」

と、どうにかしてフランを引きはがせないか、そう思った時。ピシリ、と何かが”壊れる”、音がした。

「ッ!?!」

俺とフランは驚き、スペカを反射的に取り出す。

その音はだんだんと近くなり。

パライイインツ!と、ドアを”壊した”。

「え…私と…同じ…?」

「な…どうして、お前が…?」

その、犯人は。太陽の黒点のように黒い髪。そして、兎のように赤い目。少し小さな体。そして、手には武器でありそうな鉄槌。

「やあ、久しぶりだね、白狼?」

「なんで…なんでテメエがここにいる!?!」

そいつの、名前は。

「朝日…黒兎!」

「どうして僕がここににいるのか、か。まあ、簡単さ。僕はあの世界で最後の人間だったからね。もう誰も僕を覚えていない人間なんていない。だから、幻想入りしたのさ。」

「な…」

そんなはずはない、とは言えなかった。俺は八雲紫に連れてこられたという特殊な状況だったが、本来は皆に忘れ去られ、幻想入りする。忘れ去られる、ということは、誰もそいつを覚えていないということ。故に。

「そう。来れないわけではないよね？」

「つ……」

「アナタ…誰？白狼の知り合い？」

と、フランが黒兎に問う。

「知り合い？そんな他人に近い存在じゃないよ僕は。親友さ。僕と白狼は。」

「ふうん。当の本人はそんな顔してなさそうだけど？どうなの白狼？」

フランはあくまで、事実確認がしたいらしい。

「…まあ、友達だとは思ってる。」

「…アハッ。相変わらずの照れ屋さんなんだね白狼は。」

俺に続けた黒兎の言葉に、フランは顔を顰め、

「アナタ…異常よ？何をどうしたら今の白狼が照れてるように見えるのかしら？」

と毒を吐く。黒兎は、目だけギョロリとフランを見て、

「白狼、誰こいつ？白狼のこと知ったように言うけど？」

「アナタこそ。親友なんて、嘘じゃない。」

バチリ、と視線同士での火花が散った音がした気がする。

「へえ。黙ってるならそのままにしとこうと思っただけど、予定変更。”壊して、やる。”

「アナタも”壊せる、”の？じゃあ、”壊さないと、”。」

「まったく。表に出てからやれ。ってか、黒兎。俺の目の前で…」

俺は靈力を解放し、パワーソードを”創り”、黒兔に向ける。

「もう2度と誰かを”壊せる”、と思うなよ？」

「…アハツ。やつぱり、白狼も”選ばれた”、んだね。先祖さんに。」

「ツ!？」

黒兔が俺たちが驚いたのを見て笑う。

「アハツ。僕が知らないとも思った？僕も、”選ばれた”、っていうのにさ。」

「な…じゃあ、お前、あの時に…？」

俺の行き着いた推理を、黒兔は。

「うん。多分白狼の考えてる通りだよ。僕はあの時に、僕の先祖、ザ・テストロイヤー破界者にね。」

「白狼と、同じ…！」

「そうだよ？だから、僕と白狼の間に君が入る余地は無い。僕は白狼のことならなんでも知っているよ？身長は170丁度で、体重は52.5。視力は裸眼だとD。Dで、メガネをかけるとB。C。誕生日は今から一週間後の11月17日。好きな色は青で、好きな動物は猫。嫌いなものはバッドエンドと、誰かが理不尽な死を迎えること。他にも色々、ね。」

。プライバシーのPの字すらない完璧なプロファイリングだ。

「気持ち悪いわ。アナタ。」

「でも、君はここまで知らない。白狼愛が足りないよ。」

「……はあ。俺は先に外に出る。約束を果たしたいなら来いよ黒兎。フランも、手出すな。」

「え？」

俺は二人に構うことなく外に出る。二人もとりあえず言い争いをやめ、ついてくる。

【ザ・クリエイティブ・アイズ創世眼】。【クリエイト・ゾーン創・空】。

俺は能力の極限、創世眼を使用し、空間を”創る”；。普通に戦ったら、色々なものが壊れて、；。しまう。それは避けなければならない。

「白狼？なんで空間なんか……」

「フラン。こいつは君と違って、”壊す”；時に”壊したい”；モノに触れる必要がある。」

大きな違いがあるとすればそこだ。だが、フランは概念や、空間、時間といった、目に見えないモノを”壊す”、のは苦手だろ？だが、奴は違う。俺がこの眼を使うとそういうあやふやなモノも”創れる”、ということとは、同じく”選ばれた”、アイツは同じものを壊せるんだ。」

「だったら、こんなのを”創った”、って…」

「いいや。この空間に”壊れない”、というルールを”創った”、。」

それに。アイツは俺のいうことは聞くからな。」

と、その辺で。

「相談は終わったかな？白狼。」

「ああ。あの時の続きだ。そして。これで終わりにする。」

「アハッ。いいよ、その眼。鋭くて、冷やかか。あ、そうそう。あの時の約束。一つ追加したいんだ。」

「……なんだ？」

「……へ勝って、生き残った方が、”世界”、を統べる。」

その一言を聞いた瞬間、一瞬、思考が止まった。どうして、それを知っているのか。それは、夜月家にしか、伝わっていない筈なのに。

「君の先祖さんが言ったのかな？でも。抜け道はいくらでもあるんだよ？いかに

創世者といつても、当時は人間。不完全な存在。なんでもできるわけじゃない。」

「……どういうこと?」世界、を統べるって。白狼?」

「……」世界、つてのは、”創造、と”破壊、から成り立っている。何をするにしても、何が起こるにしても、万物は何かを”壊して、、何かを”創る、。つまり、その二つを司る眼を手に入れた、そいつは。”世界、を統べているに等しい。」

「うんうん。その通り。よく調べてるね、白狼。」

「お前……!」

「さあ、やろうか、白狼。」

黒兎は鉄槌を取り出し、構える。俺も、パワーソードを構える。

「僕は、君を”壊して、、世界を”創り、変える!」

因縁を終わらせる為の戦いが、始まった。

知らなかったこと about 白狼

「でええい！」

俺はパワーソードを振りかぶり、振り下ろす。

「おっと。ハハッ！」

ひよいと躲し、ハンマーを振るってくる黒兎。

「ツ！つぶね！「リボルバー」！」

スペカを使わずに銃を何挺も創り、発砲させる。

「アハッ！「クラッシュハンマー」！」

黒兎の声に呼応して、ハンマーが肥大化。前にドスンと壁のように叩きつけ、弾を防ぎ、ハンマーに当たった弾は”壊された”。

「チイッ！（あの時よりも格段に強くなつてやがる！能力の練度！使い方！どれもレベルアップしてやがる！）」

そうなれば、迂闊に近接攻撃はできない。うっかりハンマーに触れば、そのまま”壊され”、かねないからだ。

「アハッ。だから遠距離戦……でもねえ？それじゃあ僕は倒せない！」

「…だよなあ。だから、こうするしかないッ！」「絶力炎破」ッ！」
 「ッ!?」「クラッシユ…ぐあッ!?」

黒兎が「壊そう、とする前にダメージが与えられるものであれば通る。まあ、それに応じた技と、それを発動させる霊力があるのだが。」

「く…やってくれるね!」「クラッシユハンマー!」

黒兎が叫ぶと、ハンマーが呼応し、肥大化する。

「いいッ!?」「く、創クリエイト・チエーン・鎖」ッ!?」

ガシインッ!と、振り下ろされる前にその腕を鎖で拘束し、

「スピードダガー」 in::my body!」

身体に速度を上昇させる短剣を溶け込ませ、すぐに近づく。そして、

「【絶力…剛炎斬】っ!」

さらに強化された”力”, をぶつける。

「アハッ!」クラッシユ,。」

一度ニヤリと笑った後、心底怖い顔で、そう言った。

「なっ!?!」

ぱきり、と鎖が”壊れた,;”。それと同時に、黒兎が自由になる。そして、ガシッと黒兎が剣を捕まえる。炎が、掴まれた瞬間に消えた。いや、”壊された,;”。そしてすぐに、

パリン、とパワーソードも”壊される”。

「アハツ…あはははは！バカだなあ白狼は。今までののはただの遊びさ。なんでも”壊せる”、この僕が、君の”創った”ものを瞬時に壊せないとでも？」

「し、白狼！」

フランが声をあげるも、どうしようもない。俺は、黒兎に近づきすぎた。

「【クラツシユハンマー】…これで、世界は…」

（…）まで、か。…ま、よくやったほうじゃないかな。だって、俺、本当はそんなに強くなんてなくて…）

黒兎のハンマーが、俺の体に当たる…前。

パリン…何が、壊れる音がした。

「くはは。なんだ？その無様な姿は？フランの希望とかのたまつた割には、随分とあつけない諦めだが…」

ぎゆう、と握りしめたその右手。ばさりと広がった、普通なら飛べそうもない翼。紅く、妖しい光を帯びた瞳。俺の横に飛んできたのは、フランの心の中に巣食っていた、狂気だった。

「え…フラン？じゃあ、今”壊れた”のは…」

と、黒兎を見る。そこには、ハンマーを握っていた右手、いや、右腕を抑える黒兎の

姿があった。

「く……き、吸血鬼……キサマア！」

「フン。知らなかったようだから教えてやる。白狼を^{コイツ}壊して、いいのは、私だけだ。覚えておけ。」

と、フランは得意げに言った。

「……ふ、フラン……どうして？」

「勘違いするな。私はただ、お前が私以外の誰かに”壊される、”のが癪に触っただけだ。他意はない。いいな。」

「………ああ。わかってるよ。」

「………ふん。ならいい。とつとと奴を倒して、世界とやらを統べる。その後にお前を”壊して、”、私が統べるというのも一興だ。」

と、そう言つてフランは元に戻る。

「っフラン！大丈夫か？」

「………つうん。白狼こそ……何もされなかった？」

「ああ。最高の手助けをしてくれたよ。」

「そう。良かった。」

一度地に立ち、フランを下ろす。

「助かった。礼でも伝えといてくれ。」

そう、一言だけ述べて、俺は再び黒兎の元へ飛び立つ。

「ぐ……があ……白狼……ぼくは、君に勝つ。勝たなきゃいけない!」

「……なんですよ。どうして、そこまでこだわる?」

「!アハツ。そういうえば、話してなかったつけ。僕が君の力を手に入れて、世界を統べる理由。簡単さ。世界を”創り、直すんだ。君も含めてね。ただし。この世界では能力者は現れない。朝日家だからって、夜月家だから、なんていうこともない。平等な世界さ。」

「な……そんな世界を”創る、意味があるのか!」

「ああ。だって、これは君のためだ。白狼。」

その、黒兎の言葉に、俺は衝撃を受ける。

「俺の、ため……!」

「そう。全て、全て君のためだ。君を初めて見たときから。君がいじめられていたのを知ったときから、僕は君のたけに行動すると決めていた。」

わけが、わからなかった。あの世界の全ての人間を”壊した、ことも、俺の為?

「そう。君を守る為さ。君ほどの男が、気づいてないわけないだろう?君は世界の食い物にされていた。あんなにひどい目にあっていたのに、君が少し本当のことをバラした

だけであの始末だ。あんな世界に、価値はないよ。だから”壊した”、。そうすれば、君は自由だからね。まあ、まさかこつちにきてるなんて、思わなかったけど。」

つまり。黒兎は、世界の食い物にされていた俺を、見ていられたかった。だから、こうして、世界を”壊した”、。そういう、ことだった。言葉の上では、理解できる。だが。だがっ！

「ふざけるなよ！誰も、誰もんなこと望んじやいねえんだよ！誰が言ったんだ!? ああ!?俺が酷い目にあつてて！苦しいから！辛いから世界の全てを”壊せ”、なんて！誰が言うかよ!？」

「君は、望んでなかったのかい?」

「つたりめーだ！馬鹿!」

俺ごときのために、世界が減んだ。そんな事実を、叩きつけられて。

冷静でいられるほど、俺は冷酷ではない。

「そっか。知らなかったよ。まさか君が、あの世界を守りたかつたなんて。」

黒兎は手を広げて。

「…テメエはやっぱ危険だ。ここで殺す。今度は幻想郷、なんて、シヤレになんねえからな。」

俺は再びパワーソードを”創り”、構える。

第2ラウンド、開始。

黒兎チエンジ・トウワイヌ

「くらえ！【絶力剛炎斬】！」

「クラツシユ！」

剣と鉄槌が交差し、剣が壊れる。

「チイツ！【パワーソード】！」

「アハッ！アハハッ！アハハハハッ！」

黒兎の笑いは大きくなり、どんどん正気には見えなくなってくる。

「黒兎オオオオ！」

「はははッ！楽しい！楽しいよ白狼ッ！」

創世眼で“不壊”の性質を付与し、パワーソードを振るう。

右上から左下へと振り下ろす。

「アハッ！」

黒兎はひよいとかわし、ハンマーで反撃してくる。

「アハッ…アハハッ、アハハハハッ！くっははははははははははッ！」

黒兎は止まらない。鉄槌を振るい続ける。こっちは限界が近いのに！

「【絶力…轟炎斬】 ツ！」

剛より強い轟を使う。靈力に気なんて使ってられない。全力全壊だ。でなければコイツには勝てない。

「くらえ！」

上から右下へ振り下ろす、と見せ掛けて左へ振る。

「ツ!?ぐあつ!?!」

パワーソードは黒兎の体を右肩から腰にかけて切り裂いた。裂け目からは血が流れていた。

「ぐ…あ…はは。斬られちゃった。白狼、やっぱり本当は強かったんだね。」

「……そうだな。俺も最近、フランに気付かされたよ。」

「……また、あの子かい?白狼、この戦い中ずっとだよね。」

黒兎の目が、フランを見る。

「……………」

そして、黒兎の動きが止まる。

「……………」

警戒はそのままに、俺は黒兎の様子を見る。

「うん。そうだね。その方がいいかな、ザデスさん。」

そうして黒兎は、呼んだ。絶対なる破界者を。

元々赤い目はさらに赤く染まり、黒兎の体を濃密な霊力が覆う。

『つく。くは、くははははははは！』

「!?く、黒兎……なのか……?」

『『いいや?俺は子兎じゃねえよ。』』

明らかに違う口調。そして仕草。それによつて理解する。こいつは、黒兎ではない。

「!白狼!気をつけて!そいつは……何か違う!さつきまでの黒兎とは、根本的なものが!」

「……ああ。わかるぜフラン。こいつは……黒兎の……朝日家の祖先……」

『『大正解。俺が、お前の祖先、創世者ザ・クリエイターと対と成す者。破界者ザ・デストロイヤーだ。ま、短い間だろう

が、よろしくな、子狼こいぬ。』』

そう言つて、破界者は、両手を広げ、悪い笑みを浮かべた。

「こつからは俺が相手だ。子狼。」

「…」

破界者は鉄槌を構え、俺もパワーソードを構える。

地を、蹴る。右足を一步。しっかりと踏みしめ、剣を振りかぶり、思いつき振り下ろす。ガキンツ！火花を散らし、弾き合う。

「『壊れねえ、』な。ハツ。なあるほど。」創った、？ルールを。」

「つー！（バレた…）」

しかしまあ、バレて当然だと思ひ直す。相手は俺の先祖、創世者ザ・クリエーターと同じ高みに存在する奴である。ならば、すぐにでもこつちの弄した策や、ルールなど、見破つてしまおう。

（つまり、次にアレと打ち合えば、ルールが”壊される、”ツー！）

「『ルールを”壊され、”たらまずい…そう考えるよな。』」

「ツー！」

破界者は目にも留まらぬスピードで接近し、ハンマーを振り下ろしてきた。

「くっ！【ドラゴンシールド】！」

「『甘えんだよ！』」

破界者は俺が盾を”創った、”瞬間にハンマーを止め、後ろ蹴りで盾ごと俺を吹き飛ば

した。

「ぐあつ!？」

ドザアツ!と地に叩きつけられた俺は咳き込み、上にいる破界者を見据える。

「『おいおい。もう終わりかよ!チツ:つまらん。おい、子狼。アイツを出せよ。テメエじゃ役不足だ。』

破界者は心底つまらなそうにそう言った。その、言葉は。

「————ツ!」

俺の中の火を、炎のように燃えたぎらせるのには十分だった。

「……………めたんだ。」

「『あ?』」

「誓ったんだ。俺は自由に生きるつて。過去に囚われることも、生まれた家に囚われることもせず、自分の思うままに生きるつて!それを!その誓いを!お前に”壊されて、たまるか!!終わらせてやる!もういない創世者とお前の宿命も、俺自身と黒兎の約束も!今、ここで!」

「『……………そうか。先に逝きやがったか、バカ兄が。……………ハツ。上等!』」

俺は切れていた創世眼を再び起動し、体に残っている霊力全てを呼び起こす。破界者も、同じように力を解放する。もう割と周りはポロポロだ。そろそろ紫が異変だとか

言つて止めてきそうだから、早めに終わらせないと。

「アップグレード強化」、『パワーフレイムソード』。」

剣に靈力を流し込み、赤き炎を灯す。

「『クラツシユハンマー』。【絶壊衝】。』」

向こうも、ハンマーに靈力を流し込み、肥大化させていた。

「『いくぞ子狼。これでジ・エンドだ。』」

「……ファイナーレだ。」

同時に距離を詰め、互いの獲物をぶつける。

「『馬鹿正直に打ち込んだなバカめ！』」

パリン、と嫌な音がする。おそらくルールが”壊された”、音だろう。

「クリエイト・ルール創・法」ツッ！」

新たに”不壊”、のルールを”創る”、。しかし今度は一瞬でパリン…

「なっ!?!」

「『はははははは！そう何度も同じモンでどうにかなるわけねえだろ！もらつたあ！』」

そうして、今度はパワーフレイムソード本体が”壊され”、……るといふことはなく。

ギリギリギリ……

「『な…なぜ”壊れない”、!?!確かにルールは”壊した”、はずっ!』」

「ああ。確かに”壊された”，さ。ルールは、な。」

「『!?まさか…』」

俺はニヤリと笑う。

「ああ。概念だけで”壊される”，なら、そうならないように物質でどうにかすればいい。どつかの聖杯戦争みたいな、宝具のようにな！」

「『な…ならば物質を”壊す”，モードに……』」

「遅いッ！【絶力…轟魔炎斬】ッ！」

奴が力を一瞬緩めた瞬間、一気に靈力を解き放ち、態勢を崩し、剣の炎を紫色に変化させ、”魔”，の性質を付与した斬撃、”絶力轟魔炎斬”，で、破界者の右肩から腰にかけてを切った。

「『ぐわあああああああ！』」

破界者はその場に崩れ落ちた。ハンマーもすでに消え去っている。

「やった！やったよ！白狼が勝った！」

後ろで見ていたフランが喜びを露わにする。まあ、ギリギリのまさに死闘だったし。

「『ぐ……俺たちの負けだ。子狼。とつとつとどめを刺せ。』」

どかりと座り、目を閉じる破界者。…いつの時代の武士だこいつは…

「……嫌だね。」

「『……………は？』」

俺の言葉に、破界者はポカンとした顔をする。まあ、見た目黒兎なんだが。

「嫌だ、断ると言っただ。言っただろ？俺はもう宿命とか、うんざりなんだよ。縛んな。邪魔くせえ。」

「『ふ、ふざけるな！そんな事が認められるとでも思っているのか!?!』」

破界者は犬歯をむき出しにして怒っていた。

「だから、認めるとかそういう話じゃないっての。…………ああもうめんどいなあ。俺は、誰も殺したかねえんだよ。」

と、簡潔に言った。破界者はもう何も言わなかった。ただ、その代わりなのか、

「でもね、それじゃあ、僕は納得いかないんだよね。」

「!!」

今度は、黒兎が出てきた。

「ねえ、白狼。本当に、僕を殺したくない？」

「…………たりめーだろうが。俺とお前は…………その…親友なんだから。」

少し、顔を背けて言う。これでもし違うとか言われたら物理的に穴”創って、”入るまである。

「アハッ。嬉しいなあ。うん。僕もそう思ってる。…そっか、できない、か。じゃあ、仕

方ない。」

「え？」

妙に物分かりがいい。何故だろうか。

「じゃあさ、白狼。最後に、その剣、構えて見てよ。」

「あ？なんで？」

「いや、これから外の世界あつちに帰るからさ、最後に君の勇姿を写真にでも、と思つてね。」

……少し怪しいけど、黒兎の頼みだし、と、俺は剣を中段に構える。足もすっかり広げて。

「……うん。やっぱり、白狼はかっこいいな。」

黒兎は何か小さく呟いて、

ザシユツ……………

「……………は……………」

とん、と地を蹴り、自分の心臓まで届くぐらい深く、黒兎は剣に身を貫かれた。スペルカードなしで”創った”、この剣は、殺傷能力がある。もちろん戦いの最中だって、絶対に殺めることのないように気を配っていた。だが、その努力は無に帰す事になる。

「ゴブ……………」

黒兎は血を吐き、そして、にへら、とわらった。

「おい……………おいッ！テメエッ！何やってんだよ!？」

直ぐに体を横たわらせ、厚い布を”創り”、血が出てくる場所を抑え、止血を試みる。が、血は止まらない。

「あ……………は。前に…言わなかったっけ。白狼のできないことは……………僕がやるからって……………」

もちろん記憶に残っている。互いに交わした約束だ。思えば、約束事の多い関係だったと思う。

「だからって……………だからってこれはねえだろ!?!なんで!？」

「そんなに……怒らないですよ。僕だって、死ぬのは怖いんだよ？」

「だったら自分から死にに来るようなことすんじやねえよ！」

俺の声も、顔も、涙でグツシャグシャだった。

「でもね、仕方ないんだよ。白狼は、世界を統べるんだから。」

「んなもんいらねえよ！んなもんの為に……お前は……破界者は！」

「泣かないですよ。僕は、君の中で生き続けるんだからさ。君の中での僕が、どういう存在なのか、知る事ができないのが、少し残念だけど……」

「おい……？おい！クツソ！生まれ……生まれ……生まれ……生まれ……だよオーツ！」

「……もう、何も見えなくなつてきちゃった。……近くににいるかわかんないから、もう、い
いか。」

そう言つて、黒兎は、今までのどこか嘘を含んでいたような笑みをやめ、安らかそうな顔をして。歌うように、囀るように言った。

「白狼。夜月白狼。静かな、決して自分からは輝こうとしない白い月。僕は、そんな君に憧れた。近くにいたいと思つた。君は気づいてなかっただろうけど、僕はずっとそう思つてた。僕が、朝日黒兎と名乗る前から。」

「!!やっぱり……」

小さく、俺の喉から声が漏れる。だけど、もう、黒兎の耳には聞こえていなかった。

「僕の、前の名前は朝日……狂華。君とは別のクラスで、生活していた。」

声は、だんだんと弱々しくなっていく。

「あは、冷たい。これが死ぬ直前、なのかな。僕が”壊して、”きた人たちは、みんなこれを味わったのかな。……怖いなあ。隣に、白狼がいてくれたら、こんな冷たさ、なんてことないのに。ああでも。いたら、こんなこと言えないよね。」

そうして、黒兎は。

「僕……ううん。私、朝日狂華は。夜月白狼のことを、愛しています。」

……

……

……

黒兎は。いいや、狂華は。こうして、死んだ。奇しくも狂華の体を貫いたのは、外の世界の時と同じ、パワーソードであった。

白狼と未来と愛する事

黒兎の処理は、フランが”壊して、くれた。

その際、自分の中に何か力が流れ込んでくる。これが、朝日家秘伝の、”壊す、能力。
「…ほんと、いらねえってのに。」

その言葉は、誰に向けたものか。答えるものはおらず、もうそろそろで、夜が明けそうだった。

「…白狼、紅魔館に戻ろう？」

「…ああ。」

取り敢えず、俺たちは紅魔館の中に帰った。

「…白狼。もう、終わったんだよね？」

フランの、労わるような問いに、俺は。

「……………ああ。終わった。俺の、俺の世界のいざごきは、これで終わりだ。……………望むべくもねえ、ハッピーエンドだ。」

「……………そっか。」

「ああ。そうだ。」

嘘だ。こんなのは違う。でも、言うしかない。元凶は取り除いた。俺とフランは生き残った。これが正解だと。これが、ハッピーエンドなんだと。でなければ、終わりがなくなってしまう。

「……………」

部屋に着いた。ドアを開け、ベッドに倒れこむ。目を腕で覆い、ほう、と息をつく。脱力し、意識を睡魔に委ね……………

「白狼の、嘘つき。」

「っ!？」

言われた言葉に驚き、飛び起きる。

と同時に、

「とうっ!」

と肩を押され、再びベッドに倒される。吸血鬼の力でやられているため、反応すらできずに倒される。

「へぶっ!?!な、なにすんむっ!?!」

少し体を起こし、文句を言おうとした、その時。……その、なんだ。

「~~~~~っ!?!」

「んむ、ちゅ、ん〜」

唇を、塞がれていた。それも、これまでの指で当てて止めるのではなく、フラン自身の唇で。……もちろんキスだった。

「んー!?!んー!?!ふはっ!?!ふ、フラン!?!」

「はあ…はあ…わ、私に嘘をついた罰だよ!」

フランはモロに顔を赤くさせ、言った。俺も勿論頭が茹で上がっているため、何が何だか分からない。

「はあ?ちよ、わけわかんないって!」

「忘れたの?白狼、約束したよね?辛い事、悲しいことがあつた時、何もかも受け入れて進もうとしなくていいって。弱音を吐いたっていいって。創世者ザ・クリエイターが消えちゃった時、

そう言ったよね?」

忘れるわけがない。アレは、俺の過ち。俺の背負うべき咎だ。

「でも……だつてさあ……」

俺は自然と握り拳をさらに握りしめ、涙をこらえる。強くなると決めた。誰の前でも倒れず、挫けることのない希望になると。

「私は白狼の恋人。愚痴だつて、弱音だつていくらでも受け止めてあげる。いざとなつたら、私が”壊して”あげる。無理をして、無茶をして、嘘をついてまで私たちに笑いかけていていいの。だつて、無理してるの、わかつたらさ、」

フランは、俺の猫背によってぐによりと曲がっている背中を抱き寄せ、

「そつちの方が、辛いよ。白狼だつて、それがわかる私たちだつて。」

「うう……うわああああああ！」

そんなことを言われて、耐えていた涙が流れないはずがなかった。フランの背中を抱き寄せ、泣き続けた。

「嫌だった！辛かった！友達に、親友に剣を向けていたことが！嬉しいわけないだろ！！外の世界でだつて、あいつの胸に剣を刺した時、こつちの胸も痛かった！あいつが笑つて、死んでいくのを見て、楽しいわけないだろ！なんで……なんで俺なんだよ……」

無様だった。どうしようもないほどに見苦しかった。けれどフランは絶対に、そんな俺を咎めることはしなかった。

「…うん。白狼はいつだって優しくて、責任感が強くて。ちよつと脆くて。でもみんなのために頑張ってる。辛いよね。だから、休んだっていいのよ。私たちはいつまでも白狼に守ってもらうほど、弱くはない。」

「!!」

フランの言葉に、俺はハツとする。何をやってたんだろうか。そんなこと、とつくの昔にわかってなきやいけないことなのに。

「……わるい。もう目エ、覚めたわ。」

「今度こそ、ちゃんと頼れそう?」

「……正直、あんまし頼りたくないんだ。自分への評価は勿論低いけど、他人から足手まとい、とは思われたくないから。」

「……まあ、許す。でも!無理しないで、きちんと頼ること!白狼は外あつの世界ちの時とはちがって、もう一人じゃないんだから。」

「……」

いつの間にか倒れていた俺の顔の両隣に手を置き、フランは俺をきつちりと見つめて言った。で、俺は。

「…じゃあ、一つ、安心をくれよ。」

「え?それってどういう……んっ!」

今更、遠慮なんてない。……少なくとも、今、この瞬間だけは。いつもなら、恥ずかしがってできるわけないけど。

たまには俺から、仕掛けてみるのもいいだろう。

「ぷはっ……も、もうっ！いきなりなんてひどいよ！もっとう……雰囲気とか！」

「仕方ねえだろ。スキだらけだったんだから。」

「え？」

俺がそう言うと、フランは一瞬固まり、その隙に俺はベッドから抜け出し、レミリアたちの待つ食堂へ向かう。

心の中で、実はダブルミーニングだ、と言っておいて。そう。LOVE的な意味のスキと、隙。俺の心の中がスキだらけだったのと、フランの様子 gaps だらけだった、ということがある。それが今わかったのか、俺の部屋であるはずのところから、大きな叫び声が聞こえた。

それがまた、面白くて、俺は腹を抱える。笑いすぎて涙が出る。

その後、フランが猛スピードで追いつき、背中に頭突きを食らわせる。

嗚呼、なんと素晴らしきこの世界。そんな、柄にもないことを思い、俺はその日をいつもと同じように過ごした。

希望は損なわれない。

希望は折れない。

希望は負けない。

希望は、希望は、希望は。

希望は、明日も明後日も変わらず輝き続ける。

シーズン2 記憶を追う者《メモリーズ・チエイ

サー》プロローグ

新たな力、あるいは祝福。

紅き館、紅魔館。そこにある一室。そこで俺は眠っていた。

「すう…すう…」

規則正しく寝息を立てる俺のすぐ近くに、

「…白狼…」

フランがいた。俺の手を握り、椅子に腰掛けていた。

もうそろそろ朝日が昇る。今までゆっくりと生活を朝型にしていったため、普通の人間のような感じになっていた。いやまあ、吸血鬼の性質はもちろんあるのだが。

今日はたまたま、フランが早起きだったのである。

で、フランは時折、俺の寝顔を覗き込み、微笑む。

黒兎……狂華との戦いから、一週間後のことであつた。

「ん……」

ゆつくりと瞼を開け、体を起こす。

「あ、起きた？」

すぐ隣で、よく聞く声がする。

「……あー、うん。起きたよ、フラン。おあよ。」

寝起きのため、あくびまじりに挨拶する俺を見たフランが、笑って返す。

「うん。おはよう、白狼。」

今まで、幾度となく繰り返したやりとり。

このやりとりで俺は日常に戻ったことを再確認する。

俺は紅魔館屋上にて、新たな力を試していた。

「んーと、左眼に【創符ザ・クリエティブ・アイズ創世眼】。んで、右眼に【壊符ザ・デストロイ・アイズ破界眼】。そー

しーてー？ミックス混合！

【世界ザ・ワールド・アイズ世界眼】！」

その時、俺の目の前の世界は、まるで、違う、世界、に…
そこで、俺の意識は途切れた。

ふと、目が覚めた。ガバリと体を起こすと、

「!!白狼!」

「!?げふっ!」

土手っ腹にフランの突進をくらい、再びベッドに叩きつけられた。

「ほんつとに、心配したんだよ!」

「あ、ああ…悪い…だから、ちよつと、タンマ…」
朝飯が出ていきそうだ。

……………で。

「なにを見たの？」

フランはとても真剣な顔で聞いてきた。なぜわかったのだろうか。俺が倒れるほどのナニカを見た。

「……ピンポイントすぎる件について。」

「そりゃあね。だって、いつも以上に目が…ね？」

「いや、ね？じゃねえよ!?え!?俺眼エ腐ってたっけ!?それなんて八幡!」

と、フランの指摘に俺が慌てふためいていると、フランはコロコロと笑い、

「じょーだんだよっ!てしっ!」

「あだっ!」

デコピンを食らわした。もちろん躲せる筈もなくモロに食らう俺。

「…カマかけたのかよ…」

「うん。だって白狼素直じゃないし。つていうか自分が素直になる事を嫌ってる節があったし。普通に聞いてもわかんないかな〜つて。」

……なんともまあ、ピンポイントな対策である。しかし、暴かれたことに変わりはない。

い。今更誤魔化す事も出来ないだろう。

「……地獄を見た。」

「え、エミヤくん？」

……どうやら俺の第一声が悪かったようだ。

「いや待て。俺が悪かったから真面目に聞いてくれ。」

と俺が言うと、フランはさりと、次のように言った。

「ま、白狼が見たのは、この世界がどれだけ脆いのか、という現実、でしょ？」

「っ……わかる……か。そうだよな。フランも、”壊せる”んだから。」

「うん。ずうーつと前から見てきたよ？だから、大丈夫。慣れる、なんて言わない。で

も、悪いことは言わない。ザ・ワールド・アイズ 世界 眼は、いざという時にしか使っちゃダメ。そうじゃな

いと……狂っちゃう。白狼が。」

……もちろん、わかっている。アレが、そういうものだ、ということくらい。だが、俺
が倒れたのは、それだけではないような気がした。

「……？白狼？」

「……フラン、いざって時は、頼む。」

「え？」

フランが詳細を聞くよりも早く、俺は再び、

「白狼、待つー」

「【世界 ザ・ワールド・アイズ 世界眼】。」

次の瞬間、俺の世界は再び変わった。

「これは……っ！」

見るだけで頭が痛くなる。脳髓が焼き切れそうだ。体が熱を帯びていく。代わりに、頭の中に数多くの情報が流れ込んでくる。その流れは、津波のように押し寄せ、留まるところを知らない。

「あ、が、ああっ！ぐ、うっ……」

呻いたところで、処理速度を超えた速さでやってくる情報の波は止まらない。

「こ、の、っ……く、創クリエイト・ウォール壁」ッ！」

前を睨み、靈力による壁を創る。バヂイッ！と弾ける音がし、流れはせき止められた。

「はあつ、はあつ、はあつ、……はあー。……なるほど、そういうことか。世界を”続べる”、つてんなら、世界の全てを知つてろつてことかよ。そりやあ狂うわ。人間の脳に入る量じゃねえ。……けど。入れなきや使えねえつてんなら、入れれるくらい、容量を増やすだけだ！」

ピシリ、と壁にヒビが入る。そして、すぐに決壊し、再び流れ込んでくる。

もう、準備は万端だ。

「来やがれ！全てを知つてやる！」

そうして俺は、世界を知った。

そう。世界において、いいや。この世界において、俺はなんでも知つていることになった。……どこの臥煙さんだろうか。おれの過去も、もちろんあった。が。

「……明らかに食い違つてやがるな。俺の知る記憶と。」

幻想入りした日、あの日の記憶が、世界の内容と食い違っているのだ。

記憶の中で、俺は学校の帰り道に幻想入りした。

しかし、

世界の記憶では、

俺は、何者かと戦い、その後、家に帰る道で幻想入りしている。

「……………どうやら、やってくれた奴がいるらしいな。」

まだ、終わっていないかったのだ。あの日、俺の世界のゴタゴタは。

Fake usual days

全て、嘘だった。

「白狼？」

「……ああ。」

俺はぼんやりと、フランを見る。おそらく、俺の眼はさらに濁っているだろう。

「っ……何を、見たの？」

「……俺自身の、記憶。そして、俺の世界に記された、世界の記憶。」

合致しない記憶。

「嘘だった。俺のあの日の記憶は誰かに改竄されていたんだよ。」

「……そう、なんだ。……どうするの？」

俺の言葉に、フランは再び問う。俺は。

「あ？まあ、そうだな。犯人と話さなきゃな。何故やったのか、とか。」

今度の俺は、沈んだ顔から打って変わって、悪い笑みを浮かべていた。

「……さて。スペカよし、スマホよし、……うん。準備はできた。……ま、みんなに言うてねえけど、いっか。こっからは俺の聖戦ケンカだし。」

「いいえ白狼。私たちの聖戦ケンカよ。」

そう言つて、俺の隣に並び立つフラン。そしてストライク・○・ブラッドネタの応酬。

「いや、ネタにネタで返してくれるのは嬉しいけどさ、なんで来るん？」

「だって、白狼の記憶でしょ？私のは白狼私と私たちのもの。白狼のものも私たちのものだもん。」

……人類じゃないけど最新のジャイヤニストの誕生だった。

「ええ…（困惑）でもさ、危険だし…」

「そんな危険なところに白狼一人だけで、心配するなっていう方が無理だよ？」

「くっ……」

ああ言えばこう言う。全く、こんな対応の仕方を一体誰に習ったんだか……

「……はあ。」

でもまあ、結局。

「わかったよ。一緒に来てくれるか？ フラン。」

「勿論。いつでもそばに。」

俺が折れるしかないんだよなあ……いつも、俺もわがまま言っつて、フランを困らせてるわけだし。さあ、行こう。

「創符

ザ・クリエイティブ・アイズ
創 世 眼」

クリエイティブ・ゲート
「創・門」

俺たちの前に、大きな門を”創る”。これは、俺の生まれた世界へと繋がっているはずだ。

「……用意はいいか？」

「うん。いつでもいいよ。」

「よし、じゃあ、開けるぞ。」

そう言っつて、俺とフランは門を開け、中へ飛び込んだ。

長く、永く降りた先に、光が溢れ、俺たちを新たな世界へ導いていく。

「！そっういえばフラン！」

「何?!」

「お前、太陽の中でどうやって活動するつもりだ!？」

「大丈夫！んっ！」

そう言つてフランは手を握り、パリン、と何かを「壊した、;。」

「!何を”壊した、?”」

「ん？私が太陽の下で活動できないっていうルール、かな？」

……我が恋人ながら、チートである。まあ、同じような力を、俺は持っているのだが。

と、そこで、長いコースターも終わりのようだ。

「フラン！そろそろ着くぞ！」

「うん！」

白い光が視界を覆い、次の瞬間。俺たちは——

「……………どこだ(こ)。」

あたりが吹き飛んだ世界に立っていた。…いや、遠くに街が見える。どうやら俺たちが衝撃波でやってしまったらしい。

「なあ、フラン。」

「なあに？白狼。」

「とりあえず、……………殺すなよ？」

「……………あはつ。大丈夫だよ。遊び方は知ってる。」

周りには、銃器を向けて来る空飛ぶ人々。(主に女性)…どうやら俺たちは。

「まあだろうと思っただけど、違う世界かよ!？」

目指した世界とは違う世界に来てしまったらしい。

さあ、第二幕の始まりだ。これより始まるのは、希望が真実^{ほんと}へ手を伸ばす物語。その舞台は…決して、一つだけの世界に留まらない。

東方希望録

シーズン2。

メモリーズ・チエイサー
記憶を追う者

開幕。

番外編など。

一周年記念!

はい。一周年です。

早いものですね。今はシーズン1が終了し、シーズン2に入っています。

今まで他人のために戦い続けてきた白狼が、シーズン2で自分の為に戦っていきま
す。

「おつす。きてたか、作者。あとはお前だけだぞ。」

ああ、白狼。

「読者さんに挨拶か?」

まあね。感想とかお気に入り登録なかったらもうとつくにやめてし。

「まあ実際一時期放置してたしな。」

ぐつ…ま、まあ、続けたらたくさんの方々に読んでいただけたんだし、続けた方が正

解だつたんだよ。

「そりやそうだ。継続は力なり、だぜ？」

あれ？うちの白狼こんなに前向きだつたかな？

「バーロー。俺は他人に物言う時はこんななんだつつの。」

……まあいいか。よし、そろそろ行こうか。宴の準備は？

「誰に物言つてやがる。無論完璧だよ。」

さすが希望。……じゃあ行こうか。

「おう。このために用意した、さいつこうの宴だぜ！」

「白狼——！」

「おうフラ……げふっ!？」

おおつとやづきくんふつとばされたー!!

「相変わらず、フランは白狼にかなり懐いているのね。」

「まあ、実際恋人だし。」

お、レミリアにパチュリー。

「久しぶりねえ、作者?」

れ、レミリアさん?なんでそんなに爪立てていらつしやるのですか?

「え?別に気にしてないわよ?貴方が戦闘シーン書くと大体技名ばつかですぐ終わることなんて。」

わざわざ言うつてことは気にしてるつてことなんじゃ…つてぎやあああ!?やめて!俺は白狼みたいな能力無いから!咲夜さああああああん!

「知りません。作者など。」

!?くつそう!白狼…はあれ襲われてる!?(意味深)に!いや、待つて待つてそれ書けないよ!?ちよ、フラーン!それはダメだから!

「さ、作者…助け…んむ…ちゅ…」

「へへ…しろお?」

やばいやばいやばい!おい誰だフランに酒盛つたの!

「いやあ、少しだけのつもりでしたが、妹様大分我慢してたようですねえ…」

こあ…お前かあああ!

「てへ☆」

てへ☆…じゃねえよ!?どーすんだよこれ!一周年だよ!?これ書いてんの大晦日だけどお正月は四日前だしクリスマスなんてもう過去の彼方だよ!?性夜(笑)を今更やろう

とすんなよ！

「く…フラン…すまん、希望【ウィザード】！」

(スリープ・プリーズ)

おお…フランが寝た。…ふう。

「つたく…ひでえ目にあつた。」

「役得の間違い…いえ、本望の間違いでは？」

「少なくとも今じゃねえだろ!？」

……はあ。いや、疲れるね。ホントに。

「ああ。分かってもらえたか？」

そりやもう。

でも、ここが白狼の居場所だからな？

「わーってるよ。居心地は最高だしな。願われたってこの立ち位置は譲ってやんねえ。」

…うん。しつかり、みんなを守るんだよ？

「当たり前だ。なんなら、別の世界だって守ってやるさ。」

……コラボしろと？

「……やつてもいいぞ？」

……というわけで！これからも白狼とフランの物語は続きます！できれば、目を離

さないでいただきたい!まだまだ拙い文ではございますが、頑張っていていきますので、どうかお付き合いいただけたら幸いです!

「おい作者!ケーキ切るぞ!こねーとハブるからな!」
ちよ、待つてよ白狼!!

祝・10000UA達成記念！

どもども！異人ですー！

「皆の希望、夜月白狼だ。」

「希望の恋人、フランだよー！」

いやー、びつくりしましたね。

「まあ、そうだな。シーズン2行つてから、ずっとちよこちよこ更新してたら、何故かこつちも微量ながら伸びてた訳だし。」

「まあでも、分からなくはないけどね。シーズン2を初めて読む人が、シーズン1から読もうとする、とか。」

ま、まあ、どういう理由であれ、伸びるのは嬉しいことです。

「でも、驚くのはよくそんなに読む人がいるよなつてことだ。紡ぎ手の国語の成績、まあ学年で上から数えた方が早いっちゃ早いけどさあ、文章を書く力とはまた別物だろ？」

うう…

「戦闘描写はまだ下手だしね。つていうか同じ高校生なのに某ぼんどり？つていうのの

小説書いてる人の方が圧倒的に伸びてるし。」

何!?! 二人して俺の心折りに来てない!?! 白狼の過去設定ある程度俺に近くさせてるんだけど!?!

「んな事言ったって、お前の髪は普通の黒髪だし、能力なんてないし。大抵少しいじめられてたつてくらいしか合っていないだろ。」

うつ…

「ま、さらに言うなら砂糖をもっと増やそう?。」

「ちよつと待て!。」まっつて!?!

「フラン、流石にそれはな?。」

俺が恋愛経験リアルでは無いから正直何書けばいいのかさっぱりなんだよ!

「じゃあデアラとかなんで書こうと思ったの?。」

それは勿論、白狼とフランの異世界冒険の最初の世界としては、うってつけだったからさ。

「へえ、どの辺が?。」

デアラだと、そんなに報われなくて死ぬやつとかはいないんだよね。ジェシカ(原作7巻で真那とスカーレット・リコリスに乗って戦って殺された人)もまあ、アレは何となく満たされてるっぽいし、そもそもアレウエストコット倒せば終わりだし。

「精霊の皆は？」

美九はアレ失くすとしてもそもそも精霊になったとしてもヤンデレ化するかもしれないし、七罪に関してはやっぱり依存するかもだし、折紙に至っては最初から原作11巻の改変後折紙になるし…

「迂闊に手え出せないのな…」

「…あれ？じゃあ私達が介入する必要無い…？」

ま、極論言いますと。でも、白狼の旅の始まり。その為の世界。それが、デアラの世界。

「始まり、ねえ？ちなみに他の世界への予定は？」

んー、とりあえずデアラはアニメの内容と、ゲーム3作。その間に色々バラして、次の世界へ。

「で、そこは？」

…赤い弾…いや、緋色とだけ言っておこう。

「…おk、察した。でも、あそこで何するん？」

弟子を見つめます。

「あー、その制度の為か。ってことはAAか。」

「何の話？」

弟子を見つけたら別の世界へ。次は…もういいかな？

魔法…いや、魔砲の世界です。

「あー、アレな。あれは確かに、救わなきゃいけない人たちがいる。あの母親とか、その娘とか、とある兄貴とか。その世界はほんとに大盤振る舞いすることになりそうだ。」

で、シーズン2最終章前ラスト。この世界は…

ワルプルギスの夜。

「よし…よしっ!」

「白狼がこんなにする気になってるの久しぶりに見たんだけど、そんなにやばいの?」

「簡単に言うと、どのルートを通ろうが現れる最凶最悪のラスボスなんだがな?とある少女の犠牲でしか倒せない負けイベ確定ボスって感じた。」

「うわなにそれクソゲー?」

ま、まあORTよりましでしょ?

「あれはもう誰でもアウトだよ…でも、あの世界か…やりがいがある。1番救いが必要な世界だからな。」

で、今までの世界をハッピーエンドにしたら、いよいよ。

「元の世界。俺の生まれ、育った世界、か。」

…(頷き)

「記憶をいじった犯人…一体誰なんだ…?」

ま、それは今書いてるデアラの最後の方でね?

「()で言っちゃいけないの?」

…じゃあヒントを。朝と夜の間、太陽と月の間、白と黒の間。草食動物と肉食動物の間。この全ての間に当てはまる漢字1字を合わせると、その者の名前になります。

「めんどくさ。っていうか、最後のやつ誰かわかるのか?」

ま、分からなくても俺のツイッターから白狼のアカウント見れば大体分かるんですけどね。

「あーそういうえげーなんであつちでは私とくつついてることになってないの!」

いやだって別世界ですし…フランを見つけて、フランと一緒にになったならまだしも…

「さっさと見つけなさい!」

「いや待て!そこで見つけてもこのフランと俺とは別人だからな!」

「うう…」

う、うーん、だいぶグダグダになったけど、こんな感じですよ!100000UA、ホントに嬉しいし、感謝してます!また祝い事等があったら、ここでまたお祝いするので、是非是非、お友達などにも勧めてくださいいね!

「紡ぎ手は単純だからな。応援してやれば、サクッとやってくれる。ま、期待するかは任

せるけど、良ければしてくれ。全部救う話を、紡いでくれるはずだ。」

うわぁ…ハードルあげるなぁ…

「でも、やりたいんだろ?だから、俺達を”創った”、。違うか?」

…違うないよ。さあ、じゃあ、救おっか。

「おうー!」「うん!」

さあ、ここからは俺達の!

「シヨータイムだ!」

四月一日、甘い嘘

それは、突然だった。

「……ガウ？」へ……え？」

朝、目が覚めたら……体が狼になってしまっていた！

「わ……わ……ワォーン!？」へな……な……なんじゃこりやああああ!？」

「む……白狼、どうし……あ。成功したんだ……げふん!……どうしたの!？」

同じ部屋に寝ていたフラン。フランは俺が狼になっていることに驚き、駆け寄ってくる。その際、狼になったこと以外におかしな所がないか調べられる。

「……ああ……白狼がもふもふだあ……」

……その際、フランが変な声を出していたのは聞こえていない……聞こえてない……聞いたら聞こえてない……

「……ふう、満足した。さて、誰が犯人か、調べないとね！」

「……ガアウ……」へ……そうだな……なんて言うか、もう疲れた……」

正直言って、休みたかった。1秒に5回くらいもふつてくるんだぜ？正直恐怖だわ……しかし、この体をこのままにしておく訳にもいかない。急いで犯人を突き止め、この

状態から脱出せねばならない。

ここから、俺とフランの戦いが始まった。

沸きに沸く妖精達。全員が何故か猫耳をつけていたのは謎で、可愛かった…げふん！

恐怖だったが、それにも負けず、フランと協力して先へと進む。

「あら…見慣れない狼ね。ペットにでもしようかしら。」

「！お姉様…」

レミリアが立ちふさがった！白狼達はどうする？

↓たたかう

スベル

どうぐ

にげる

白狼の攻撃！

レミリアに50のダメージ！

レミリアの攻撃！

痛恨の一撃！

白狼はひらりと身をかわした！

フランのレーヴァテイン！

会心の一撃！

レミリアに41のダメージ！レミリアを倒した！

白狼達は4100の経験値を獲得!

白狼はレベル1からレベルXにレベルアップした!

フランはレベル495からムテキにレベルアップした!

レミリアは宝箱を落とした!

白狼達は宝箱を開けた!

そこには、なんと!首輪が入っていた!

白狼に装備させますか?

↓はい Yes! Yes! Yes!

フランは嫌がる白狼に無理やり首輪を装備させた!

先へ進む俺と飼い主のフラン。…え?なんか増えたって?君みたいな勘のいい読者がいてくれて助かる。(ローウエン感) まあ、その先にいたのは。

「P様の元へは行かせません…」

「ガウ!」(押し通る!咲夜!)

メイドの咲夜が現れた!

白狼達はどうする?

↓たたかう

スベル

どうぐ

にげる

白狼の攻撃！

咲夜はすでにそこにはいなかった！

フランのレーヴァテイン！

咲夜はひらりと身を躲した！

咲夜の「幻世【ザ・ワールド】！」時は止まる！

咲夜の殺人ドール！白狼に778のダメージを、フランが防いだ！フランに0ダメージ！フランはムテキで、時止めが効かない！

フランの攻撃！

咲夜に9610ダメージ！咲夜を倒した！時は動き出した！

白狼達は7538315の経験値を獲得！

白狼はレベルXからレベルXXにレベルアップした！

フランはムテキのためレベルが上がらない！白狼に与えた！

白狼はレベルXXからレベル99にレベルアップした！

咲夜は宝箱を落とした！

白狼達は宝箱を開けた！

そこには、なんと！

猫耳ヘッドがあった！フランはこっそり白狼からそれを隠し、手に入れた！

白狼達はさらに進む！

「ここから先へは行かせませんよー！」

「グルアー！」へこあ…でも、俺たちは止まらないんだ！〜

小悪魔こあが現れた！

白狼達はどうする？

↓たたかう

スベル

どうぐ

にげる

白狼のマキシマムクリティカルブレイク！

こあはひらりと身を躲した！

こあのエナジードレイン！

白狼に99のレベルダメージ！

白狼のレベルがレベル1まで下がった！

フランのスターボウブレイク！

こあに114514ダメージ！こあを倒した！

白狼達は1の経験値を獲得！

こあは宝箱を落とした！

白狼達は宝箱を開けた！

そこには、なんと！あやしいクスリが入っていた！

フランはこっそりゲットした！

「…がう…」へここが、ラストのようだな…

「そうだね、白狼。でも、私達なら勝てるよ！」

二人はドアを開けた！

「…待っていたわ希望そしてその恋人（棒）」

「白狼を元に戻してもらおう！いくよ、白狼！」

大魔女パチュリーが現れた！

白狼達はどうする？

MP 10 Lv. 1

白狼 HP 50

フラン HP ムテキ

MP ムテキ Lv ムテキ

たたかう ↓スペル

どうぐ にげる

白狼の攻撃！

パチュリーはひらりと身をかわした！

フランのムテキレーヴァテイン！

パチュリーは白狼の隣に転移した！フランは白狼を巻き込めない！攻撃を中断した！

パチュリーのロイヤルフレア！

白狼に49のダメージ！

ミス！フランはムテキで、ダメージを与えられない！

「やはりムテキの力は厄介ね…なら。」

パチュリーは転移した！パチュリーのエナジードレイン！

フランのレベルがどんどん下げられていく！

「ガ、ガウー」へふ、フラン！

白狼はダメージで動けない！

「し、白狼…受け取って！」

フランのレベルトランス！白狼とフランのレベルが入れ替わる！

白狼	HP	1	MP	10	Lv.	??
----	----	---	----	----	-----	----

フラン	HP	50	MP	10	Lv.	1
-----	----	----	----	----	-----	---

「…？レベルの入れ替え？ムテキでないなら、一撃で終わるじゃない。」

白狼達はどうする？

P 10 Lv.??

白狼 HP 1 M

10 Lv. 1

フラン HP 50 MP

たたかう スペル

↓どうぐ にげる

どうぐ?

↓ハイパームテキ 首輪【E】

白狼はハイパームテキを起動した！白狼のレベルがムテキになる！

「…な…なんで狼のあなたが…」

「…ガウ。」へさあな…でも、俺は元に戻る！その為の力だ！」

パチュリーは驚きのあまり動けない！

「ガウガウ！」へフィニツシユは必殺技で決まりだ！」

白狼のハイパークリテイカルスパークング！

究極の一発！

パチュリーにムテキのダメージ！

パチュリーを倒した！

白狼達は2018401の経験値を獲得!

白狼のレベルはムテキのためこれ以上上がらない!フランに渡した!

フランはレベル1からレベル495にレベルアップ!

パチュリーは宝箱を落とした!白狼達は宝箱を開けた!

そこには、なんと!

紅い猫ドレスが入っていた!フランがゲットした!

戦いは終わった。諸悪の根源、パチュリーを倒し、世界は救われた。

「白狼…やったね。」

「ガウ。」へだな。…まだ治らないけど。▽

「…ねえ白狼、ちよつと、目を瞑っててくれる?」

「…くうん?…わふ。」へ何だ急に?…まあいいけど。▽

そういつて、俺は目を閉じる。その後。額に、柔らかな感触。

「!が、ガウ!」へふ、フラン!▽

「ふふ。白狼、知ってる?呪いってのはね、お姫様のキスで治るものだよ?」

言うのと、俺の体はボン!と煙に包まれ、煙が晴れると、俺は人間に戻っていた。

「…わお。」

「よかった!」

フランは喜びの声とともに抱きついてくる。なんとか抱きとめ、
「…おう。」

「うん。じゃあ、白狼、行こっか。部屋に。」

「…? まあ、いいけど。」

その時、俺は気づかなかった。フランの手にある、戦利品に。

部屋にて。

「…さて白狼、これ飲んで？」

「…これは？」

「いいからいいから！」

グイツとクスリを飲まされる俺。まあ吸血鬼に反抗できるはずもない。そして、案の定熱くなる俺の体。

「…? がああああ!! フラン、なんだこれ…っ!？」

「? なにつて…B薬だよ？」

何食わぬ顔で言うフランは紅い猫ドレスに、猫耳をつけて、猫のような仕草をしていた。

「…白狼、猫好きだよね？」

「う……あ……」

「私に、イロイロ教えてね、白狼？」

………永い夜は、まだ続きそうだった。

「みたいなお話、白狼書いてよ！」

「出来るか！」

使用者く 【追想】 外の世界く

11月10日。朝日狂華が夜月白狼の為に動き始めた日。私こと昼地灰人は、いつも通り登校していました。察しのいい方ならもうお気づきでしょうが、昼地とは、朝日、夜月と関わりがあります。昼とは朝と夜の間。地とは地球を指し、太陽…日と月の間。まあ、これだけ言つても漠然としすぎていると思います。

軽く説明すると、朝日と夜月は互いを相手に結婚することは出来ませんでした。〈能力〉^{ちから}が消える可能性があったからです。しかし、私達三人よりもずっと前の代において、互いが惹かれあつてしまいました。

両家はもちろん許しませんでした。ならばと、二人は当時の当主であつたにもかかわらず、駆け落ちして家庭を築きました。それが、昼地家です。ただの一族…なら、良かったのですが…

「……今^{ユイ}、使用^ス、く。」

私の一族は、”使う、能力を得ました。全てを達人級に扱うことができるようになる絶対使用能力。”創造、と”破壊、の狭間にあるモノ。それがこの”使用、です。

”使う、モノに制限はありません。触れさえすれば、人であれ、物であれ、”使う、

ことが出来ます。

「かーいとおつ。」

「!…何ですか…朝日黒兎。」

私の前に現れたのは、朝日黒兎。朝日狂華の男装した姿で、私以外にはバラしていません。バレているのは彼にのみなのですが。

「ちよつと話があるんだ。朝日として。」

彼女は真剣でした。ならば、私も毅然として対応します。

「…わかりました。」

私達の学校では屋上に入ることができません。…本来なら。

「朝日狂華。ヘアピンはありますか？」

「もちろん、はい。」

「ありがとうございます。…ユー使用ズ。」

ヘアピンを受け取り、ドアの鍵を軽くピッキング。

「さつすが灰人。」

「受け継いだけいです。さ、早くしましょう。」

「だね。」

私と朝日狂華はそそくさとドアの向こうへ入りました。晴れ渡る空。とても綺麗

だったのを、覚えています。

「それで、話とは？」

「…灰人はさ、今の白狼、どう思う？」

やはり、彼のことか、と思いました。朝日狂華は、夜月白狼のことが好きなようです。…いつかの両家のように。

「どう、と言われましても、彼の自業自得だったのでは？」

「そんな言い方！」

「事実でしょう。夜月白狼は一人で抱え込むだけ抱え込み、私達を頼らなかつた。だから今の状態ができた。…違いますか？」

「っ…」

彼は、頼られることに飢えていました。しかし、彼の性格、容姿、といったところから、クラスでは軽いいじめを受けていました。私達は親に動くな、と言われていました。助けられるのに。手が届くのに。伸ばすことさえ、許されなかつた。

「私は…白狼を助きたい。」

「でもどうするんです？直接手は出せませんか？」

私の問いに、彼女は笑って、

”壊す、の。全部。”

「…本気ですか？彼がそれを望むとでも？」

「知らない。でも、これは私が白狼に贈るバースデープレゼント。」

そう言う彼女の顔は、彼がなんと言うのか、明らかに分かっている顔でした。

「…なるほど。で、私にも”壊れて、”もらう、と？」

「バカ言わないで。昼地家は白狼に何もしてないでしょ。」

彼女の根底には、彼がいます。朝日狂華は^{夜月白狼}〈華〉の為になら、狂いもする、そういう

人でした。

「昼地家には、別の世界で生きてほしいの。この世界じゃない、どこかで。」

その目には、願いがこもっていました。私には、彼を食い物にした世界に興味なんてありませんでした。しかし、昼地家として、となれば話は別です。

夜月、朝日、昼地。この三家で有事の際は守るのです。その柱の一つを無くすつもりなのです。この女は。

「…貴女が、世界中の人を”壊して、”私達を”壊し、”に出来ない保証は？」

「…私、そんなに信用ない？」

「一応私も守る側……でしたからね。」

「そう……じゃあ約束。私は灰人とその一族に手は出さない。」

灰人も、私の邪魔をしない。これが契約内容。……乗る？」

「……ええ。ああでも、一度だけ、夜月白狼と接触させてください。やっておきたいことがありますので。」

その提案ならばと、私は朝日狂華と契約しました。

互いの不可侵を。……いいえ、共犯を。

全ては、あの優しき少年の為に。

いつかの11月17日

これはいつかの俺の誕生日のお話。

「ふぁ……………」

自分一人だけのベッドでいつも通り目を覚まし、いつものようにソシヤゲのログボをもらい、目を軽く擦りつつフラン達のところへ向かう。

窓の少ない紅魔館の廊下は薄暗く、歩いていて少しばかり怖い。

「あ、おはよ、白狼。」

後ろからかけられる快活な声。外の世界で、何度も聞いた明るい声。

「おあよ……………狂華。」

「うん。ちゃんと起きてるね。」

赤い瞳、そして、太陽の黒点のように黒い髪。俺と能力を巡り争った少女、朝日狂華がそこにいた。

「ちゃんとしてなんだよ。」

「だって、時々白狼寝ぼけてる時あるんだもん。」

それを言われると痛い。

「ま、それも白狼らしいと言えばらしいんだけどね。」

「なんだよそれ。」

もう暫く繰り返し広げていなかったこういう会話。今更になって気づく。俺はこういう日常を望んでいたのだと。

特別なことなんていらぬ。ただ誰も傷つくことなく、傷つけることもなく、笑って、幸せを享受出来るような、そんな日常を。

「そこで何をしているのですか、夜月白狼、朝日狂華。」

すうっと入ってくる平坦で、かつ温かさを秘めた声。

「いつもの挨拶をしてただけだよ。灰人。」

浮かべるは微笑、何の変哲もない目。そして、灰をかぶったような灰色をした髪。最後の親友、昼地灰人。

「全く……ここで話すのもいいですが、朝食があるでしょう？ここで立ち話をするより、食堂でした方がいいと思いますかね？」

「あ、やべ、そうだった……」

言いつつ、笑う。取り戻したのだ。三人の世界を。勿論、あの頃のままではない。俺

はいろんな世界を見てきたから価値観や考え方が変わったと思うし、狂華達も、俺の事だけを気にすることはなくなった。

すごくいい傾向だと思う。

「あら、親友三人揃って来たわね。」

既に席につき、こちらを見て笑うのはこの紅魔館の主、レミア・スカーレット。

「ま、親友だしな。」

「それで恋人を放っておくのかしら？」

「んなつもりはねえ。だけどほら、俺はまだ17だし…元々同衾するのがおかしかったんだよ。まだ早かったんだ。」

「そういつて、ホントは照れてただけでしょ？フランちゃん大分残念がってたよ？」

と、隣で狂華が俺の脇腹を肘でつつきつつニヤリと笑う。相変わらず小悪魔的な奴である。

「……確かに、俺が恥ずいってのもある。けど。まだ結婚もしてねえのに…」

「あら、結婚してたらいいの？」

「結婚?! 良いですねえー!」

結婚、というワードに反応して本から顔を上げるパチュリーとそばに控えていた小悪魔のこあ。

「まあ、それならば問題解決ですね。」

「あ？なんで。」

突然、灰人が隣で笑う。

「貴方はことある事に日本の法律を持ち出します。つまり、結婚には18歳から……という事ですすね？」

「あ？ま、まあそうだけど……？」

「夜月白狼、貴方は今日がいつか知っていますか？」

「え？そりやあ……11月17日だろ？」

と、軽く返す俺に、灰人はため息混じりに、

「貴方の誕生日ですよ。忘れたのですか？」

「……………は？」

そう。この時、俺は完全に忘れていた。今日、11月17日が俺の誕生日である事を。

「……………」

「完全に忘れていたようですね……」

咲夜は苦笑する。

「まあまあ。私達妖怪も正直自分の誕生日曖昧ですし……」

美鈴がフオローしようとするも、正直できてない。というかちやつかり俺を人間卒業

枠に入れているあたりいつもどう思っているかが分かる。

「まあでもとにかくこれで結婚できるわけだな？」

レミリアが問う。

「ええ。日本の法律上は。後は…本人達の気持ち次第です。」

灰人がそう言った、その瞬間。

扉が開く音がした。

「しろー……………」

いつもとは違う低い声。その声に、俺の中の警鐘は最大音量で鳴り響く。

「お誕生日おめでとう。今日で何歳？」

「じ、じゆう、はち……………」

ガシツッ！と肩を掴まれる。背後からの恐怖で元々動けないのに、吸血鬼の力で掴まれてはもう逃げ場は無い。

「ねえ白狼、もういいよね？ずつとお預け食らってたんだもん。ちゃんと我慢できたんだから、御褒美くれるよね？」

耳元で囁かれる甘い声。こういう時は女声の武器を最大限利用してくるのだ。

「え、えと、御褒美とは…」

何を、までは言わせてもらえなかった。

フランは周りも気にせず、グイツと俺の体をフランに向けさせ、口を塞いできたのだ。
「っ!? むー!?」

「ん…ちゅ…は…」

「わお大胆。」

「咲夜、何も見えないのだが？」

「お嬢様には見せられません。」

恐怖と快楽と嬉しさと。色んなもので脳内をかき混ぜられた俺はどうすることも出来ず、口の中を蹂躪される。

しばらくして、満足したのかフランは口を離す。俺とフランのあいだには唾液で出来た橋が現れ、消えた。

フランの顔は少しばかり朱に滲み、口元は先ほどよりも増した笑み。

対して俺は…多分、かなり赤くなっていることだろう。まだ目も回っている。

「白狼。誕生日だよ。」

「…あ、ああ。そうだな…」

「今日は、白狼の為の日。紅魔館の皆も、白狼の親友二人も、皆白狼の為に動いてくれるの。」

「そ、そうなのか…？」

フランが俺の腕を掴んだまま力説する。少しばかり俺よりも体温の高い手が、俺の腕を暖かく包む。

「そう。だからね、咲夜は今夜、私達の部屋の近くに誰も来ないようにしてくれるし、灰人や狂華も今日から別の部屋に寝泊まりしてくれるし、パチュリーも、直上の部屋からの音も気にしないって言ってくれるの。」

「………おかしい。俺の知っている誕生日とは、こうも俺たちに都合のいいようになる日だっただろうか。…いや、俺というか、フランの都合、と言った方が正しいが。」

「そうなのか……や、まあとりあえず飯を……」

「だめ！ちゃんと言ってもらうの！」

ぎゅう、とフランの手に力が入る。

「夜月白狼。もうチェックメイトですよ？」

「白狼、これ以上は失礼だよ。もう、自分に正直になつていいんじゃない？フランちゃんは、白狼をちゃんと見てくれてる。白狼の想像してることは、絶対に起きないから。」

二人が、背を押してくれる。

「…俺は…」

俺は、あの世界で多くの傷を負った。生まれつきの外見や、性格で。偶然によつて世界が揺れた。親友を一度失った。ここに来て、多くの人妖と出会い、俺を助け、成長させてくれた。別の世界を巡り、俺の能力を個性のひとつとして捉え、「都合のいいもの」として扱わない人達と出会つて、俺があの日やったことが間違いでないことを教えてくれた。そして、今。俺という人間を一人の男性として見てくれる少女がいる。少しだけ子供っぽくて、無邪気で、澆刺としていて——とても綺麗な少女が。

そんな少女にここまでストレートに愛情を注がれて、分からないはずがなかった。そして、好きにならないはずも無かった。もう、答えは出ていた。ただ、俺が怖がつて、恐れて、遠ざけていただけ。胸中の氷も、頭の中の靄も、もうどこにもない。あとは、この想いを伝えるだけ。

「…俺と、ずっと、きつい時も、悲しい時も、居てくれるか？」

嗚呼。ここで、居てくれ、とか、居ろ。と強気に出れないのはもう性分なのだろう。けれど。

「…うん！楽しい時も、嬉しい時も。どんな時だつて、離れてあげないんだから！」

彼女は、受け入れてくれる。俺が悲しい時はそばに来て慰めてくれる。楽しい時は一緒に楽しむ。喜ばしいことは一緒になつて楽しむ。挫けそうな時は、励ましてくれる。

どんな時だって離れずに、俺を支えてくれる。

俺はこの子に、何を返せるだろう。どうしたらいいのだろう。何を以てこの愛に報いれればいいのだろう。

「…もう。こういう時くらい、白狼から抱きしめたりキスしたりしてよ。」

「あ、わ、悪い…どうしたらいいか、分からないから…」

「ふふっ…しようがないなあ、白狼は。じゃあ、教えてあげる。」

フランはいつも通りの笑顔で、

「白狼のしたいようにするの！好きな時に抱きしめていい。好きな時にキスしたり、手を握ったり、頭を撫でたり。好きなタイミングで、ここだと思ったタイミングで。私に好きって気持ちを表して欲しいの。それでいいの。」

「…」

「だからほら、やってみたいこと。今したいこと。」

フランが両手を広げ、待つ。

俺は

夜。吸血鬼にとつて、最も活動する時間帯。

紅魔館の地下、図書館に、昼地灰人はいた。

「…さて、上ではお楽しみ中なのでしょうね…」

「そうね。妹様の積極性はすごいもの。というか、白狼が消極的にすぎるのよ。」

「言えていますね。しかし見た見た目通り、夜月白狼は一途でロマンチストですよ。」

「まあ、彼に浮気は出来ないでしょうね。嘘下手だし。」

「ですねえ…」

灰人はいつだったか、白狼の”創った”、ライトノベルを本棚から取り出し、ページをめくる。しばらくすると、天井から少しばかり軋む音がした。

「始まったようですね…」

「……」

パチュリーは無言で指を鳴らす。すると音がピタリと止んだ。

「…魔法ですか？」

「ええ。あの音を聞きながら読書なんて、出来ないもの。」

少しばかり顔を赤くして言うあたり、パチユリーも乙女なのだなあ。と、灰人は思った。

「お誕生日、おめでとうございます。夜月白狼。貴方のこれからの道に、人としての生に、多くの幸せがあることを。私と朝日狂華は、願っていますよ。」